

ISSN 0918-3035

総社市埋蔵文化財調査年報 7

(平成 8 年度)

1997年9月

総社市教育委員会

序

総社市は古くから栄えた歴史ある地域であり、吉備の中心地といわれています。

吉備路には作山古墳・こうもり塚古墳・備中国分寺・同尼寺跡などの重要な遺跡が集中しています。さらに、総社平野の背後には謎の古代山城として有名な「鬼城山」があり、平成6年度から発掘調査を実施しております。平成8年度においても整備委員会の諸先生方の御指導をいただき、第3城門跡の調査を実施し大きな成果があり、多くの研究者、見学者の方々に深い関心をいただきました。今後さらに内容の解明や整備に努力していきたいと考えております。

市内には、まだまだ解明しなくてはならない遺跡や後世に守り伝えなくてはならない文化財が数多く存在しており、その責務を日ごろ痛感しております。

このほかにも調査で得られた多くの資料が、文化財保護と理解を深めるうえで役立てれば幸いであり、報告書の作成にも力を注いでまいりたいと考えております。

最後になりましたが、関係各位には格別の御指導、御協力を賜り厚くお礼申し上げますとともに、今後とも一層の御協力を賜りますようお願い申しあげます。

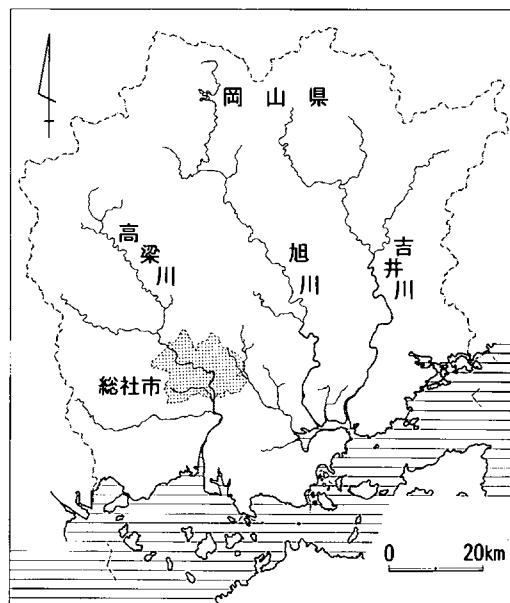
平成9年9月

総社市教育委員会

教育長 秋田皓二

例　　言

1. 本書は、総社市教育委員会が平成8年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会確認調査等について、その概要をまとめたものである。
2. 本書は、それぞれの調査担当者である村上幸雄、谷山雅彦、武田恭彰、平井典子、前角和夫、高橋進一、松尾洋平が執筆し、それを編集したものである。それぞれ文末に執筆者名を記し、文責とする。全体の編集は谷山が行った。
3. 遺物整理及び資料の整理にあたっては、西平登代子・近藤雅子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は特記するもの以外は海拔高で、また遺構実測図の方位は国土座標の入っているものと特記するものを除き、すべて磁北である。
5. 本書に使用した地形図は特記するもの以外は総社市発行のものを複製したものである。
6. 本書にかかわる実測図・写真及び遺物などの資料は総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265-3）で保管している。
7. 本書の刊行にあたり御指導・御教示を賜った関係の皆様に厚くお礼申しあげます。



第1図 位置図

目 次

序

例 言

1. 総社市文化財行政の概要	
1996年度 文化財行政の概要	1
2. 立会および確認調査の概要	
秦廃寺確認調査 2	7
店舗付共同住宅建設に伴う確認調査	11
給油所建設に伴う確認調査	13
共同住宅に伴う確認調査	14
医院増築に伴う立会調査	16
分譲住宅造成地立会調査	18
総社市井尻野採集の黒曜石製尖頭器の産地について	20
分譲住宅造成に伴う確認調査	21
備中国分寺境内の排水管埋設に伴う立会調査	24
共同住宅建設に伴う確認調査	26
共同住宅建設に伴う立会調査	28
共同住宅に伴う確認調査	30
共同住宅建設に伴う立会調査	32
三須地区県営ほ場整備に伴う確認調査	34
久代字勝負砂所在の遺跡確認調査	43
3. 発掘調査の概要	
鬼ノ城 角楼および西門の調査	45
駅南区画整理事業に伴う発掘調査	100
4. 発掘調査報告	
すりばち池南墳墓群	105
(薮田兎登木線改良工事に伴う発掘調査)	
金頭山城跡	135
(自動車(携帯)電話無線基地局設置に伴う発掘調査)	

図 目 次

第1図 位 置 図		第27図 遺構配置図 (S=1/400) 27
第2図 確認・立会調査位置図1 (S=1/100,000) 5		共同住宅建設に伴う立会調査
第3図 確認・立会調査位置図2 (S=1/40,000) 6		第28図 調査地位置図 (S=1/5,000) 28
秦(秦原)廃寺確認調査2		第29図 調査区位置図 (S=1/750) 29
第4図 調査地位置図 (S=1/5,000) 7		第30図 遺構配置図・土層断面図 (S=1/80) 29
第5図 秦(秦原)廃寺跡地形図 (S=1/2,000) 8		共同住宅に伴う確認調査
第6図 トレンチ断面図 (S=1/80) 9		第31図 調査地位置図 (S=1/5,000) 30
店舗付共同住宅建設に伴う確認調査		第32図 西トレンチ土層図 (S=1/60) 31
第7図 調査地位置図 (S=1/5,000) 11		共同住宅建設に伴う立会調査
第8図 遺構配置図 (S=1/300) 12		第33図 調査地位置図 (S=1/5,000) 32
第9図 土壌出土遺物 (S=1/4) 12		第34図 調査区位置図 33
給油所建設に伴う確認調査		第35図 出土遺物 (S=1/4) 33
第10図 調査地位置図 (S=1/5,000) 13		第36図 土層断面図 (S=1/60) 33
共同住宅に伴う確認調査		三須地区県営ば場整備に伴う確認調査
第11図 調査地位置図 (S=1/5,000) 14		第37図 トレンチ配置図 (S=1/5,000) 35
第12図 調査区土層断面図 (S=1/60) 15		第38図 トレンチ断面図 (S=1/60) 37
医院増築に伴う立会調査		第39図 三須・河原遺跡遺構範囲推定図 (S=1/1,000) 39
第13図 調査地位置図 (S=1/5,000) 16		第40図 三須・河原遺跡T-1・4遺構配置図 (S=1/200) 40
第14図 住居址断面図 (S=1/40) 17		第41図 出土遺物 (S=1/4) 41
第15図 住居址出土土器 (S=1/4) 17		久代字勝負砂所在の遺跡確認調査
第16図 住居址出土台石 (S=1/6) 17		第42図 調査地位置図(トレンチ配置図) (S=1/2,500) 43
分譲住宅造成地立会調査		鬼ノ城 角楼および西門の調査
第17図 採集地位置図 (S=1/5,000) 18		第43図 鬼ノ城平面図 (S=1/8,000) 45
第18図 採集遺物 (S=1/1) 19		第44図 調査区位置図 (S=1/2,000) 48
総社市井尻野採集の黒曜石製尖頭器の産地について		第45図 角樓部平面図 (S=1/200) 50
第19図 K ₂ O-CaO散布図 20		第46図 T-1断面図 (S=1/80) 52
第20図 Fe ₂ O ₃ -TiO ₂ 散布図 20		第47図 T-3 (S=1/40) · T-6 (S=1/60) 断面図 53
分譲住宅造成に伴う確認調査		第48図 T-4 · 同拡大断面図上 (S=1/120) · 下 (S=1/60) 54
第21図 調査地位置図 (S=1/5,000) 22		第49図 T-7 断面図 (S=1/60) 55
第22図 トレンチ断面図 (S=1/80) 23		第50図 T-11平・断面図 (S=1/60) 56
第23図 トレンチ配置図 (S=1/500) 23		第51図 角樓平面図 (S=1/120) 57
備中國分寺境内の排水管埋設に伴う立会調査		第52図 角樓正面・各部断面図 (S=1/60) 59
第24図 調査地位置図 (S=1/5,000) 24		第53図 角樓左右垣 平・立・断面図 (S=1/40) 60
第25図 排水管埋設位置図 (S=1/1,200) 25		
共同住宅建設に伴う確認調査		
第26図 調査地位置図 (S=1/5,000) 26		

第54図 角楼右石垣 平・立・断面図 (S=1/40)	61	第88図 第1主体部 (S=1/40)	114
第55図 左側石垣 立・断面図 (S=1/40)	62	第89図 第2主体部 (S=1/40)	114
第56図 右側石垣 立・断面図 (S=1/60)	62	第90図 第3・5主体部 (S=1/40)	115
第57図 土壘前面の小柱穴断面図 (S=1/60)	62	第91図 第4・6主体部 (S=1/40)	116
第58図 柱1・2断面図 (S=1/40)	64	第92図 第6主体部 (S=1/40)	116
第59図 柱3 平・断面図 (S=1/40)	64	第93図 第7・18主体部 (S=1/40)	116
第60図 柱4 平・断面図 (S=1/40)	64	第94図 鉄器・玉類 (S=1/2, 1/1)	117
第61図 柱5・6断面図 (S=1/40)	65	第95図 第8主体部 (S=1/40)	117
第62図 内側列石、石段、敷石平・断面図 (S=1/80,1/60)	66	第96図 第9主体部 (S=1/40)	117
第63図 石段立・断面図 (S=1/60)	67	第97図 第10主体部 (S=1/40)	118
第64図 柱穴列 平面図 (S=1/80)	70	第98図 第11主体部 (S=1/40)	118
第65図 柱3・4断面図 (S=1/40)	70	第99図 第12・13主体部 (S=1/40)	119
第66図 西門 平・立・断面図 (S=1/100)	74	第100図 第14・15主体部 (S=1/40)	119
第67図 西門断面図 (S=1/100)	77	第101図 第17主体部 (S=1/40)	120
第68図 西門横断トレント土層図 (S=1/80)	80	第102図 第19主体部 (S=1/40)	120
第69図 板壁痕跡平面図 (S=1/60)	80	第103図 出土遺物1 (S=1/4)	120
第70図 第15墨状区間トレント位置図 (S=1/400)	84	第104図 出土遺物2 (S=1/4)	121
第71図 T-1平・断面図 (S=1/60)	85	第105図 出土遺物3 (S=1/4)	121
第72図 T-2平・断面図 (S=1/60)	86	第106図 出土遺物4 (S=1/4)	122
第73図 第1水門・同拡大 平・立面図 (S=1/80,1/120)	88	第107図 出土遺物5 (S=1/4)	122
第74図 第3墨状区間敷石(城内側) (S=1/60)	90	第108図 出土遺物6 (S=1/4)	122
第75図 第8墨状区間敷石 (S=1/60)	91	第109図 出土遺物7 (S=1/4)	123
第76図 出土遺物1 (S=1/4)	93	第110図 石製品 (S=1/3)	123
第77図 出土遺物2 (S=1/4,1/3)	94	第111図 2号墳墓平面図 (S=1/150)	124
第78図 註11説明図より	95	第112図 墳丘断面図 (S=1/100)	125
駅南区画整理事業に伴う発掘調査			
第79図 調査位置図 (S=1/6,000)	100	第113図 2号墳墓第1主体部平・断面図 (S=1/40)	126
第80図 上三本松遺跡出土遺物 (S=1/4)	102	第114図 2号墳墓第2主体部平・断面図 (S=1/40)	126
第81図 上三本松遺跡出土遺物 (S=1/4)	103	第115図 出土遺物8 (S=1/4)	127
すりばち池南墳墓群			
第82図 路線計画図 (S=1/1,000)	107	第116図 出土遺物9 (S=1/4)	128
第83図 調査前・後墳丘図 (S=1/300)	107	第117図 出土遺物10 (S=1/4)	129
第84図 周辺古墳分布図 (S=1/25,000)	109	第118図 すりばち池南1号墳墓 第1主体部出土赤色顔料の 蛍光X線分析チャート	134
第85図 調査地周辺図 (S=1/5,000)	111	第119図 すりばち池南1号墳墓 第3主体部出土赤色顔料の 蛍光X線分析チャート	134
第86図 1号墳墓平面図 (S=1/150)	112	金頭山城跡	
第87図 1号墳墓墳丘断面図 (S=1/100)	113	第120図 周辺位置図 (S=1/10,000)	137
		第121図 調査位置図 (S=1/400)	139

図版目次

秦（秦原）廃寺確認調査 2	
第1図版 回廊西端石列（南から）	10
第2図版 築地基礎（北から）	10
店舗付共同住宅建設に伴う確認調査	
第3図版 調査地遠景	12
第4図版 遺構検出状況	12
共同住宅に伴う確認調査	
第5図版 調査区土層断面	15
医院増築に伴う立会調査	
第6図版 調査地遠景	17
第7図版 住居址断面	17
分譲住宅造成地立会調査	
第8図版 採集地近景（北西から）	19
分譲住宅造成に伴う確認調査	
第9図版 調査地近景（西から）	21
第10図版 T-5断面	21
備中国分境内の寺排水管理設に伴う立会調査	
第11図版 1の断面	25
第12図版 4の断面	25
共同住宅建設に伴う確認調査	
第13図版 調査地近景	27
第14図版 遺構検出状況	27
三須地区県営ほ場整備に伴う確認調査	
第15図版 三須・河原遺跡T-1, T-4	42
第16図版 T-1-2, P-1断面	42
久代字勝負砂所在の遺跡確認調査	
第17図版 勝負砂遺跡全景（第1次発掘調査）	44
第18図版 貯蔵穴	
(底部中央に柱穴、同壁に溝あり)	
鬼ノ城 角楼および西門の調査	
第19図版 T-1断面	52
第20図版 T-4(左)全景,	
(右)石垣基底石周辺	
第21図版 T-11	56
第22図版 角楼（西から）	58
第23図版 角楼（北から）	
第24図版 角楼と敷石	61
第25図版 左側石垣	63
第26図版 右側石垣	63
第27図版 柱2 第28図版 柱3	63
第29図版 柱5 第30図版 柱6	65
第31図版 石段正面	68
第32図版 石段側面	68
第33図版 柱3 第34図版 柱4	70
第35図版 埋め戻し後の角楼	72
第36図版 西門跡全景	75
第37図版 西門（城内側から）	78
第38図版 柱2門礎	78
第39図版 西壁面（柱6側）	80
第40図版 東壁面（柱3側）	80
第41図版 地覆石状	80
第42図版 板壁痕跡	83
第43図版 版築層と崩落土	83
第44図版 T-1	85
第45図版 T-2	86
第46図版 第1水門	88
第47図版 第3壙状区間敷石	91
第48図版 第8壙状区間敷石	91
第49図版 第15壙状区間 T-2版築土層	
分析資料採集層	
駅南区画整理事業に伴う発掘調査	
第50図版 束積前遺跡完掘状況	101
第51図版 三軒屋遺跡II区上層	101
第52図版 三軒屋遺跡II区下層	101
第53図版 上三本松遺跡建物完掘状況（東から）	104
第54図版 上三本松遺跡井戸鉢出土状況（南から）	104
すりばち池南墳墓群	
第55~61図版	130~133
金頭山城跡	
第62, 63図版	140

表 目 次

表1 立会・確認調査一覧表	3·4
表2 井尻野採集黒曜石製尖頭器の分析値（%）	
	20
表3 鬼ノ城 西門跡・東門跡比較表	96
表4 版築土層分析値（%）	98
表5 1号墳墓第1・3主体部赤色顔料分析値（%）	134

1. 総社市文化財行政の概要

1996年度 文化財行政の概要

総社市においては、平成6年7月の機構改革により教育委員会に文化財室を設置した。また、同年8月には埋蔵文化財の保管・整理を行う総社市埋蔵文化財学習の館（以下埋文学習の館）が開館し、多くの来館者を迎えた。

また、本年度から新たに文化財パンフレットを発刊することとなり、第1号として吉備路周辺を取り上げた。発掘調査では平成6年度の鬼ノ城第1城門跡について第3城門跡の調査を実施した。

<組織>

教育長	中山 英夫	主 事	土家 慶子
教育次長	秋田 翔二	〃	平井 典子
参事兼文化財室長		〃	前角 和夫
	村上 幸雄	〃	高橋 進一
室長補佐（市史編さん事務局次長兼務）		〃	松尾 洋平
	加藤 信二		
主任	谷山 雅彦	[総社市埋蔵文化財学習の館]	
〃	高田 明人	臨時職員	西平登代子
〃	武田 恭彰	〃	近藤 雅子

[埋蔵文化財]

本年度の埋蔵文化財発掘調査は、継続事業が駅南区画整理事業に伴う調査のみで長期に及ぶ調査が減少した。このことは、民間の景気回復が遅れていることや地方公共団体の財政悪化などが要因であろう。

県が実施している国道429号線拡張工事に伴う発掘調査は断続だが行われるなど、国・県事業による調査は市内で進められている。

また、世相を反映した携帯電話の普及から中継局の設置が各社競争で増設されている。県立大学も開学4年目を迎え学生用の共同住宅も増加している。民間で実施する小規模な分譲住宅や土取り事業も多い。これらは、開発面積が狭いながら中継局は眺望のよい山上、共同住宅は水田の造成地と調査上は困難な場所が多い。今回の年報でも共同住宅建設に伴う立会・確認調査が多い。今後の対応が苦慮される開発事業である。

平成8年度調査で注目されたのは、三須地区県営ほ場整備事業に伴う確認調査であった。この地域は市内でも遺跡の密度が高いと考えられていた。ここで検出された遺構や遺物は、それ

まで知られていた弥生時代から古墳時代以外に官衙に関連するものが含まれており、特に「郡殿」の墨書き土器は注目される。

[文化財保護]

市内には重要な遺跡が多く、その中でも指定文化財については毎年下刈り清掃などの管理事業を継続して行っている。その中には、宮山墳墓群や作山古墳などで枯れ松の処理もあった。

また、市指定樹木の診断修復なども本年度で実施した。

平成6年度で実施した鬼城山第1城門跡は仮整備を7年度に行い公開を行っている。鬼城山整備委員会において平成8年度は第3城門跡の調査が決定し、10月から調査に着手した。ここでは、新たな遺構の発見など大きな反響を呼び、平成9年2月9日に行った現地説明会には600名を越える多数の見学者が来跡した。5月10日から鬼城山に訪れる見学者の利便と人数の把握のため簡易なパンフレットを設置した。平成9年4月4日までの累計は9,352名であった。

出土遺物の保存処理は隨庵古墳出土鉄製品を、レプリカの作成は秦廃寺出土軒丸瓦などを行った。

また、倉敷地方振興局で刊行した文化財紹介図書「倉敷地方の文化財」の編集にも協力した。この図書は主に管内の学校に配布され利用される目的で編集されたものである。

[埋蔵文化財学習の館]

埋文学習の館では、毎年発掘調査において出土する埋蔵文化財の保管整理が行われている。

また、10月13日には「親子むかし体験教室」を開催し、40名が参加した。野焼き・火おこし・ガラス玉つくりなどの体験や館を見学した。

本年度の埋文学習の館の見学者は636名で主に市内学校生徒や各種団体の施設見学に利用されている。また、他市教育委員会や議会などの視察もある。

資料の貸し出しは、遺物では岩屋土墳墓群関連資料・一倉遺跡出土鉢・宮山墳丘墓付近表採線刻器台片・特殊器台（レプリカ）・窪木薬師遺跡出土遺物・殿山11号墳出土青銅鏡などであった。写真では、作山古墳・江崎古墳・こうもり塚古墳・鬼城山・千引かなくろ谷遺跡・新本横寺遺跡出土家形土製品・一倉遺跡出土鉢などであった。

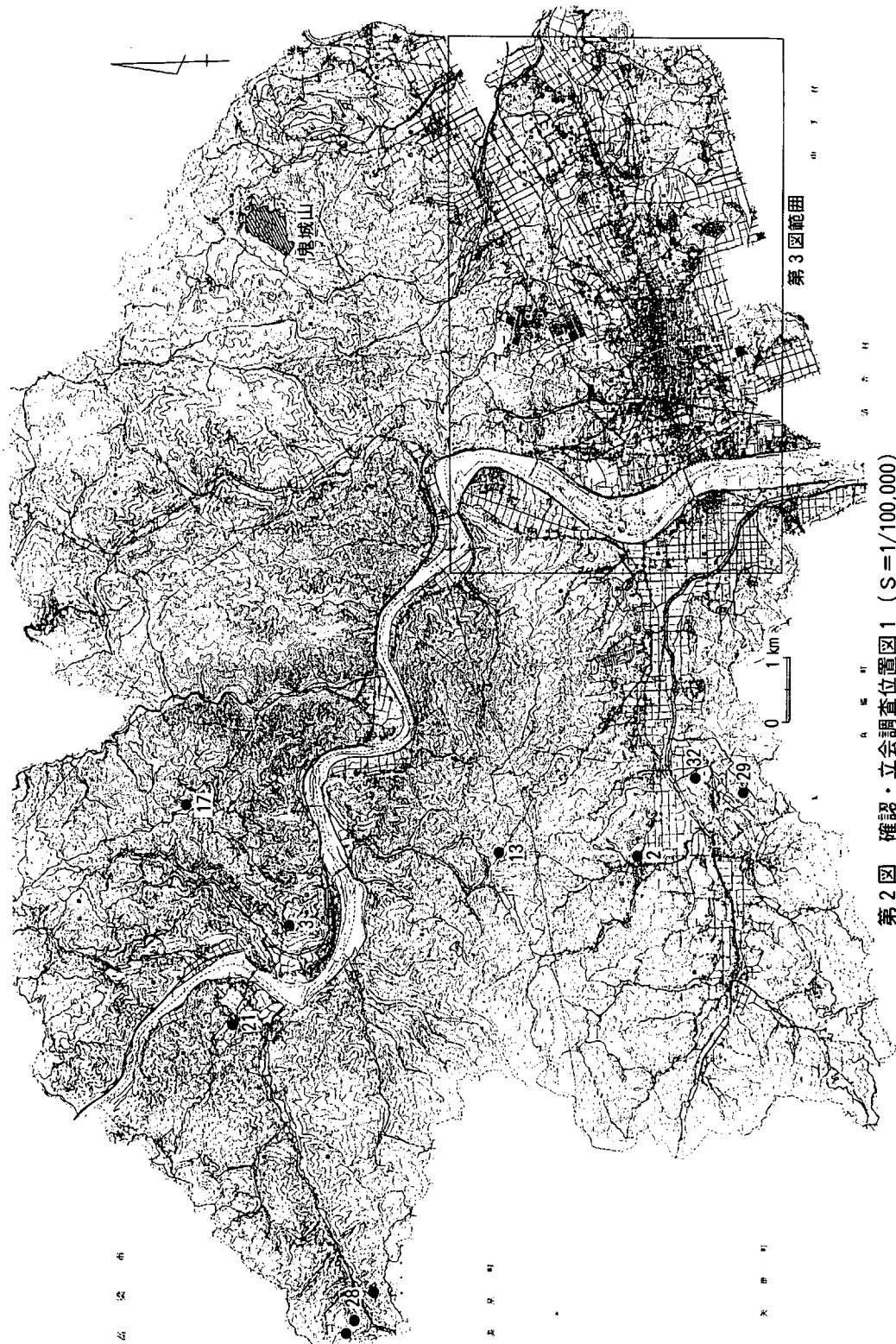
7月6日には県立大学の博物館実習の一環として、実習生が遺物の整理などを行った。

刊行物では、「総社市埋蔵文化財調査年報6」と史跡パンフレット吉備路がある。寄贈をうけた報告書などは649冊で1997年3月で蔵書数は6665冊となった。寄贈本の一覧表を掲載するのが本意であるが、紙帳の関係で掲載できなかったことをお詫びするとともに、ご寄贈いただいた諸機関の方々に厚くお礼申しあげます。(谷山雅彦)

表1 立会・確認調査一覧表

番号	所在地	調査原因	種別	調査期間	調査所見
1	井手1052・1053	店舗付共同住宅	確認	5月9日 ・10日	微高地端部、溝・土壌など 報告 (P11)
2	山田1789	個人住宅	分布	5月14日	既存宅地で山を切り開いた 平地
3	美袋1497の3	携帯電話無線中継局	立会	5月17日	山城確認（金頭山）57条・ 98条 報告 (P135)
4	中央3-11-112 ・113	給油所建設	確認	6月3日	遺構なし、旧河道 報告 (P13)
5	総社1-18-30	山陽新聞社総社支局	確認	6月7日	遺構なし、礫層（上に近世 水田層）
6	小寺2061, 2062	共同住宅	確認	6月13日	低湿地 報告 (P14)
7	中央6-9-107	ビル建設	確認	7月17日	遺構なし、湿地状
8	井手918-1, 919	医院増築	立会	7月29日	住居址（古墳時代） 報告 (P16)
9	小寺51-3	共同住宅	立会	8月6日	微高地、遺物有
10	井尻野1471-1 他	分譲住宅造成	立会	9月4日	遺物表採（黒曜石） 報告 (P18)
11	井手1053	共同住宅（浄化槽）	立会	9月5日	遺構なし、No.1と同一敷地
12	総社3-902-1 他	分譲住宅造成	確認	9月17日 ・18日	微高地 中世小溝 報告 (P21)
13	下倉2908-1	土取り	分布	9月19日	尾根上平坦、畑？
14	北溝手235-5	共同住宅	立会	9月30日	微高地 端部 遺構なし
15	総社1-778-1	共同住宅	立会	9月30日	旧河道
16	上林1046他	排水管の埋設	立会	10月15日	史跡現状変更 報告 (P24)
17	宇山1387-2	携帯電話中継局	立会	10月25日	土取り跡あり、範囲外
18	中央1-23-107	共同住宅	確認	11月5日	溝など、57条 報告 (P26)
19	中央3-13-112	共同住宅	立会	11月9日	住居址 報告 (P28)

番号	所 在 地	調 査 原 因	種別	調査期間	調 査 所 見
20	総社	共同住宅	立会	11月21日	柱穴、東は低位部 報告 (P30)
21	水内	ほ場整備	不時	12月 4 日	柱穴など
22	中央3-14-101	物販店舗新築	立会	12月 5 日	溝など
23	井尻野10-2他	工場建設	確認	12月10日	近世?水田跡
24	井手697-5	共同住宅(浄化槽)	立会	12月13日	微高地、土壠、南は大きく 下る 報告 (P32)
25	井手1147	分譲住宅造成	確認	12月20日	微高地 端部? 遺構なし
26	南溝手386-1	個人住宅(浄化槽)	立会	1月10日	微高地 水田?
27	総社2500	土置き場	分布	1月23日	現状では遺跡の存在は確認 できない
28	中尾	送電線建設予定地	分布	2月13日	地形の改変はなし
29	久代1920-2	工場増築	立会	2月13日	消滅古墳上(沖田奥3号墳)
30	富原129-125他	配送センター	立会	3月 7 日	旧池内埋土
31	上林1196	国分尼寺トイレ撤去	立会	3月10日	掘削なし、史跡現状変更
32	久代2544-1	土取り	確認	3月17日	集落跡、57条・98条 報告 (P43)



第2図 権認・立会調査位置図1 (S=1/100,000)

第3図 確認・立会調査位置図2 (S=1/40,000)



2. 立会および確認調査の概要

秦（秦原）廃寺確認調査2

遺跡名 秦廃寺（岡山県指定史跡）

所在地 総社市秦

調査期間 1996年4月1日～5月2日・6月4・5日

調査面積 約20m²

調査概要

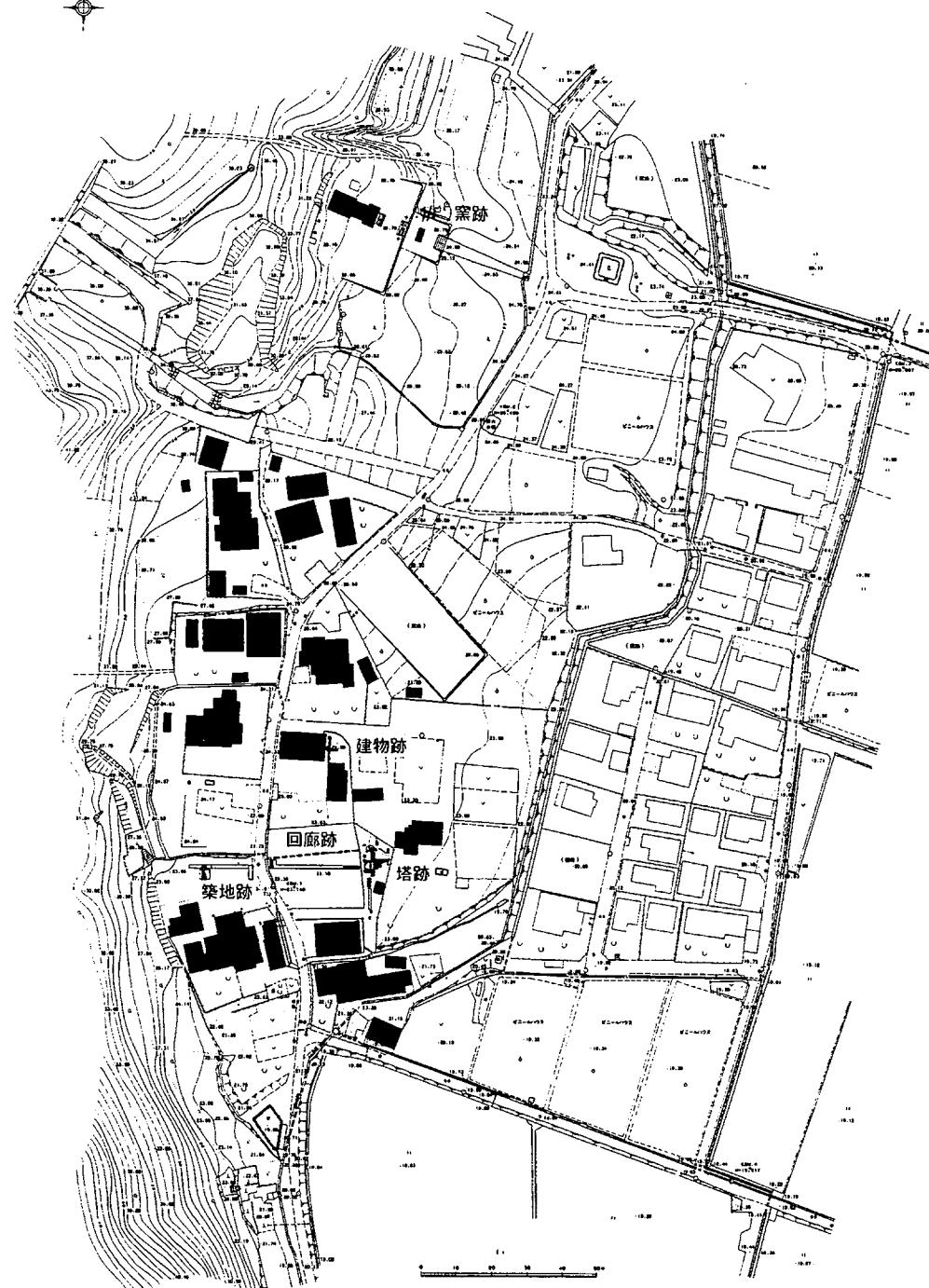
秦廃寺は、県内最古に創建されたと考えられている寺院跡である。しかし、詳しい内容については調査がなされていないため不明であった。このため平成7年度から秦廃寺の主要伽藍の確認を目的とした確認調査を総社市教育委員会で開始した。

平成7年度の調査は、不動と考えられていた塔心礎部分から開始した。塔心礎から南に延ばしたトレンチの土層観察から、礎石は移動していることが判明した。これは、第6図に示したように、表土下に瓦と礫を主体とした層が厚く認められ、塔心礎はこの層に据えられたと考えられる。また、この瓦礫層中から中世以降と考えら土器片が出土しているため、塔心礎が現在の位置に移動したのは、この地にあったとされる興禪寺が秦廃寺跡地に再建された時期が考えられる。現在上原にある興禪寺との関係は不詳である。

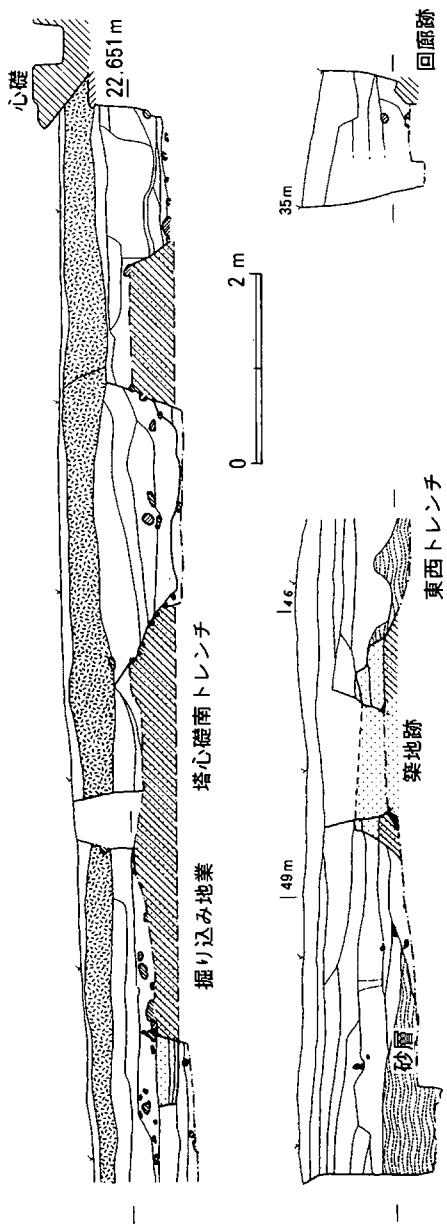


第4図 調査地位置図 (S=1/5,000)

秦原廃寺跡



第5図 秦(原)廃寺跡地形測量図 ($S=1/2,000$)



第6図 トレンチ断面図 ($S=1/80$)
の関係から回廊が想定される。

また、8年度では7年度で発見された窯跡周辺の磁気探査を奈良国立文化財研究所に依頼して実施した。調査結果を反映できるよう秦廃寺を中心とした大縮尺の地形測量図作成を行った。

(谷山)

このトレンチでは、斜線で示した部分で礫を多く含む層が認められた。この層が塔基壇の掘り込み地業の可能性が考えられたのでトレンチを南に延ばし端を確認した。

また、この地業の西端、及びさらに西に想定される建物を検出することを目的に塔基壇想定中心から東西方向のトレンチを設定した。このトレンチでは塔掘り込み地業西端と瓦溜まりを検出した。この瓦溜まりは、塔の位置よりかなり西寄りで検出されたため、別の建物が想定された。この時点では、建物が想定される部分は市道を挟んだ竹藪であった。この時、この竹藪を地元で秦廃寺見学者のための駐車場にする計画が持ち上がり、教育委員会に相談があった。

先の調査で、この竹藪に建物が想定されたため、4月からこの部分の確認調査を実施することとなった。

ここでは、道よりでかつて廃油を処理していたため、道から5m西より（推定塔中心から35m）から開始した。ここでは、当初推定していた道よりもでは、基壇などの痕跡がみとめられずおおむね中心から46m～49mの範囲で盛り土を確認した。これは下層では、黒色土と茶褐色土層の互層であり、寺域の西端を画する築地の基礎と考えられた。このため、先の瓦溜まりの建物を確認するため、市道近くまでトレンチを東に延ばした。ここでは、南北方向に並ぶ石列が検出され、先の瓦溜まりと



第1図版 回廊西端石列（南から）



第2図版 築地基礎（北から）

店舗付共同住宅建設に伴う確認調査

所在地 総社市井手1052, 1053

調査期間 1996年5月9・10日, 9月5日

調査面積 約270m²

調査概要

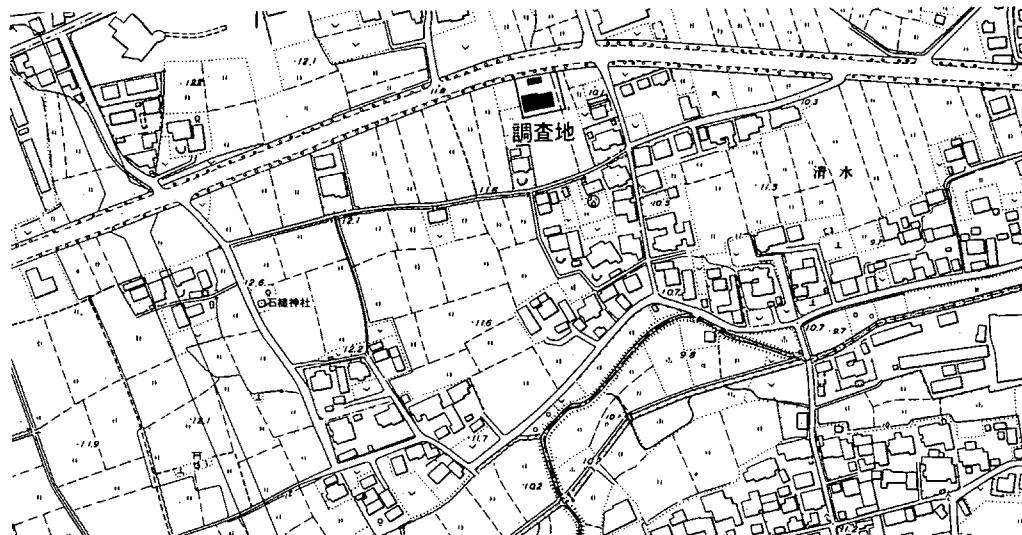
調査地は、総社市街地の東約1kmの都市計画街路総社駅前線沿いに位置しており、周辺では近年店舗・ワンルームマンション等の建設が相次ぎ、急速に市街化が進行して来ている。近隣では清水角遺跡・井手村後遺跡などが知られており、本遺跡は、旧高梁川によって複雑に形成された微高地上に位置していると考えられる。

本調査地の基本的な層序は、80~90cmの厚さの客土の下に、近現代の耕作土～淡灰黄褐色土層（中世水田層）～暗黄色土層（基盤層）の順であった。南東約1/3の範囲では、基盤層の上に暗茶褐色土層があり、南東に向かって厚く堆積している。基盤層の中に焼土や炭化物が混じっている部分も認められたが、平面形はまとまった遺構としてはとらえられなかった。

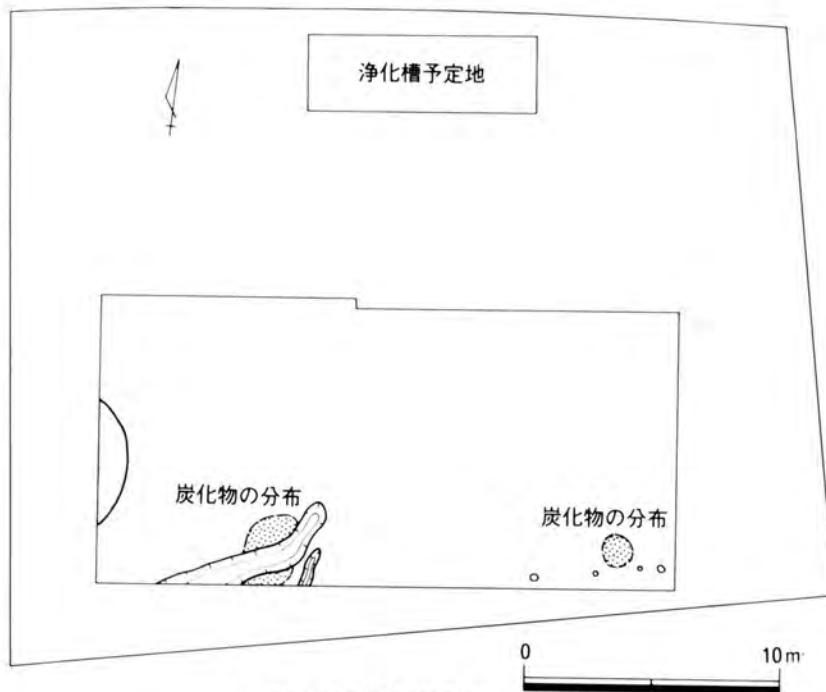
遺構は全て調査区南半部で検出され、溝2・土壙1・柱穴4であった。また焼土の広がりが2ヶ所で検出されている。

遺物は、土壙から壺・甕・高杯・器台が出土している。すべて破片であり、量的にも少なくビニール袋2袋程度の量である。いづれも弥生時代後期前半の土器と考えられる。

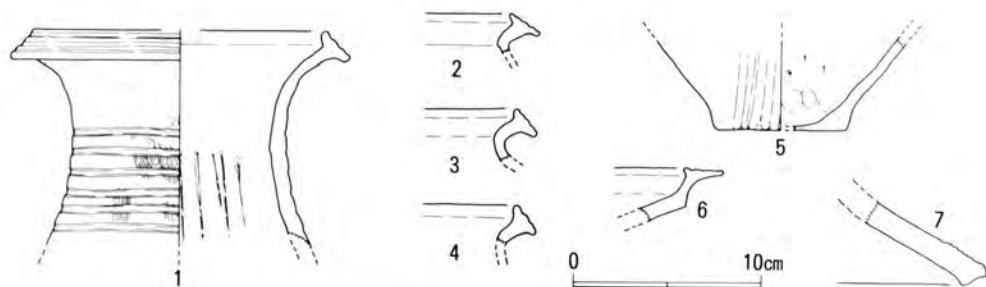
浄化槽予定地では基本的層序は同じで、基盤層の下にさらに灰褐色の純粹な砂層があった。その下は灰褐色の砂礫層になっており、遺構・遺物は特に認められなかった。（高橋進一）



第7図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第8図 遺構配置図 ($S=1/300$)



第9図 土壌出土遺物 ($S=1/4$)



第3図版 調査地遠景



第4図版 遺構検出状況

給油所建設に伴う確認調査

所在地 総社市中央三丁目11-112・113

調査期間 1996年6月3日

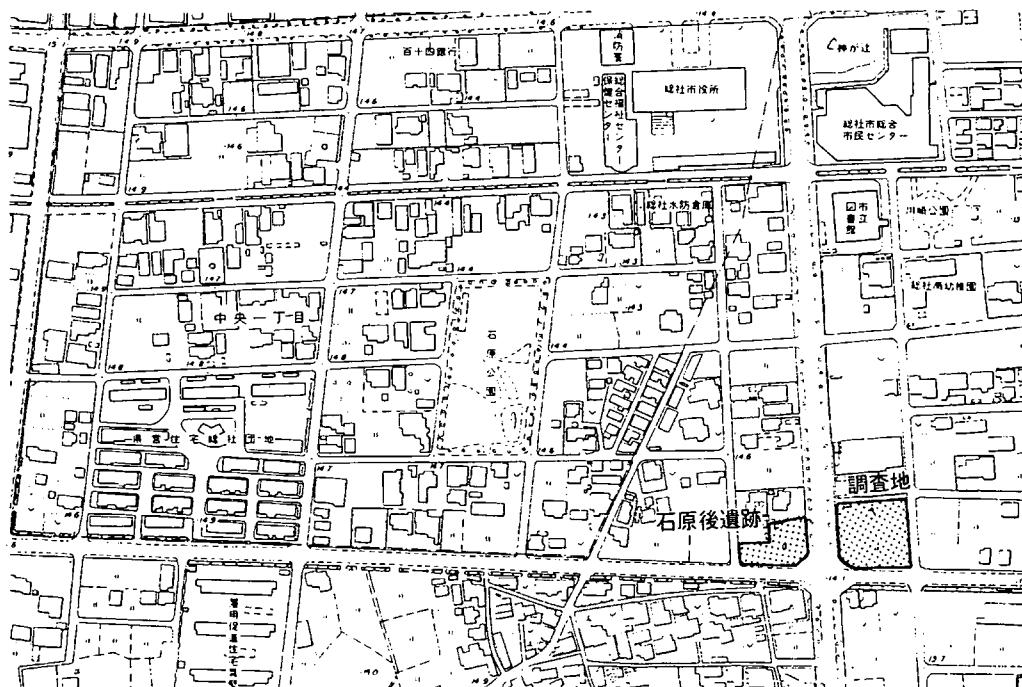
調査面積 20m²

調査概要

今回の調査は給油所建設に伴う事前の確認調査として実施したものである。本調査地は市役所から南に伸びる文化筋通りに面し、通りを挟んで西側では公園建設に伴う発掘調査（石原後遺跡）で弥生から中世の溝が検出され大量の遺物が出土した。

このため今回の対象地にも遺構が存在することが予想され、地下構造物建設によって影響を受ける部分について2m×10mの試掘溝を設定し、重機で掘り下げて遺構の有無を確認した。

この結果、耕作土直下で厚さ約60cmで数層の砂礫層が堆積し、更にその下層に近世水田層が存在する状態を確認した。この状況は石原後遺跡の調査時に南半が水流によって基盤層が削り取られて流失していたという所見と合致し、流路によって形成された低位部に営まれた水田は再び厚い砂礫に覆われ、復旧されることなく放棄されたとみられる。これは治水が安定する以前の総社平野では幾度となく繰り返された光景であり、今回の調査により遺跡が存在したであろう微高地も、後世の自然的改変によって容易に消滅する状況が看取できた。（武田恭彰）



第10図 調査地位置図 (S=1/5,000)

共同住宅に伴う確認調査

所在地 総社市小寺2061, 2062

調査期間 1996年6月13日

調査面積 6 m²

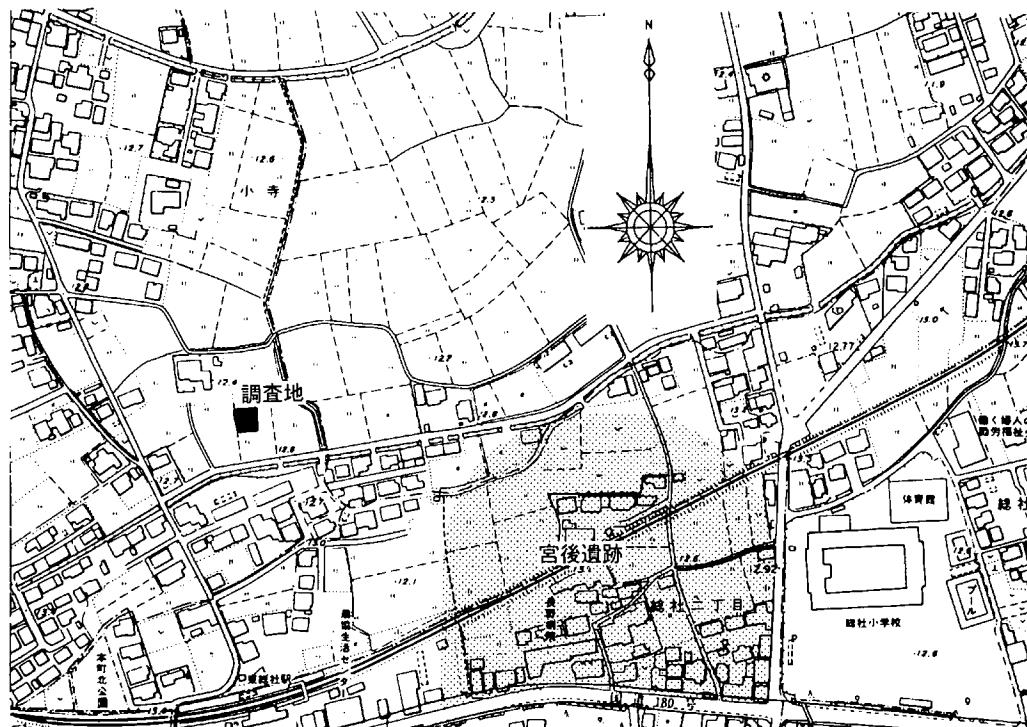
調査概要

今回の調査は土地所有者による共同住宅建設に伴う事前の確認調査として実施したものである。本調査地は旧市街地の中心に位置する総社宮の北西約400mに所在し、旧状は水田地帯であったが近年、区画整理が行われたことを契機に一帯の住宅化が急速に進んでいる。

調査対象地は区画整理事業に伴う発掘調査によって遺跡の存在が臆気に知られるようになつたが、遺構の性格、広がりについては不明な点が多い。

調査は共同住宅の地盤改良によって掘削される部分を対象として、重機により南北方向の1m×6mの試掘溝を約1.5m掘り下げ、壁面を精査して遺構の有無を確認した。

この結果、現代水田面から約1m下層にグライ化した軟質土壌が認められ、さらにその上層に水田の耕土層と畦畔を確認した。水田と畦畔は、洪水砂と見られるシルト層に覆われており、

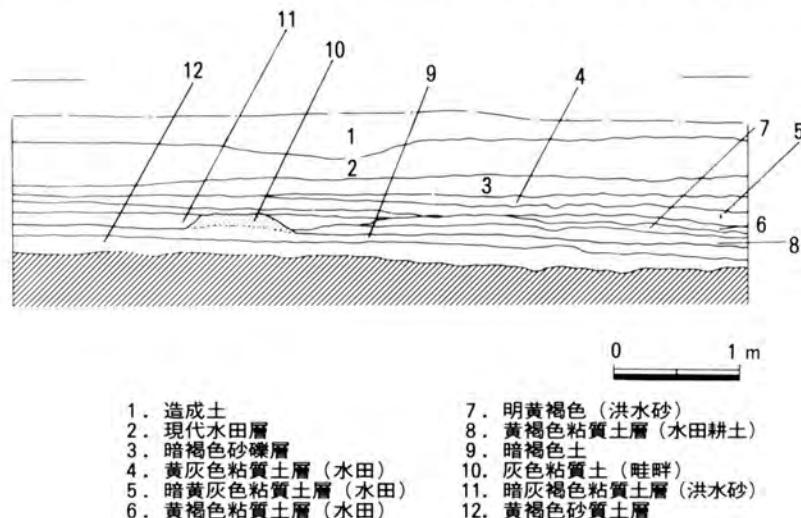


第11図 調査地位置図 (S=1/5,000)

耕土との識別は明確に可能である。水田の時期としては、耕土中に13世紀代の土師器片が含まれることから中世と考えて大過ないと思われる。

中世水田層より上層も水田として利用されたと推定される堆積状況を示すが、洪水と考えられる砂礫層もみられ、罹災と復興を繰り返した土地利用の一端を垣間見ることが出来る。

以上の結果から本調査地は、微高地の端部の不安定な低湿地に位置し、中世段階で初めて耕地として利用されたとみられ、居住地は東に広がる微高地上に立地したと推定される。(武田)



第12図 調査区土層断面図 (S=1/60)



第5図版 調査区土層断面

医院増築に伴う立会調査

所在地 総社市井手字国府西918-1, 919

調査期間 1996年7月29日

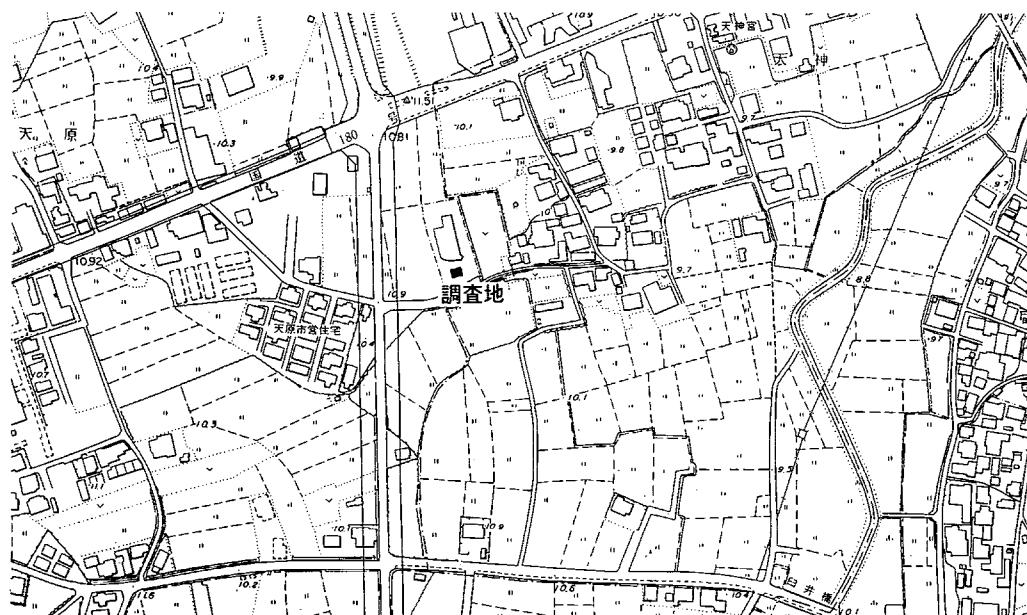
調査面積 約45m²

調査概要

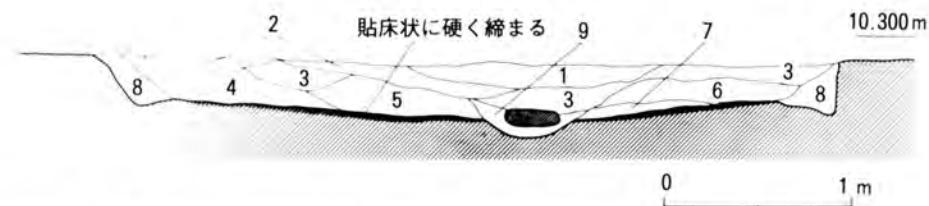
調査地は総社市街地の東部、国道180号線と国道429号倉敷総社バイパスとの交差点の南東約120mに位置している。この地は備中国府推定域の南限に位置しており、周辺には作山古墳・備中国分僧寺・尼寺をはじめとして数多くの遺跡が知られている。また調査地の西隣では、国道429号線の改良工事に伴って沿線が岡山県教育委員会によって継続的に調査されている。

調査地の現況は、内科医院の駐車場で、合併浄化槽を設置するため調査を行った。調査は駐車場を掘削した段階で行った。アスファルトの舗装の下には碎石が30cm程度敷かれており、さらに地上げのための真砂土が50cm程度客土されていた。その下層は旧耕作土～淡茶褐色砂質土（基盤層）の順で堆積していた。基盤層の淡茶褐色砂質土はやや砂質気味であったが、安定した微高地上に位置していると考えられる。

遺構は柱穴数個と径4.0～4.7mを測る隅丸方形の住居址1棟が検出された。住居址の覆土は主に暗茶褐色砂質土であり、壁高は約30cm残存していた。床面は貼床の可能性が考えられ、よく縮まっていた。ほぼ中央に深さ10cm程度の浅い中央穴があり、中に花崗岩製の台石が落ち込

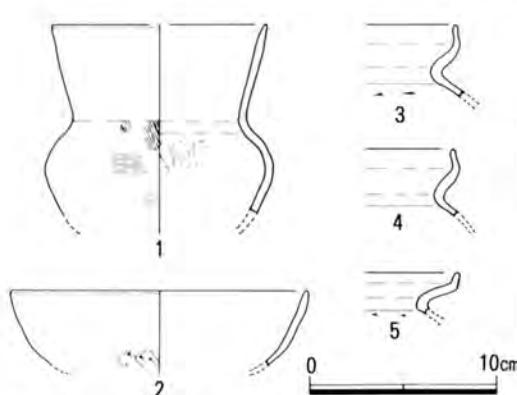


第13図 調査地位置図 (S=1/5,000)

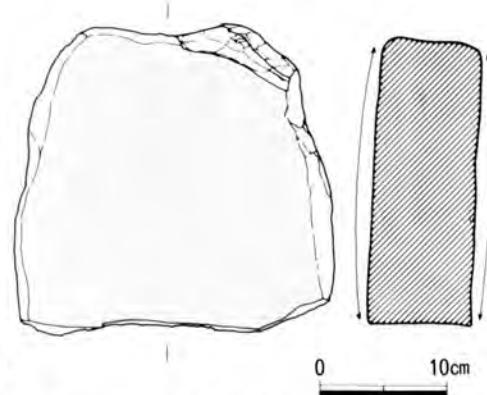


1:粗粒の黒灰褐色砂質土 2:暗灰褐色砂質土 3:較質の暗灰褐色砂質土 4:淡茶褐色砂質土 5:暗茶褐色砂質土
6:暗茶褐色砂質土 7:淡黒灰色砂質土 8:暗茶色砂質土 9:炭を多く含む暗褐色砂質土

第14図 住居址断面図 ($S=1/40$)



第15図 住居址出土土器 ($S=1/4$)



第16図 住居址出土台石 ($S=1/6$)

んでいた。

出土遺物（第15・16図）は、住居址中から土師器片と台石が認められた。土師器片は少量であるが、甕形土器と小型鉢形土器があり、古墳時代初頭のものと考えられる。台石はやや厚い板状で、表裏両面に平滑な擦痕状の使用痕がよく残り、叩打痕も僅かに認められた。

これらの調査の結果から、調査地の周辺では微高地が複雑に入り組んで形成されていると推定される。
(高橋)



第6図版 調査地遠景



第7図版 住居址断面

分譲住宅造成地立会調査

遺跡名 井尻野遺跡

所在地 井尻野1471-1他

調査期間 1996年9月4日

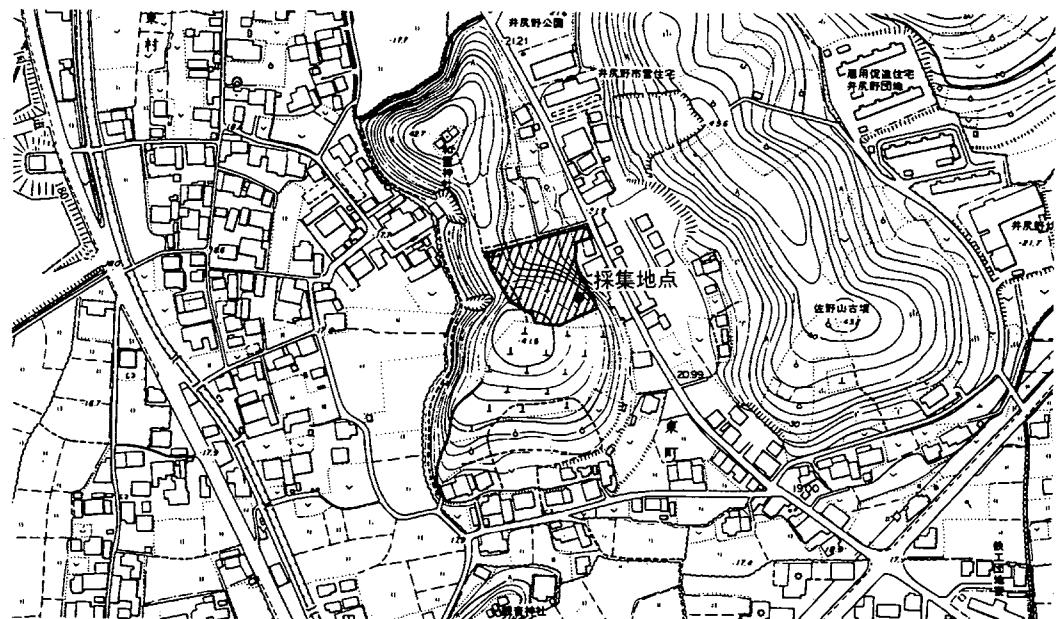
調査概要

本調査地域では遺跡の存在は知られていない。近隣では谷を挟んだ東の丘陵上に短甲などが出土した市指定史跡佐野山古墳が著名である。

今回遺物が採取された丘陵は、独立した瘦せ尾根で南斜面は墓地に利用されている。開発計画は、墓地に利用されず畠として残っていた北斜面約3000m²を造成し分譲住宅地とするものであった。造成前の観察では畠は大きな段となっており、古墳などの遺跡は存在しないと考えられた。

このため、造成工事がほぼ終了し一部変更計画の申請があったの機に造成後の調査を行った。全体では、造成断面や遺物の散布も認められなかった。

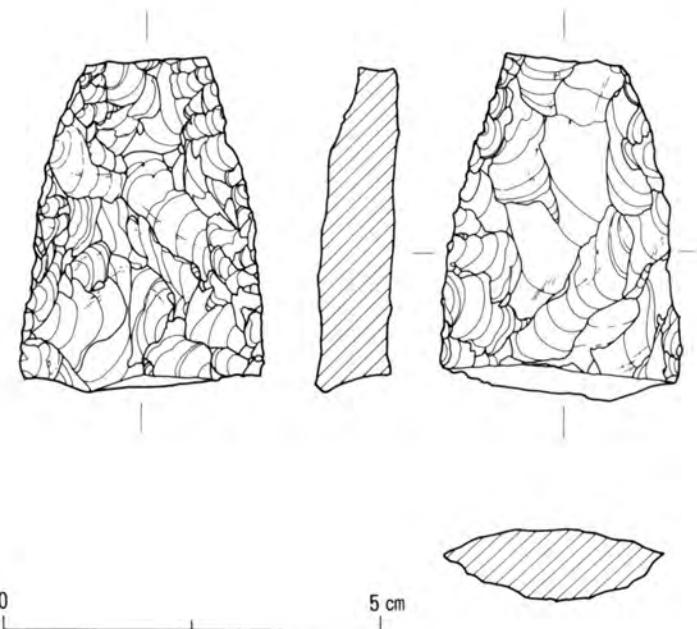
採取されたのは造成地南東区画地で、図示した黒曜石製尖頭器1である。残存長4.3cm、最大幅3.2cmである。市内では高梁川左岸の宝福寺・浅尾陣屋跡などの丘陵でサヌカイト製の石器が採取されている。黒曜石では、破片が市内真壁から出土している。時期は採集遺物のため



第17図 採集地位置図 (S=1/5,000)

確定できないが旧石器（先土器）時代の終末と考えられる。

今回の黒曜石については、岡山理科大学自然科学研究所 白石 純氏に分析を依頼し調査結果をいただいているので、掲載して感謝の意を表したい。
(谷山)



第18図 採集遺物 ($S=1/1$)



第8図版 採集地近景 (北西から)

総社市井尻野採集の黒曜石製尖頭器の産地について

岡山理科大学自然科学研究所 白 石 純

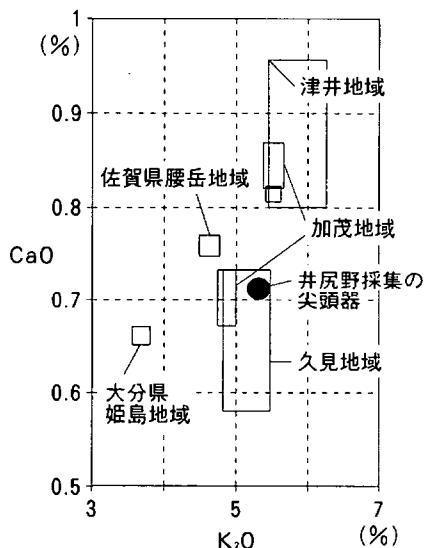
井尻野で採集された尖頭器の黒曜石原産地を推定するため蛍光X線分析法による黒曜石の产地を検討した。分析方法は、前記したエネルギー分散型蛍光X線分析法で実施し、分析試料の尖頭器の形状を変えることなく非破壊で分析に供した。

分析の結果、第19・20図 K_2O-CaO , $Fe_2O_3-TiO_2$ の4元素で比較した。この散布図では、島根県隠岐島（久見・津井・加茂）、大分県姫島、佐賀県腰岳の各原産地原石の分布領域を示しており、これらの散布図に井尻野採集の尖頭器をプロットすると、両散布図とも隠岐島久見の分布領域に入ることがわかる。この様に井尻野採集の尖頭器は、久見産の原石を使用していることが推定された。

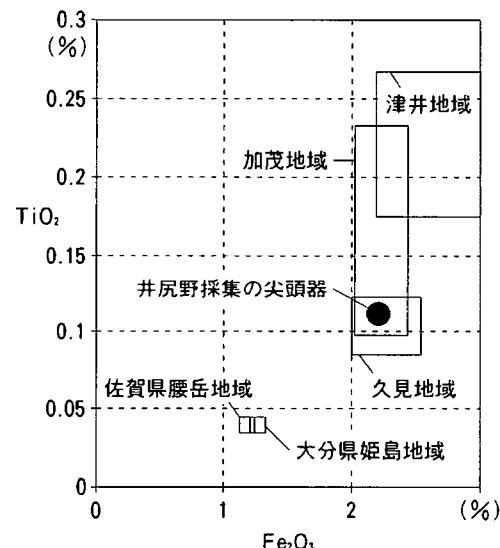
表2 井尻野採集黒曜石製尖頭器の分析値 (%)

分析試料名	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	CaO	Na_2O	K_2O
井尻野採集尖頭器	75.19	0.11	12.39	2.23	0.72	3.73	5.32

*分析装置は、セイコー電子工業株式会社卓上蛍光X線分析計SEA-2010Lを使用した。



第19図 K_2O-CaO 散布図



第20図 $Fe_2O_3-TiO_2$ 散布図

分譲住宅造成に伴う確認調査

所在地 総社市総社三丁目902-1他

調査期間 1996年9月17・18日

調査面積 約15m²

調査概要

総社市の町並みは、総社宮を中心に東西に延びる道沿いに発展してきた。さらに、近年は、総社駅から市役所を結ぶ幹線が東に延長整備され、しだいに市街地が南に広がっている。

総社宮周辺では、中央公民館総社分館や総社幼稚園が改修された際、立会調査を行ったが遺跡が存在する安定した土層は確認されていない。

今回確認調査を実施した地区は、住宅地であり既存の建物を撤去した後、整地し分譲するものであった。備中國府の位置は市内金井戸を中心とした地域で想定されていた。しかし、数年に及ぶ国府確認調査では、所在を確認できなかった。このため、総社宮は国府の所在を探る手がかりでもあり、建物が撤去された機会に遺跡の確認を実施した。この地域の北では地形図から旧河道が南西から北東に流れていることが読みとれるので、T-1からT-3までを設定した。全体に厚い盛り土が認められ、基盤層と考えられる茶褐色土層で遺構検出を行った。基盤層は南に向かってわずかに下がる。T-2では建物の基礎が残っており、この基礎より南は土層がグライ化していた。T-3でわずかに中世と考えられる溝状の遺構が認められた。

T-4、T-5は、総社宮の南参道が古い地割りを反映していることが考えられるため設定した。調査の結果、想定された位置で東にわずかに下がる肩を検出した。しかし、調査範囲は狭く離れていることから判断は困難であるが、可能性を考えたい。用地西の南北道は、馬場と呼ばれる用地より高い道であったことが知られている。

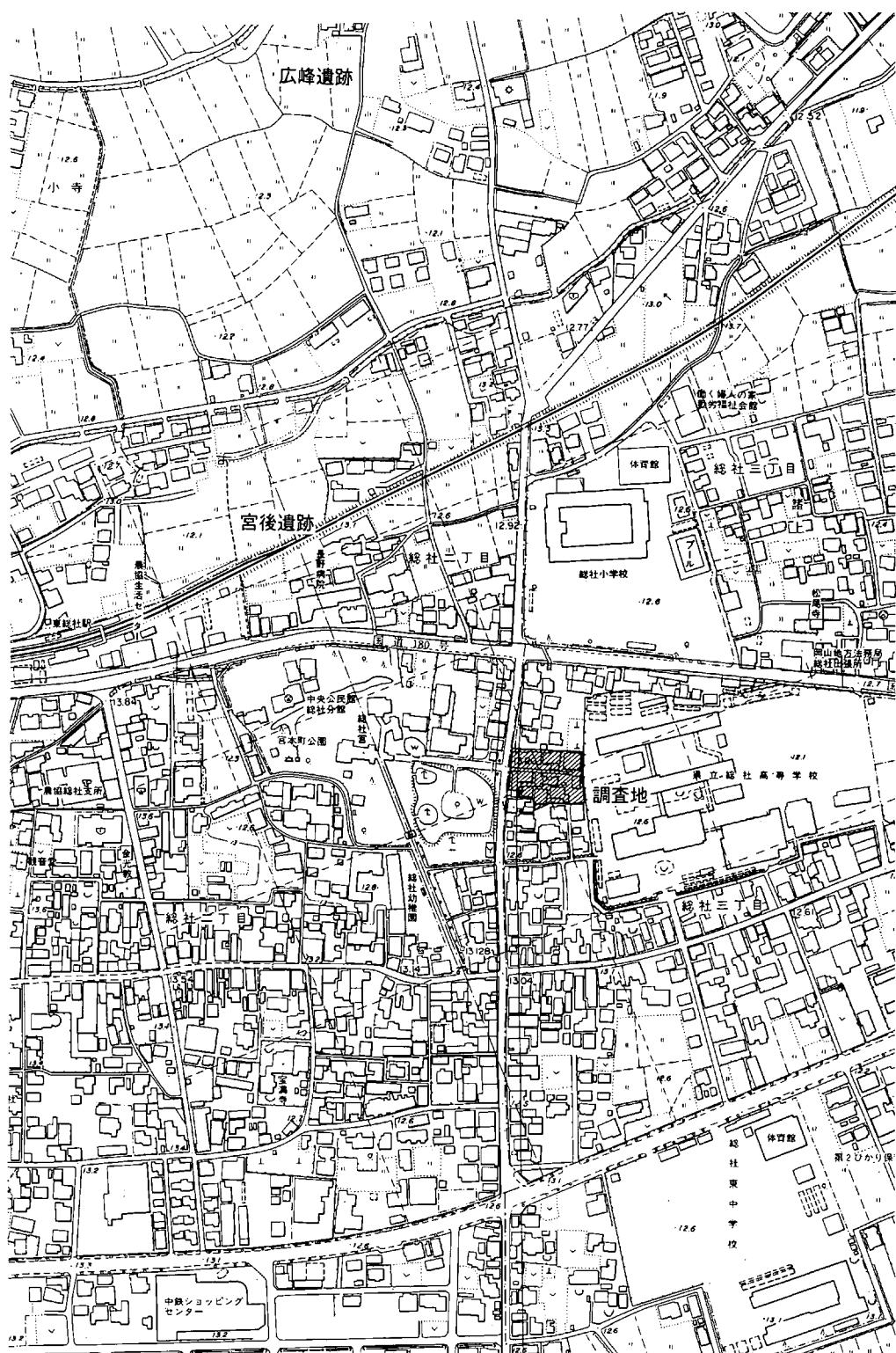
調査の結果、調査区の基盤層は現在の総社宮より一段低く盛り土がなされていること、明らかな遺構や遺物が少ないとから、総社宮関連遺跡の広がりは判明しなかった。
(谷山)



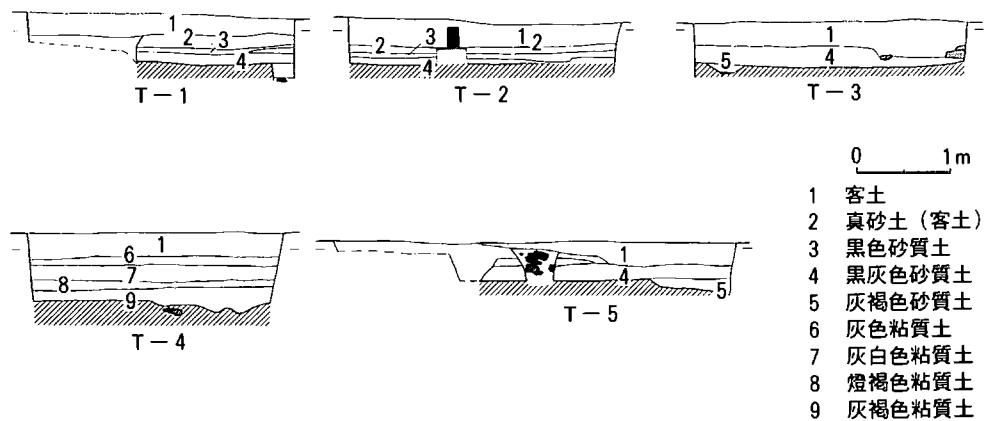
第9図版 調査地近景（西から）



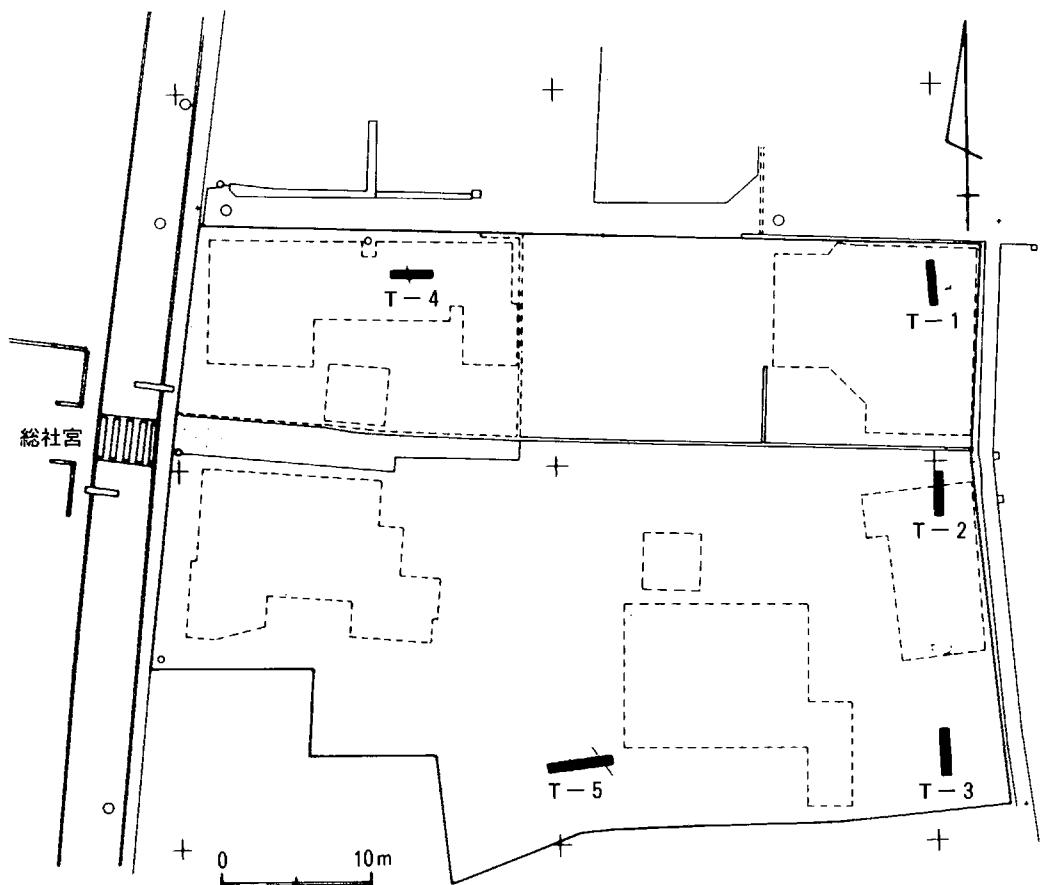
第10図版 T-5断面



第21図 調査地位置図 ($S=1/5,000$)



第22図 トレンチ断面図 ($S=1/80$)



第23図 トレンチ配置図 ($S=1/500$)

備中国分寺境内の排水管埋設に伴う立会調査

遺跡名 備中国分寺跡（国指定史跡）

所在地 上林1046他

調査期間 1996年10月5日～21日

調査概要

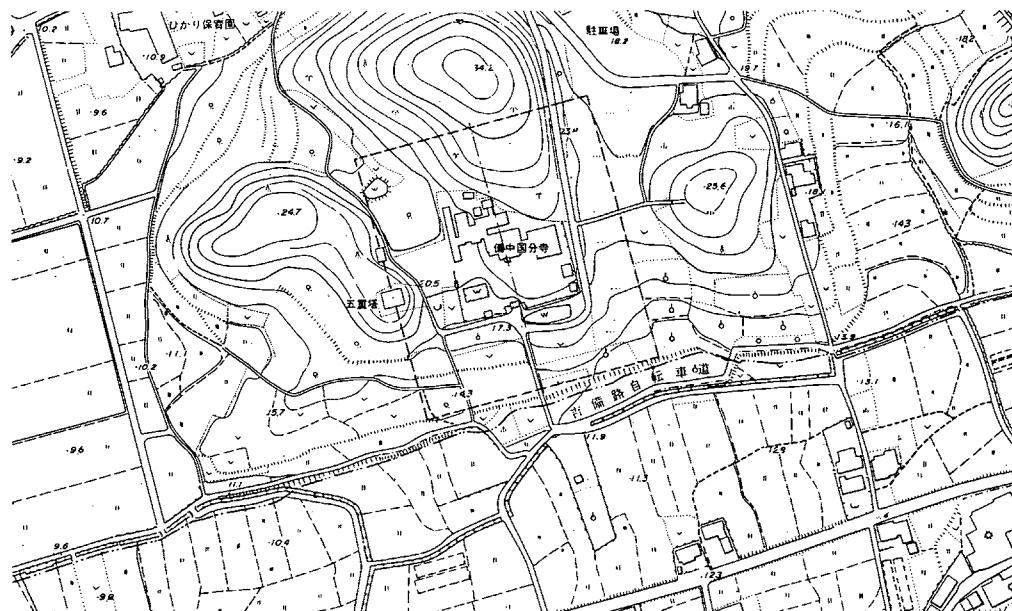
備中国分寺は天平年間に創建された寺院跡であり、東約500mには尼寺が創建されている。

備中国分寺の寺域については県教育委員会において確認調査が実施され、寺域を画する築地跡、南門、中門などが確認されている。しかし、中心伽藍は江戸期に再建された現在の国分寺が重複するため詳しいことは判明していない。

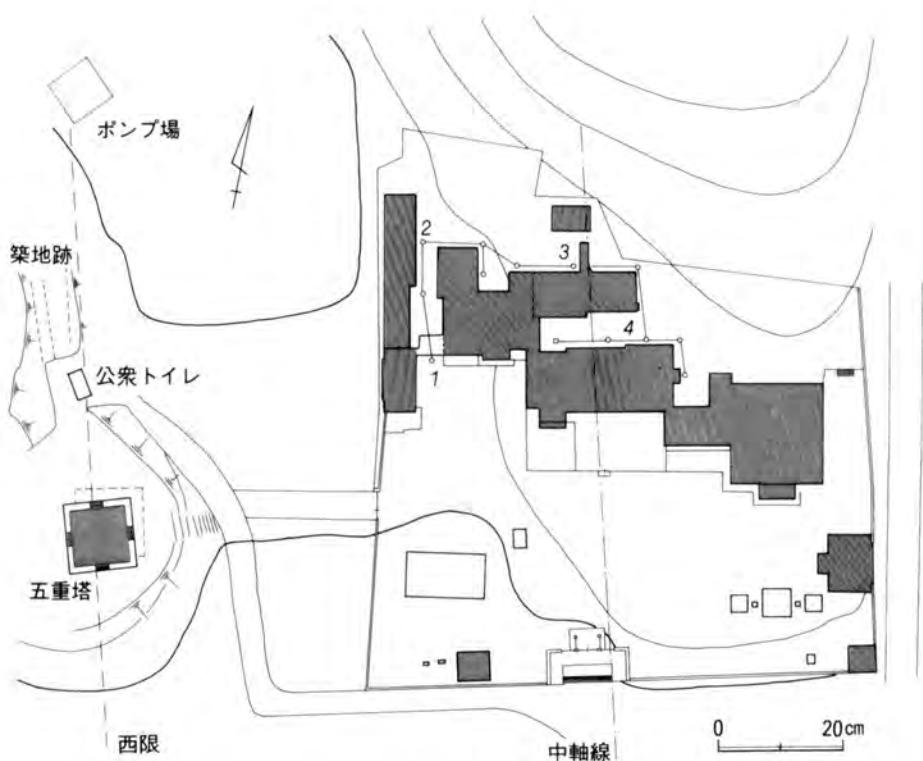
今回の調査は、すでに境内地近くに設置されている排水管に、国分寺の排水管を連結することから文化庁に史跡現状変更を提出し、職員が立ち会うこととした。排水管は第25図の1から4までの範囲で埋設した。

調査は掘削幅が狭いため概要しかつかめない。1から2にかけては地山が深く多くの盛り土認められる。3付近では地山が高い位置にあり、安定した尾根すじになる。4では3同様地山が高くここでは、奈良時代の瓦が入った穴が認められた。これらのことから、3、4付近は寺域の中軸線上にあたり、特に4付近には何らかの建物が想定される。

第25図に今回の立会調査範囲と昨年撤去した公衆トイレの位置を合わせて載せている。ここ



第24図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第25図 排水管設置位置図 ($S = 1/1,200$)

は、推定西限位置にあたる。図をみると確認した西限位置と推定位置にずれが認められる。しかし、この図は五重塔周辺の図と現国分寺配置図を合成したものである。かりに元になる図を別に求めると、五重塔が点線位置にずれるものがある。この点線範囲で公衆トイレを東に振ると西限位置と前年に確認した西限と考えられた地山の整形が重なる。このことから、重要な遺跡においては小規模な改変にも対応できるような大縮尺の遺跡測量図を作成していきたい。

(谷山)



第11図版 1の断面



第12図版 4の断面

共同住宅建設に伴う確認調査

遺跡名 石原後遺跡

所在地 中央一丁目23番107

調査期間 1996年11月5日

調査面積 約60m²

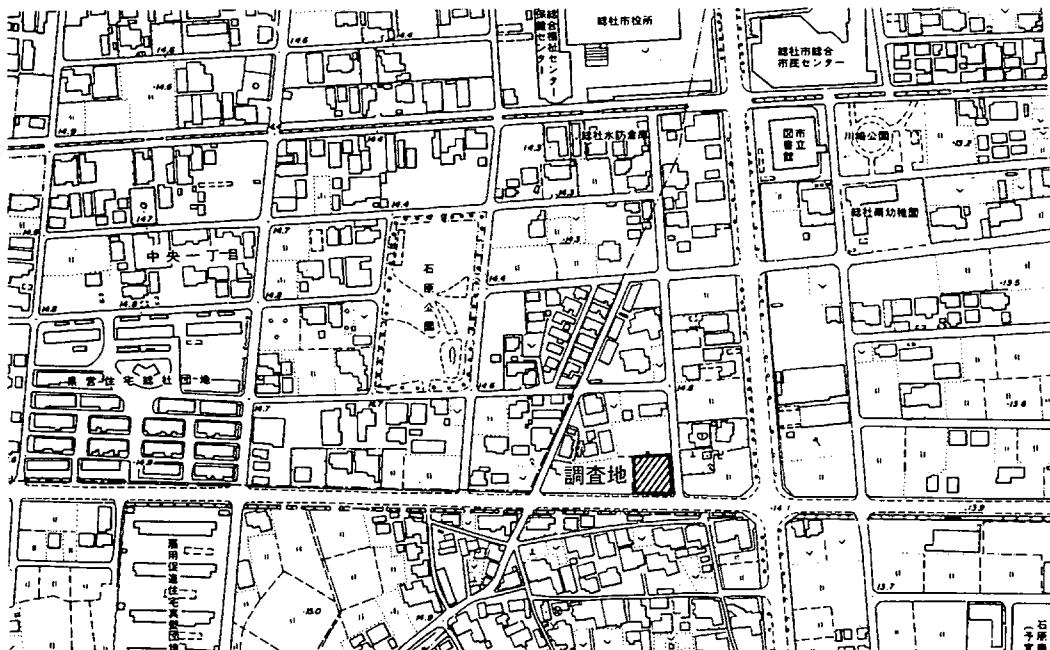
調査概要

近年市役所周辺の開発により、遺跡の広がりが明らかになりつつある。今回確認調査を実施した地域では、隣接する文化筋公園の建設に伴い発掘調査が平成3年に実施された。このため、遺跡の広がりが想定される本調査区で建物建設予定部分の確認調査を実施した。

先に調査された石原後遺跡では、溝状遺構が多く検出された。今回の調査においても、表土下で、溝状遺構が3本検出されその上に白色砂質土の凹部が調査区中央に認められた。また、調査区両端では住居址と考えられる方形の掘り方も検出された。

開発においては、全体に40cmほど盛り土がなされ地盤改良も部分的であった。さらに、改良の柱状改良を細いものとすることが可能であり、基礎が盛り土内であり遺構面までの掘削は行われないので、工事中の立会調査することとした。

(谷山)



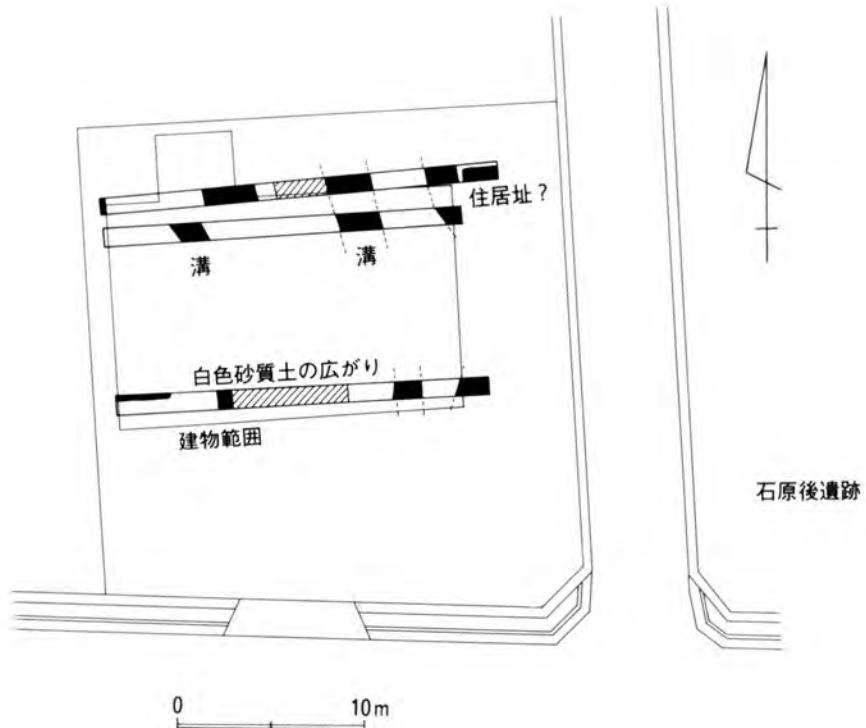
第26図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第13図版 調査地近景



第14図版 遺構検出状況



第27図 遺構配置図 (S = 1/400)

共同住宅建設に伴う立会調査

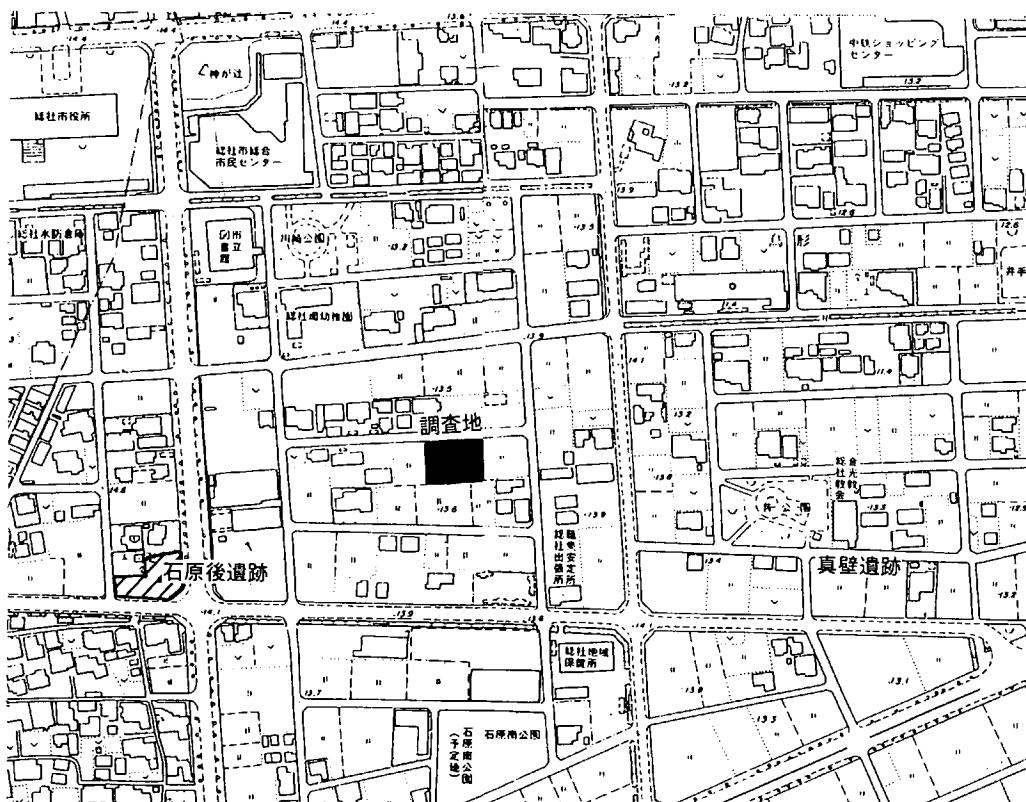
所在地 総社市中央三丁目13番112

調査期間 1996年11月9日

調査概要

2棟の共同住宅建設に先立ち、両棟の境界にブロック塀を設置することとなったため、その基礎工事部分を立会調査した。なお、両共同住宅建築の際は盛土をし、掘削が盛土内で収まるよう計画されていた。また下水道も完備されているため、浄化槽の設置も必要ないことから調査対象より除外した。

調査地は、総社市役所の南東約300mに位置する。調査範囲は、幅60cm、長さ約27mで、現水田層上面から30~35cmまで掘削が及ぶ。現水田層直下には基盤層が広がり、密度は低いものの基盤層を切り込んだ遺構の存在が確認された。調査区の幅が狭いことや工事と競合し時間的制約もあったため底面を確認することが出来ずその性格を明らかにしえないが、柱穴、土壙、溝の他、住居址とおぼしきものが検出された。埋土の色調等から、中世の溝が1条；他の遺構

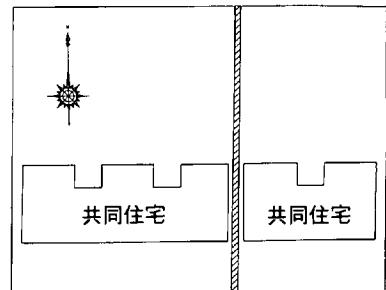


第28図 調査地位置図 (S=1/5,000)

はすべて弥生時代～古墳時代のものと想定される。遺物は、風化し表面が剥落した弥生時代中期後半の甕口縁小片1点の他、古墳時代前半と思われる土師器の胴部片等が少量出土しているが、いずれも図化に耐えないものである。

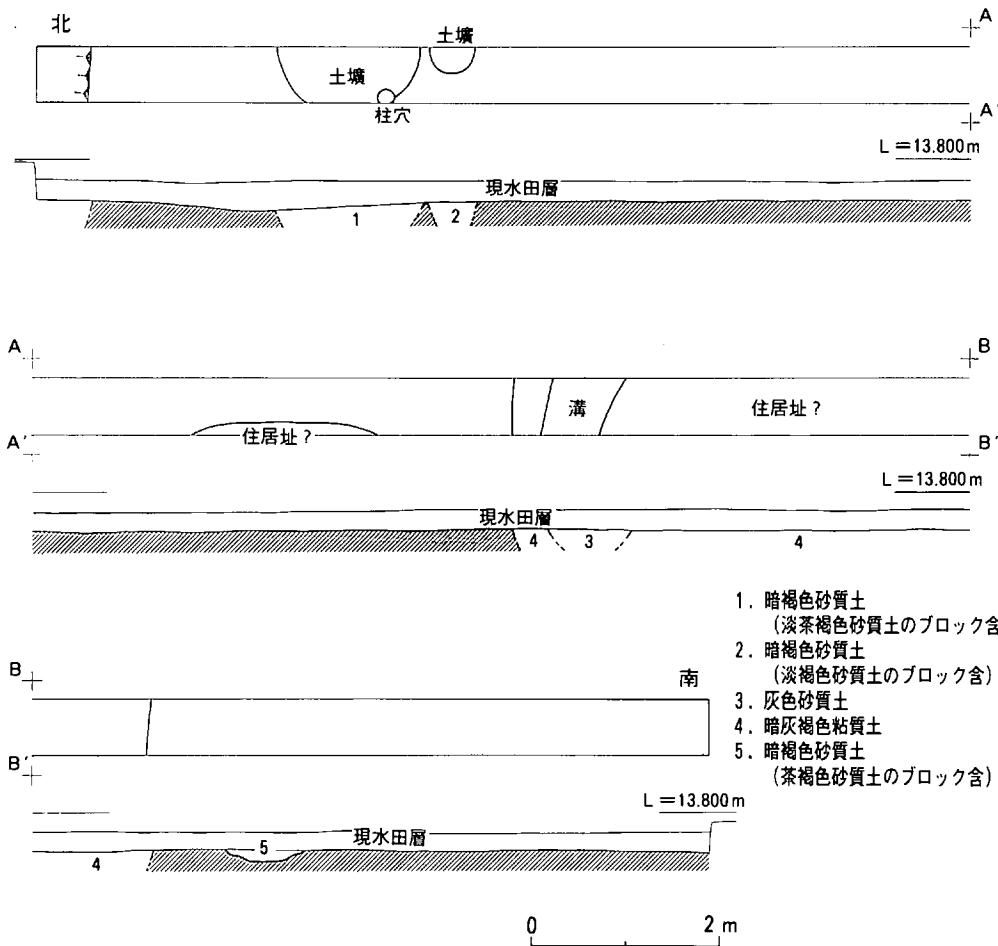
本調査地の東方約200mには真壁遺跡が広がっており、この間河道や低位部の存在は想定できないことから、本遺跡も真壁遺跡に連なるものと思われる。

(平井典子)



■ 調査区
(ブロック塙基礎部分)

第29図 調査区位置図 ($S=1/750$)



第30図 遺構配置図・土層断面図 ($S=1/80$)

共同住宅に伴う確認調査

所在地 総社市小寺

調査期間 1996年11月21日

調査面積 12m²

調査概要

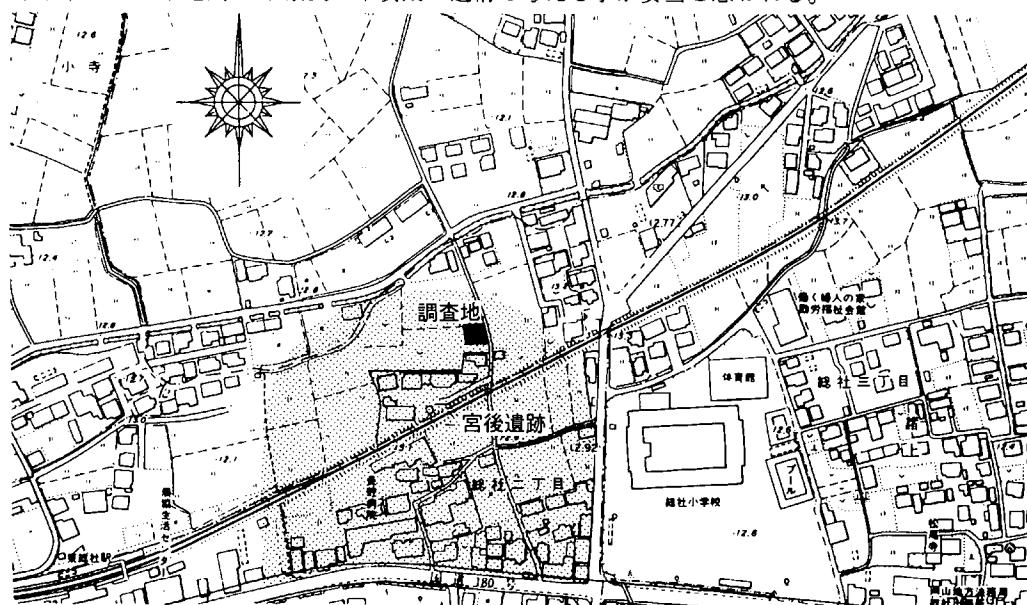
今回の調査は土地所有者による共同住宅建設に伴う事前の確認調査として実施したものである。本調査地は旧市街地の中心に位置する総社宮の北約200mに所在し、旧来の景観は水田地帯であったが近年の区画整理により一帯の住宅化が急速に進行している。

調査対象地は、総社宮の北に広がる微高地上の宮後遺跡に含まれることが予想されるため、地盤改良工事により掘削される範囲に南北方向の1m×6mの試掘溝2本を設定し、重機で掘り下げて遺構の有無についての確認を行った。

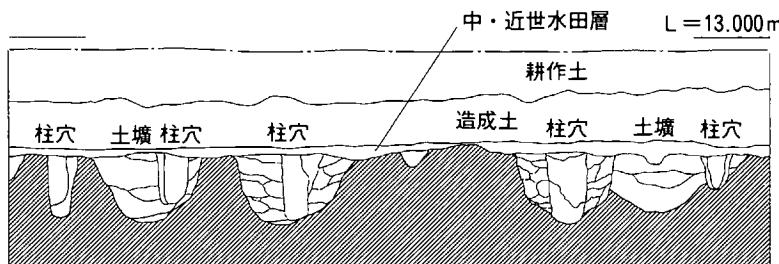
西側のトレンチでは現代水田の約50cm下層で、明黄色の良く締まった基盤層を確認した。

遺構は中近世水田に削平されているが、この基盤層に掘り込まれた土壙・柱穴が良好に遺存しており、柱穴は堀り方の径60cm～70cm、柱痕跡の径30cmを測り、埋土は炭・焼土を含む暗灰褐色土である。土壙の埋土は暗黄褐色土を呈し炭を少量含んでいるが、いずれも柱穴が土壙を切っていることから、ある程度の時期差があることが推定できる。

これらの遺構の具体的な時期としては、遺物が皆無のため類推の域を脱しえないが、柱穴の規模、埋土の状態等から奈良・平安期の遺構と考える事が妥当と思われる。



第31図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第32図 西トレンチ土層図 ($S=1/60$)

東側のトレンチでは、西トレンチに比べて基盤層が60cm以上下降しており、埋土が溝状の堆積を呈していることから、南北方向に走る大溝の肩部に位置していると考えられる。

以上の調査結果から本調査地は宮後遺跡に含まれ、古代の遺構が比較的、濃密に存在することが判明した。宮後遺跡については、区画整理時の調査によって遺跡の存在は明らかになったものの、諸般の事情により遺構については明確にされていない。

しかしながら、包含層として取り上げられた遺物と出土状況を詳細に検討した結果、通常の古代の集落とは考えられない、いくつかの特色が明らかになった。

出土した土器の時期は9世紀代中頃と10世紀後半に集中しており、特に9世紀の土器群では、緑釉陶器、灰釉陶器やヘラ磨きを施した須恵器坏、畿内からの搬入土師器などが注目される。また、法量分化した須恵器・丹塗り土師器など器形としては供膳具が大半を占める傾向を看取でき、他の調査例等から考えて官衙遺跡特有の土器組成と見ることができよう。

このような宮後遺跡の遺物の特色は時期も含めて、南に近接する備中國総社宮が平安初期に合祀されたとする文献の記述に合致するものであり、宮後遺跡を含む総社宮一帯に9世紀段階の官衙的施設が存在した可能性は十分考えられる。

律令期の備中國府は加夜郡に所在したことが文献に伝えられているが、加夜郡はその中心が現在の総社市域にあったと考えられている。これを受け、多くの諸先学が主として歴史地理学の立場から市内東部の金井戸地区に国府の所在地を比定している。

しかしながら、総社市教委の三次にわたる確認調査でも遺構・遺物に官衙的なものは一切確認されておらず、その所在地は今日に至るまで不明のままである。

それに対して、宮後遺跡では遺構はともかく遺物については、少なくとも郡衙クラス以上の官衙を想定させる内容であり、祭祀の中心である総社が近接して存在することと併せて、少なくとも平安初期の国府の有力な候補地と考えて大過ないと思われる。

なお本調査地については遺構の重要性を鑑み、地盤改良に伴う掘削を影響ない深さに止めて遺構の保全に努めた。

(武田)

共同住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市井手字西屋敷697-5, 697-6

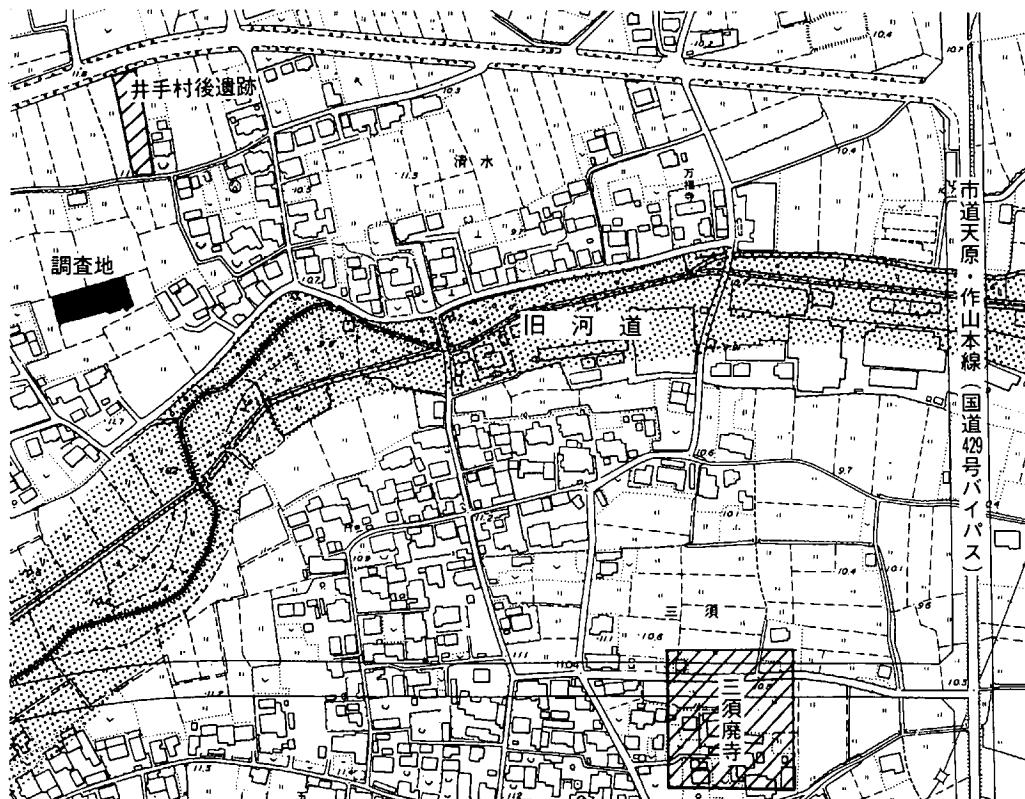
調査期間 1996年12月13日

調査概要

本調査は、2棟の共同住宅建設に伴い実施したものである。共同住宅自体は盛土内で収まるが、浄化槽部分は盛土下深く掘削が及ぶため、この部分のみ立会調査を行なった。

調査地は、総社市役所の東方約1kmに位置し、周辺には同一微高地上に井手村後遺跡、旧河道を挟んで南東に三須廃寺想定地、さらに東方には、市道天原・作山本線（国道429号バイパス）を挟んで、「郡殿」の墨書き土器を出土した三須河原遺跡を始め、三須畠田遺跡、中須賀遺跡等が存在する。また近年、国道429号バイパス改良工事に伴う発掘調査によって、新たな遺跡も知られるところとなっている。

調査区はすでに掘削されていたため、土層断面のみの観察となった。しっかりした黄褐色の基盤層は認められず、遺構が切り込む層は軟質の淡茶褐色砂質土で、その下層には砂層が堆積

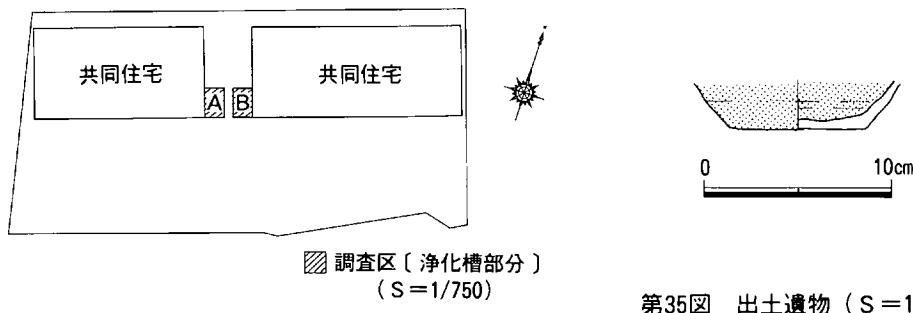


第33図 調査地位置図 (S=1/5,000)

する。調査区の南約70mには東西に走る旧河道の存在が想定され、土層からも本調査地が微高地の端部にあたるものと思われる。

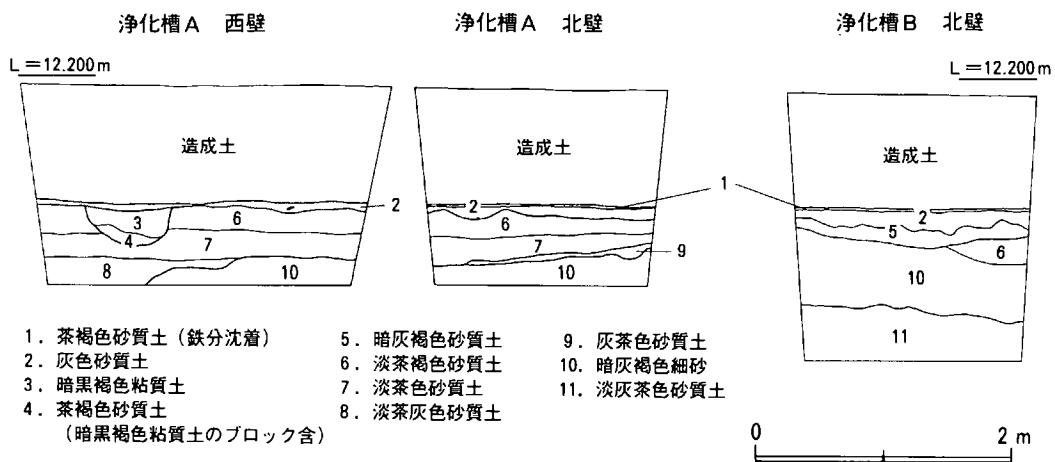
明確な遺構としては、土壙が1基認められる程度である。遺物は、浄化槽A西壁2層中から9世紀前半と考えられる丹塗りの土師器坏（第35図）が出土している。その他には、中世と思われる土鍋の胴部小片など図化に耐えない遺物が数点出土しているにすぎない。この周辺は、全体に遺構の存在は希薄であったものと思われる。

（平井）



第34図 調査区位置図

第35図 出土遺物 (S=1/4)



第36図 土層断面図 (S=1/60)

三須地区県営ほ場整備に伴う確認調査

遺跡名 三須河原遺跡他

所在地 総社市三須

調査期間 1996年12月16日から1997年3月6日

調査面積 約380m²

今回、調査の対象となった三須地区の平野部は、作山古墳に隣接する西の低丘陵と、東の備中国分寺・江崎古墳・緑山古墳の所在する丘陵とに挟まれて広がっており、旧山陽道から総社市街を遠望すると眼前にその全景をほぼ見渡すことができる。

この平野部は一見、平坦な印象を受けるものの、詳細に踏査すると東西方向に1m以上の段差を有している幾筋かの低位部の痕跡を認める。

特に、東西の丘陵の北辺を掠めて東流する旧河道は、古代の郡制上の賀夜郡と崔屋郡を分ける郡境と推定されており、弥生・古墳時代の遺跡の在り方にも影響を与えていたと思われる。

この幾つかの低位部に挟まれて東西に伸びる微高地は、いずれも西の低丘陵から派生したものと考えられ、それぞれの微高地上には坪名を冠した遺跡が存在している。

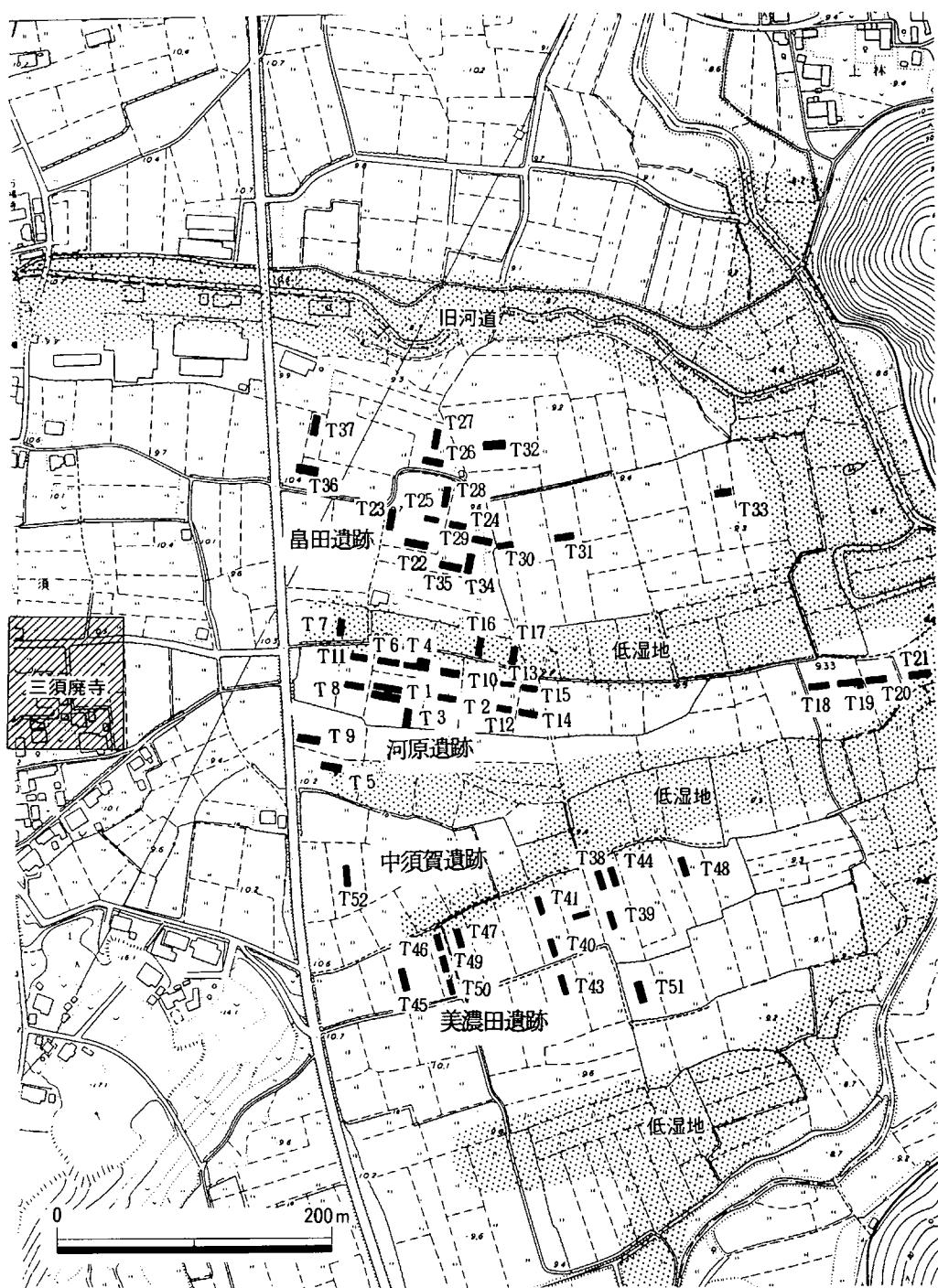
これらの遺跡群については、平野を南北にトレンチ状に調査する結果となった国道429号線の拡幅工事に伴う県教育委員会の成果や、給油所建設に伴う市教育委員会の調査から近年急速にその内容・時期が明らかになっており、安定した微高地上に密度の濃厚な集落遺跡の広がりが予想されている。

総社市三須地区の国道429号線以東約20haのほ場整備については、以前から事業が計画・推進されていたが、平成8年度中頃になりにわかに具体化し始め、平成9年度より事業に着手し秋以降に工事が開始されることが決まった。

これを受け県教育委員会文化課は、埋蔵文化財の存在が濃密に予想される地域のため、事前に遺跡の保護保存を講ずるための基礎資料を得る確認調査の必要を認識し、倉敷地方振興局と協議を行った。しかし、現時点で対象地はすでに作付けが行われており、平成8年度の収穫後に確認調査を行うことは県教委の人員配置上不可能という結論になった。

また、事業の性格上工事と平行しての調査も不可能であり、事前の確認調査の成果が工事計画にも大きく影響するため、平成8年度中の調査は不可避となり、県文化課、振興局、市教育委員会で再度協議した結果、今回の確認調査については市教育委員会が県文化課の指導を受けて行うことが決定した。

確認調査は対象地の収穫が終了した12月以降に開始し、9年度も作付けを行うため早急に調査を終了し、埋め戻し等の事後処理を入念に行うこととした。



第37図 トレンチ配置図 ($S = 1/5,000$)

今回の確認調査では、対象地の微高地上に存在する遺跡の範囲と密度を把握することに主眼を置いてトレンチの設定を行ったが、埋め戻しにかかる時間的な制約等から低湿地については調査を行うことを当初より断念せざるを得なかつたことは悔やまれる。

また、調査開始時点で地権者からの発掘調査に対する同意が得られない水田がかなり存在するためトレンチの設定位置を本来必要な地点から外さざるを得ない場合があり、遺構の密度や範囲の把握に粗密が生じたことは否めない。

遺跡名は従来の呼称に従い、北から畠田遺跡、河原遺跡、中須賀遺跡、美濃田遺跡とし、調査の概略を述べたい。

畠田遺跡は北辺を郡境の旧河道で区切られ、三須地区の微高地では北端に位置している。

この遺跡については国道西側の給油所建設に伴う調査で弥生・古墳時代の住居址多数を検出した。今回、国道東側に設定したT36、37でも同時期の住居址を表土直下で確認した。

このうちT37で検出された6世紀後半の住居の床面上には、鍛冶炉と見られる被熱硬化面が遺存している。また、国道を挟んで検出された整然と配置された集落と同じカマド主軸をとることから同時期に存在したと見られ、集落構成を考察する上で興味深い。

T22～25、28、34、35では弥生期の住居址と古代～中世の土壙・柱穴を検出したが、東に下降する微高地の端部と推定されるため、遺構はさほど顕著な在り方を示さない。

ただ、T34では現畦畔に合致する窪みに古代の瓦、礫を集めて投棄した13世紀の集石遺構が検出されたことから、中世段階で現在の地割りの基本が出来上がるような大規模な開発が行われたと思われる。

また、T26、27、30～33では中世水田層は認められるものの、それ以前の遺構は存在せず、下層にグライ化した土壙が見られ低位部の様相を示すことから、中世段階で集落淵辺の水田として開発されたと考えられる。

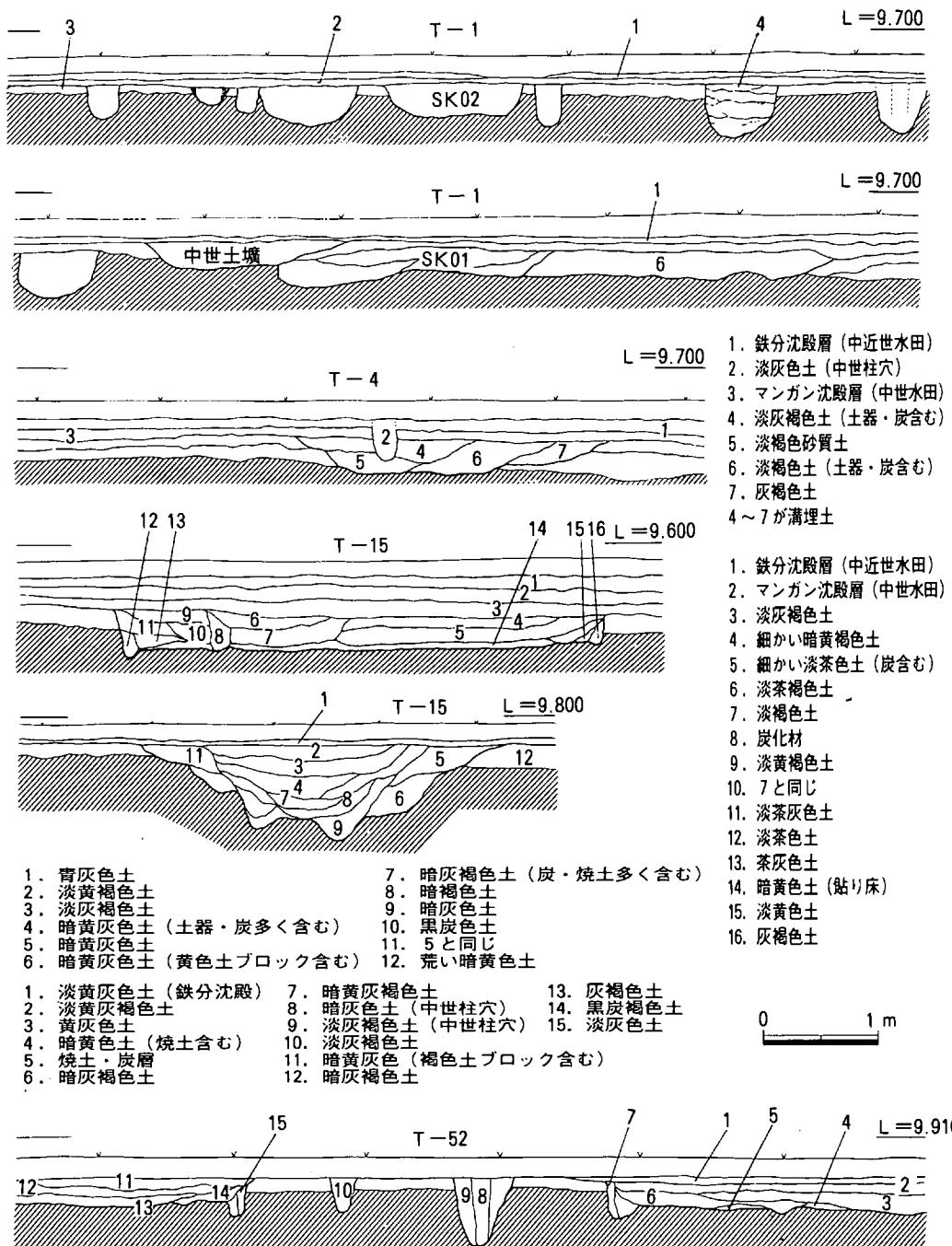
河原遺跡は畠田遺跡とは、幅約20mの低湿地をはさんで南に位置している。遺跡の立地する微高地は南辺と東辺に礫層が露出し、他の遺跡に較べ基盤層も脆い砂質土で水位も高い。

遺構はT1、4、6、8に於いて奈良時代の柱穴、土壙、溝が密集して存在する状態が検出された。柱穴は中世水田に削平されているものの、遺存状態は非常に良好である。

遺構はT1に最も多く集中しており、T4、8では東西を区画する溝が検出された。柱穴は一辺60cm～80cmの隅丸方形の堀り方で、柱痕跡は直径30cm前後を測るものが多い。

柱穴の規模や埋土等から復元できる建物は数棟あり、いずれも柱間210cmで方位に合わせた規則的な配置をとる。柱穴の切り合いと埋土中や柱痕跡中の土器から建物は数時期存在することが推定でき、溝も埋められた後に土壙が堀り込まれている状況が看取され、整地して同じ場所に建て替えを繰り返したと考えられる。

1. 鉄分沈殿層（中近世水田）
 2. マンガン沈殿層（中世水田）
 3. 淡灰褐色土（土器・炭含む）
 4. 淡灰色土（灰褐色ブロック含む）柱穴埋土
 5. 淡黄灰色土（マンガン含む・中世水田層）
 6. 暗灰褐色土（炭・土器・瓦多く含む）



第38図 トレンチ断面図 (S=1/60)

出土した土器は大半が供膳具で、その時期は8世紀前半と9世紀初頭に中心がある。

また、8世紀中頃の畿内から搬入された土師器数点と在地産の丹塗り暗文土師器が土壙（SK01）から出土した他、土壙（SK02）と柱穴（P25）の埋土から「郡殿」と墨書した8世紀初頭の須恵器坏身、坏蓋4点が出土した。

墨書土器は供伴する在地産須恵器とは明らかに異なる上質の製品で、墨書の意味と併せて特別な目的、所属の器として用いられていたと考えられ、「郡殿」が指す建物の広がりは今回の限定的な調査では不明であるものの、河原遺跡に近接して郡衙が存在する可能性が非常に高いことが判明した。

河原遺跡では奈良時代以前の遺構は不安定な微高地の基盤状態が影響したためか、比較的、希薄でありT15で弥生期の住居址が1軒と溝・土壙が確認された他、T10、18、19で小規模な弥生時代後期の土器溜まりが検出されたのみである。

中須賀遺跡は丘陵から派生した安定した微高地上に所在し、給油所建設時の調査で古墳時代後期の住居址が確認されている他、現状で観察できる丘陵裾の低位部も中世に掘削された水田であることが判明している。T52では弥生期と古墳時代後期のカマド付きの竪穴住居址各1軒を確認したが、基盤土が安定しており中世以降の地下げもさほど顕著ではないことから、遺構の残存状況も良好で、ある程度密度の高い遺跡の広がりが予想される。

美濃田遺跡は中須賀遺跡とは狭い低位部を挟んで南に隣接しており、西の丘陵から派生する微高地は、調査前の地形観察でも高まりをはっきり視認することが可能であり、今回の調査対象地中、最も遺構が濃密に存在することが予想された。

しかしながら、確認調査で遺構が検出されたのはT44、46、47のみで、微高地中央を東に流れる弥生時代後期の溝1条が検出されたに過ぎない。

各トレンチの土層は全て耕作土直下で安定した基盤層が露頭し、中世段階の水田層は見られず、かなりの削平があったことを示している。

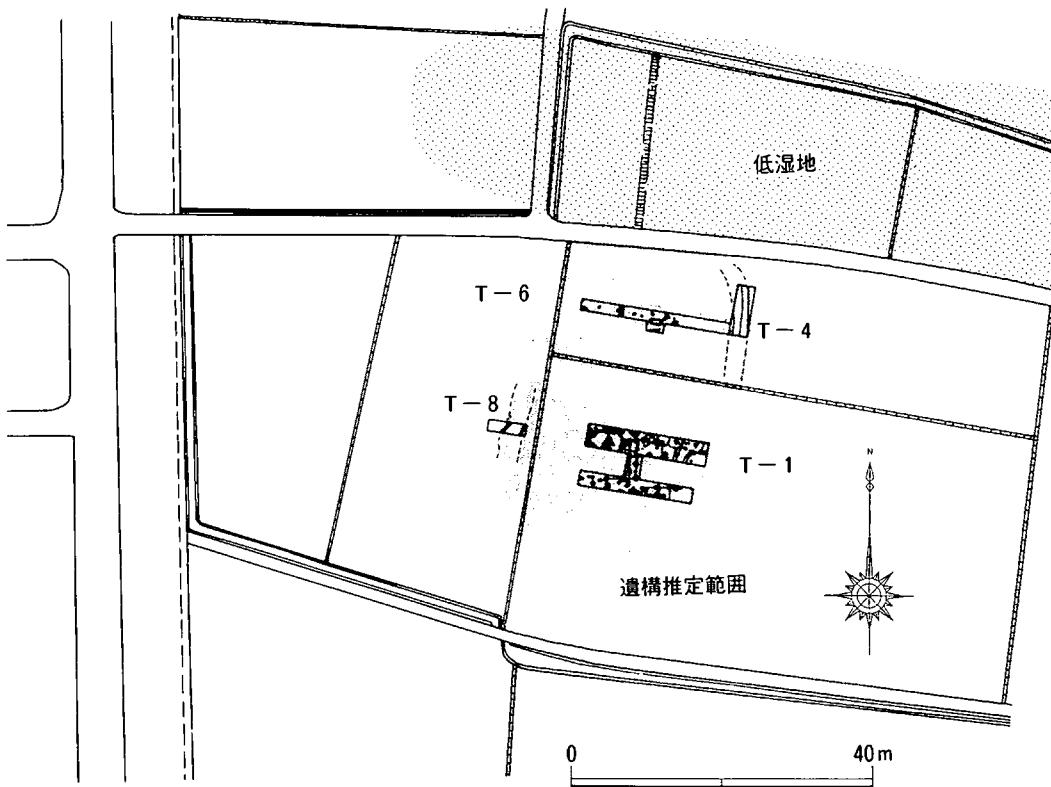
これはこの微高地全体に渡って近世段階で大規模な地下げを行い土器が大量に出土したという古老の話と整合することから、遺構の大半はすでに消滅していると考えられる。

ただ、国道の側壁掘削時に弥生期の住居址が確認されており、今回トレンチを設定出来なかつた微高地淵辺部に、削平を免れた遺構が遺存している可能性は十分に考えられる。

以上が確認調査の概略であるが、この結果を受けて現在、関係各位と大半の遺跡を保護する方向で協議中であり、発掘調査は水路部分など最小の範囲にとどめる予定である。

最後に河原遺跡で、その一端が明らかになった官衙遺構について若干の考察を加えたい。

河原遺跡で今回検出された建物群の広がりを、南北が南端のT3で該当する時期の遺構が確認されなかった点と、北端の低湿地の存在から約40m、東西を溝の間約30mと考えると、約



第39図 三須・河原遺跡遺構範囲推定図 ($S=1/1,000$)

1200m²の方形区間にあることが想定できる。

河原遺跡の所在する三須地区は、古代の郡制では窪屋郡美賀郷に比定されている。

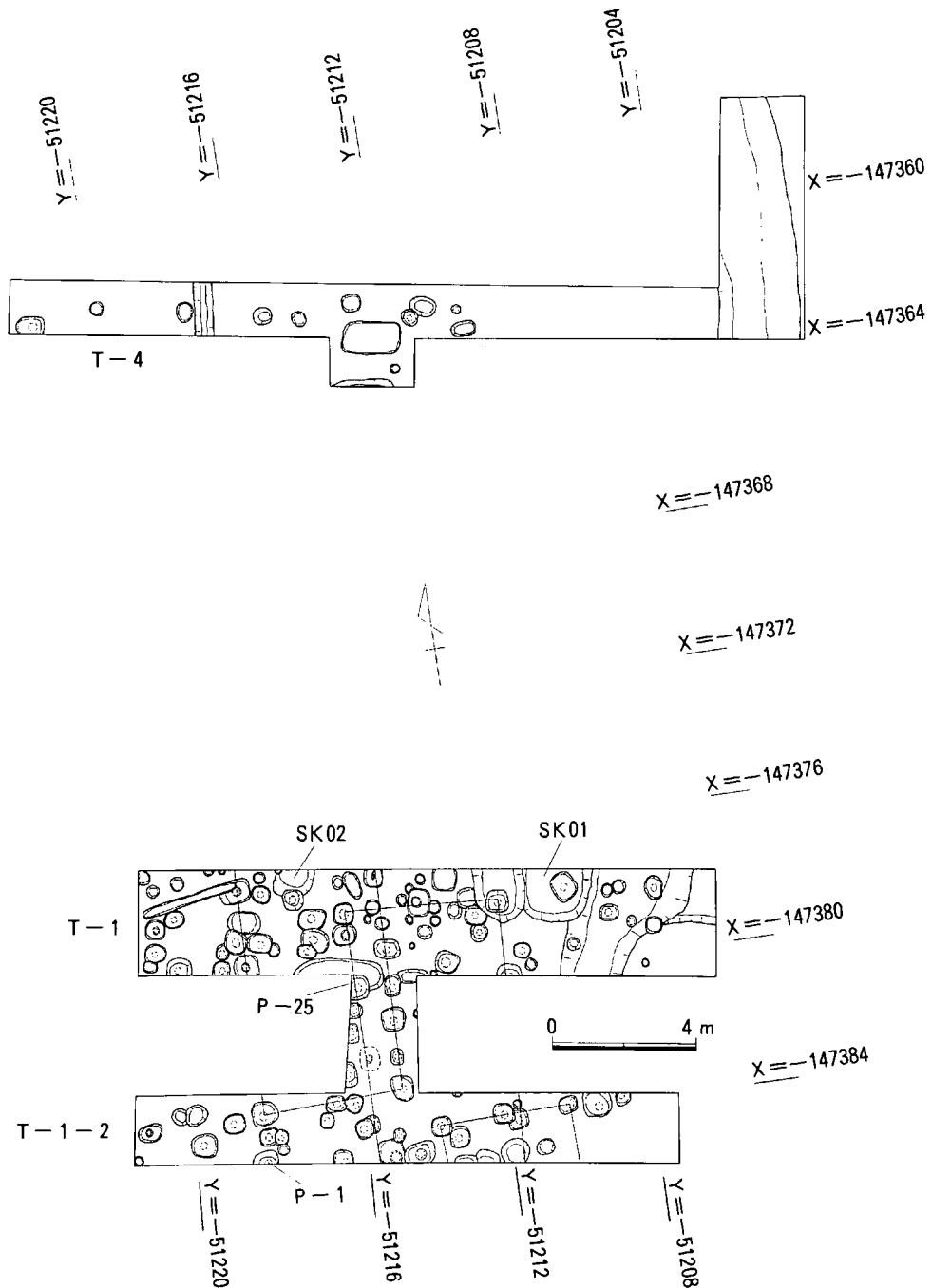
その窪屋郡衙の位置について、歴史地理の立場からは河原遺跡の南2km、旧山陽道沿いの山手村に所在したと考えられている。

今回の調査で明らかになった河原遺跡の建物群の規模と広がりは、郡衙中枢の政務機関である郡庁と考えるには無理があるが、「郡殿」の殿を特別な目的の建物、若しくは官位を有する人物に対する敬称とみなす立場に立つと、郡司クラスの官人の館と考えることは可能である。

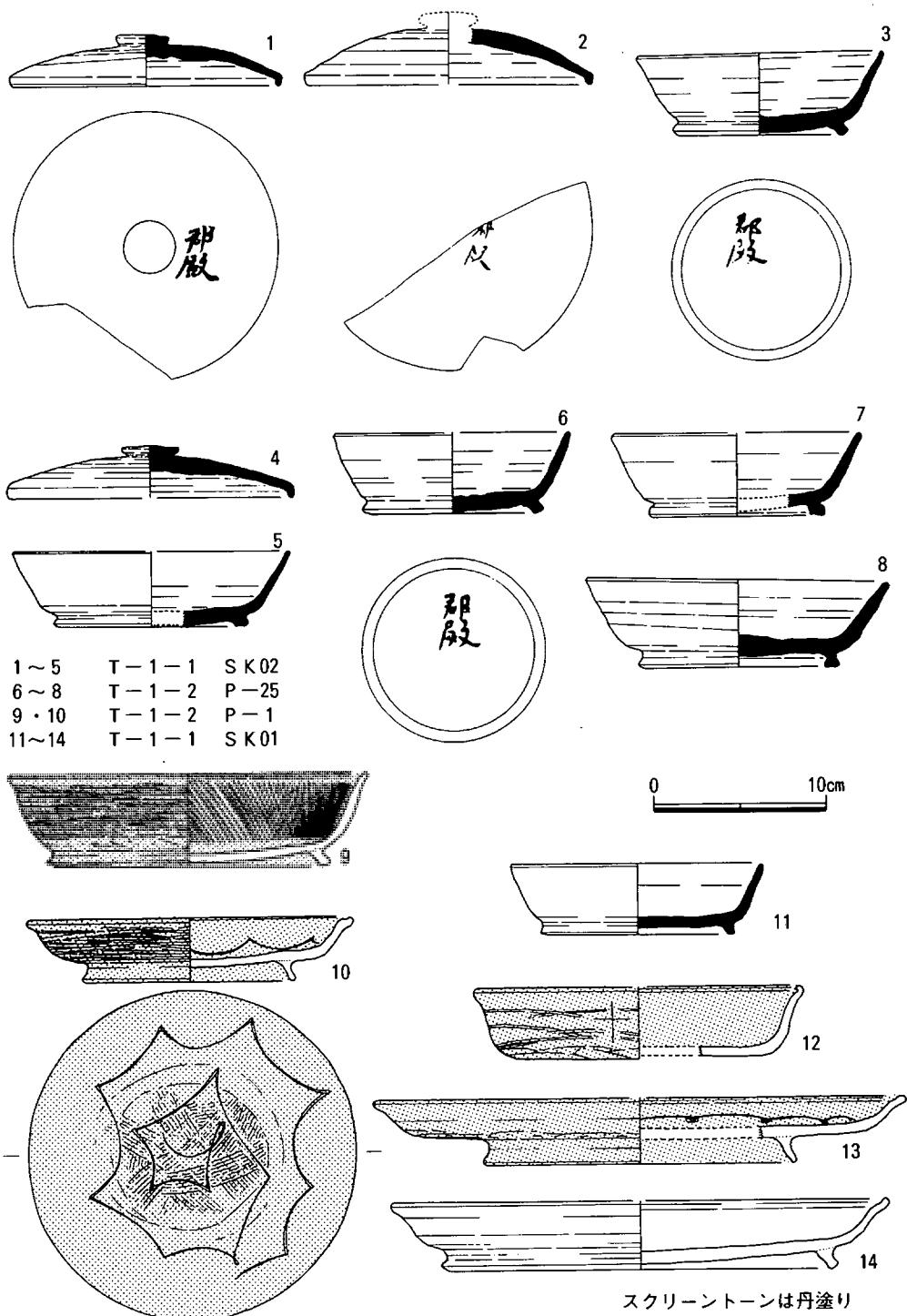
また溝や土壙から、西300mに所在する三須廃寺出土と同型の布目瓦片が比較的多く出土しており、河原遺跡の西方に郡衙の中枢が存在していると仮定すると、郡寺と郡衙という関係も成り立つことが考えられ、地方官衙の成立時の歴史的環境を示す一類型と捉えることもできる。

この点については、三須廃寺の創建が白鳳期に逆上る可能性があり、建物群から出土した土器の初現がやはり8世紀初頭にあることからも十分想定できよう。

しかしながら、以上の想定は現時点までの限定的な知見に基づいたものであり、類推解釈の域を脱し得ず、今後の調査の進展により容易に改変されるものと思われる。 (武田)



第40図 三須・河原遺跡T-1・4遺構配置図 (S=1/200)



第41図 出土遺物 ($S=1/4$)



第15図版 三須・河原遺跡 T-1, T-4



第16図版 T-1-2, P-1断面

久代字勝負砂所在の遺跡確認調査

遺跡名 勝負砂遺跡・勝負砂製鉄関連遺跡

所在地 総社市久代2544-1

調査期間 1997年3月17日

調査概要

調査は、土砂採取事業にともなうもので、対象面積は約8500m²である。

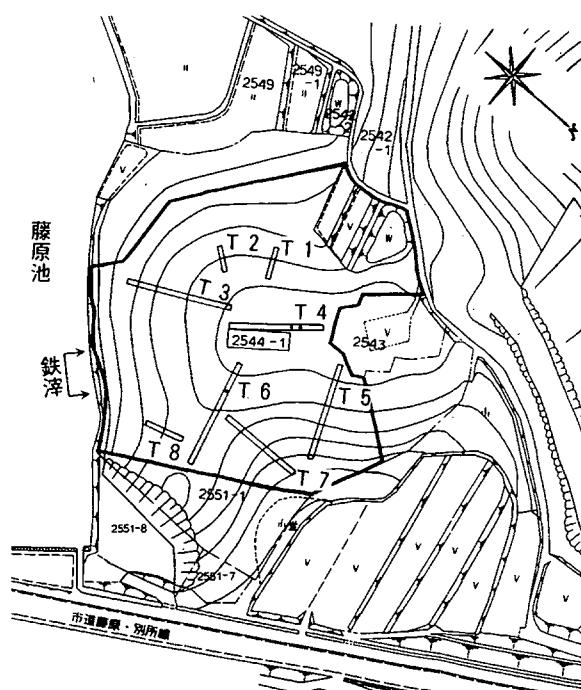
まず、調査地の伐採が終了した時点で、分布調査を実施し、古墳となる可能性のある高まりを2ヶ所確認したほか、丘陵頂部平坦面の広さや平地との比高差、さらに周辺での発掘調査事例から弥生集落と製鉄関連の遺跡の存在が予想された。しかしながら、頂部平坦面を除いた丘陵斜面の多くは開墾を受けており、大きな段差と造成面が認められている。

上記の予測から確認調査は、バックホウを用いたトレンチ調査で行った。その結果、古墳状の高まりは遺構でないことが判明したが、頂部平坦面のトレンチより柱穴が検出され、また開墾による造成面の一部においても遺物包含層が確認できた。さらに、池に面した法面で幅約10mにわたって鉄滓を含む堆積層が確認された。

以上のことから、この度の土砂採取事業にともなっては、丘陵頂部平坦面に弥生集落が立地

し、須恵器片の出土から古墳あるいは該当期の遺構、さらに鉄滓の出土から製鉄炉の存在が確認できた。検出された遺構・遺物の質と量からその密度はそれほど高くなく、包含層の範囲などからも後世の開墾等によってかなりの掘削が行われたものと判断される。しかし、丘陵全体の遺構が消滅するほどであったとは考えられないことから、事業に先だっては発掘調査を実施することとした。

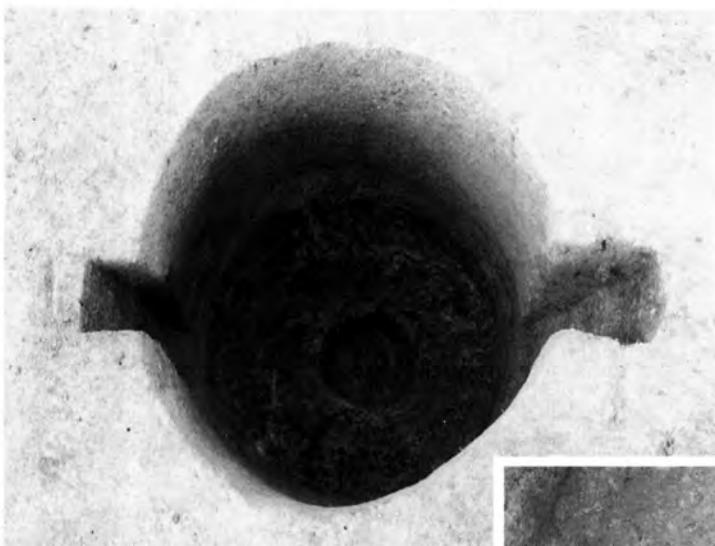
(前角和夫)



第42図 調査地位置図（トレンチ配置図）
(S=1/2,500)



第17図版 勝負砂遺跡全景（第1次発掘調査）



第18図版 貯藏穴（底部中央に柱穴、同壁に溝あり）



3. 発掘調査の概要

鬼ノ城 角楼および西門の調査

所在地 総社市奥坂1762-10ほか3筆

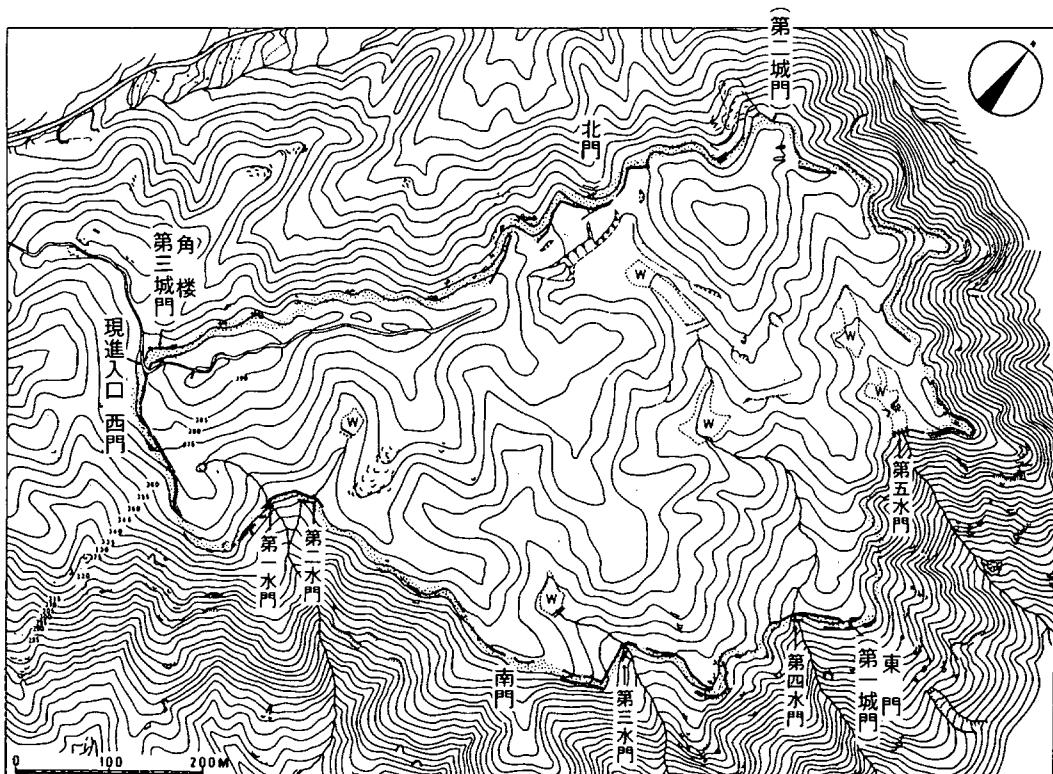
調査期間 1996年10月21日～1997年4月4日

調査面積 約570m²

角楼跡（旧第3城門跡）

1. はじめに

鬼ノ城は、昭和46年に高橋 譲氏によって発見され、神籠石として報告された。昭和53年には、坪井清足氏を調査団長とする「鬼ノ城学術調査委員会」により、主として外郭線を中心とした調査が行われ、その成果が昭和55年に報告書『鬼ノ城』として刊行された。その後、昭和58年には、城内中央部において礎石建物跡が発見され、昭和61年3月25日に国史跡に指定された。平成元・2年度で公有化し、整備公開にむけて諸準備が進められた。このため、平成5年には「鬼城山整備委員会」を設置し、諸先生方の御指導・御提言をいただき、発掘調査を実施してその成果をもとに整備計画を立案することになった。



第43図 鬼ノ城平面図 (S=1/8,000)

『鬼ノ城』より 一部加筆

鬼城山整備委員会

(肩書は委嘱時)

委員長	坪井清足（財団法人 大阪文化財センター理事長）
副委員長	近藤義郎（岡山大学名誉教授）
委員	水内昌康（岡山県文化財保護審議委員）
	高橋 謙（ノートルダム清心女子大学教授）
	河本 清（岡山県立博物館副館長）
	葛原克人（岡山県古代吉備文化財センター次長）
	高瀬要一（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部計測修景調査室長）
オブザーバー	文化庁 岡山県教育委員会文化課 岡山県環境保健部自然保護課 岡山県倉敷地方振興局森林課

その手始めとして、平成6年度には第1城門跡を発掘調査し、規模・構造の大要が判明した。今年度は平成8年6月24日開催の第4回鬼城山整備委員会において、第3城門跡ほかを調査対象とすることが決定され、平成8年10月21に着手し、平成9年4月4日に埋戻しを終えた。

なお、遺構の名称については、報告書『鬼ノ城』⁽¹⁾に依拠しているが、新たに城門跡等が発見されたことにより、平成9年5月13日開催の第6回鬼城山整備委員会において、一部の遺構を次のように改称することになった。また、墨状区間については、細分が必要な場合は枝番を用いることとする。

第1城門跡 → 東門跡 第2墨状区間で発見され、今年度調査した城門跡 → 西門跡
今年度試掘調査で確認された城門跡 → 南門跡 第3城門跡 → 角楼跡 未確認ながら門跡が推定されるもので、確認された場合 → 北門跡

調査は、村上幸雄、前角和夫、松尾洋平を担当者とし、文化財室職員の谷山雅彦、武田恭彰、平井典子の助力を得た。

また、整備委員会の諸先生方には、調査地の決定、発掘調査の指導、資料の提供など、あらゆる面にわたって御指導、御支援をいただいた。幾許かでも成果があげられたとすれば、それは諸先生方の御指導の賜物であり、銘記して深甚なる謝意を表します。さらに、調査中には多くの方々が来跡され、御教示を賜るとともに、資料の提供もいただきました。記して深く謝意を表します。

(敬称略、順不同)

梅崎 恵司 小田 和利 小田富士雄 亀田 修一 北垣聰一郎 白石 純

杉原 敏之 鈴木 嘉吉 宋 鎮 豪 全 玉 年 田中 淡 田中 琢
永島暉臣慎 西川 宏 福岡 澄男 藤田 憲司 渡辺 正気

2. 位置

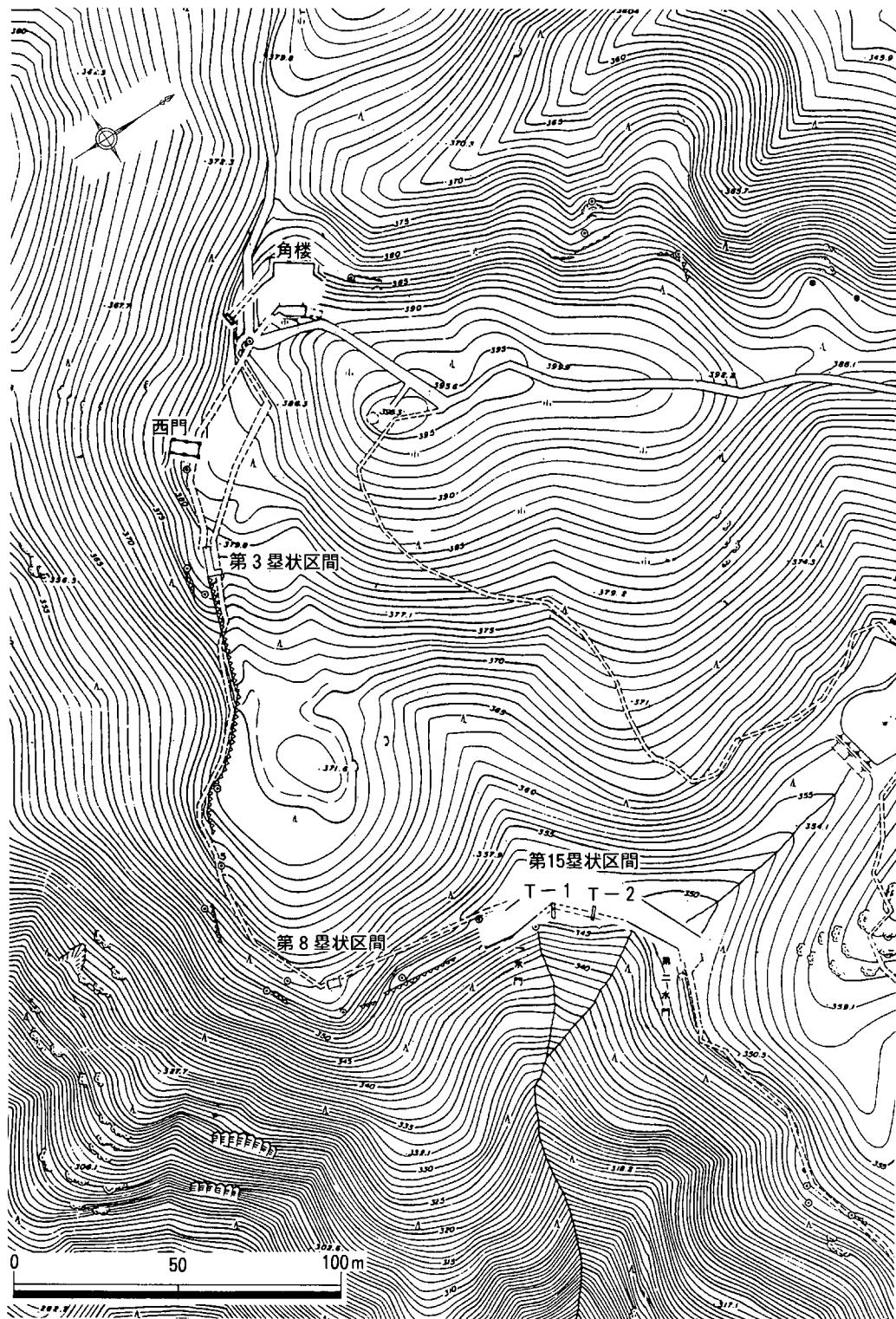
鬼城山は吉備高原の南縁にあり、標高は国土地理院発行の5万分の1の地形図によれば、397mと記されている。この鬼城山を中心に、八合目から九合目にかけて城壘が巡っており、水門、城門、礎石建物跡が確認されている。今回の調査地は、報告書でいう第118塁状区間にあたり、第3城門跡と推定されていた。

鬼城山は総社平野背後の吉備高原南縁に所在するため、正面側は急峻な山容を呈すが、背面側は高原状地形になるため比高差も少なく、また傾斜もかなり緩くなっている。城壘で囲繞された城内は、摺鉢を伏せたような山容の底部にあたり、比較的平坦な地形である。調査地の第118塁状区間は、最高所の鬼城山から西方へ40mほど下った小さく張りだす西斜面である。北と南からは深い谷が入り込んだ谷頭の鞍部上方で、現遊歩道もこの鞍部上を通って城内に入る。地形的にみて、背面側の南西端にあたり、立地上重要な地である。城門跡の所在が推定されたのも至極当然である。報告書によると「局部的にはあたかも張り出し状の土壇遺構の所在を思わせるもので、「2段積をなす外側の石垣が東へ8.6m伸びていて」「この石垣と直交して、石材の並び方が外側から逆L字状に屈折する升形遺構を構築」しており、この升形状遺構を城門跡と想定し、「中世以降の城郭にみられる「掲手門」的な門跡を推察」されていた。

3. 調査の概要

当初調査予定地としたのは、平成8年6月24日開催の第4回鬼城山整備委員会において決定された第3城門跡と第1・2水門間に所在する第15塁状区間のトレンチ調査である。その後調査中に城内外に敷石が存在することが判明したため、平成8年11月25日の第5回鬼城山整備委員会で、城内外の敷石の一部が露出している第3・8塁状区間が追加された。また今回の調査中の踏査で、西門と東門の中間地点で城門跡らしい痕跡を発見し、試掘の結果城門跡であることを確認した。のちに南門跡と名付けられた。一辺58cmの角柱の門礎をもつ掘立柱城門で、石敷等もあり構造的には西門跡に類似している。また第2城門跡より200mほど南で、土壘の一部が跡切れているところがあり、立地や石敷らしい石材もあることから城門跡の可能性が考えられるところがあり、確認された場合、ここが北門跡と称される予定である。

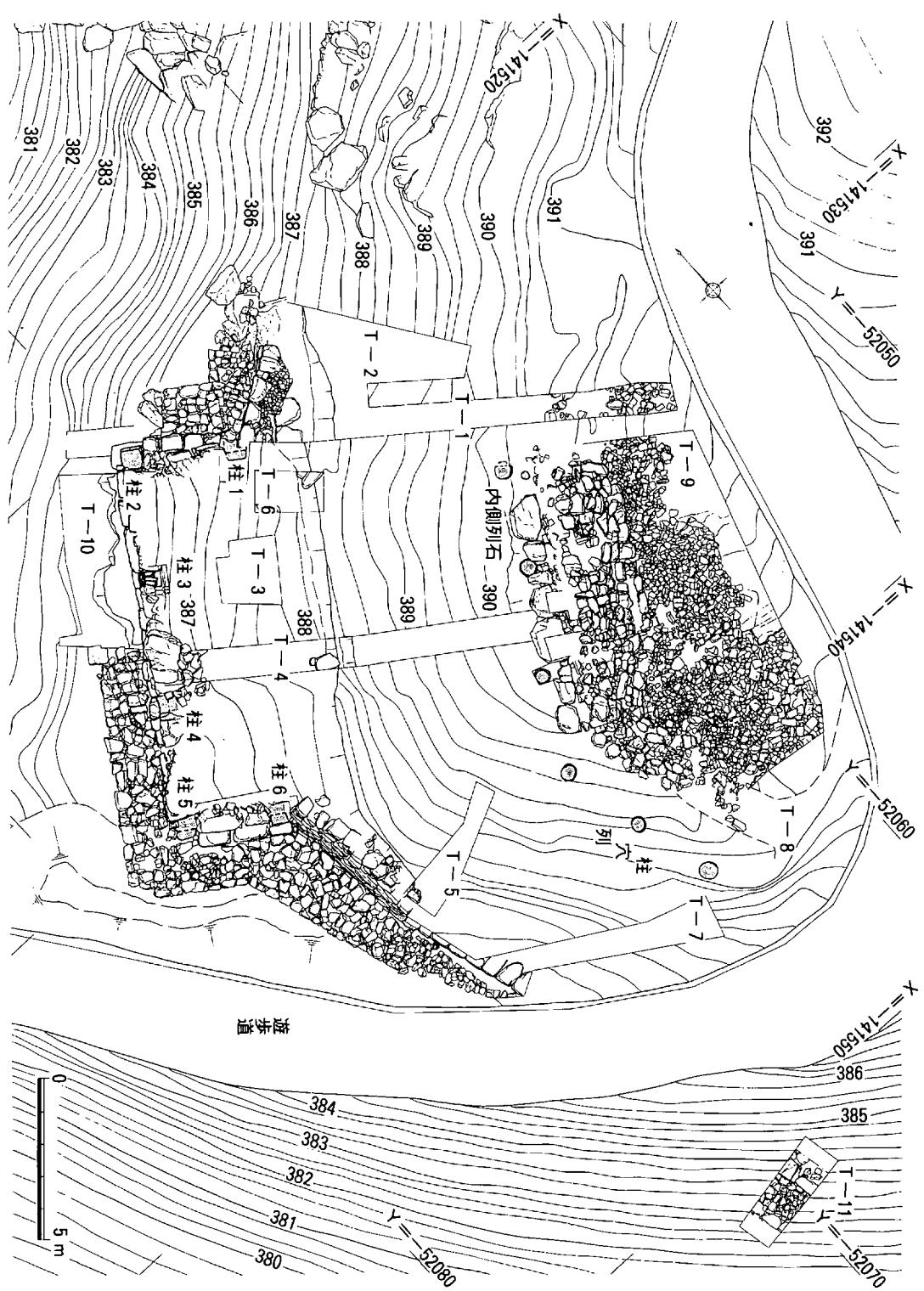
角楼のある遺構の調査前の状況は、鞍部上を通る遊歩道が西側からのみ、一部塁状遺構を切って左折して鬼城山頂部に至っている。したがって、現状では遺構はこの遊歩道の左側に所在している。傾斜に直交して1~3段積の石垣が約9mほど続き、城外側からみて左側では直角に



第44図 調査区位置図 ($S=1/2,000$)

屈折したのち、4mほどのところで鈍角に開いて続いている。一方、右側は流土により埋没している。周辺には石垣に用いたと思われる石材がかなり多く転がっていた。左側の小さな谷部のあたりは大きな露岩が多数あり、近代以降と思われる土砂流失防備のための砂防石段が数段築かれている。直列する石垣から13mほど上方には、石垣の正面に平行して内側列石が4石並び、それより遊歩道側には土壘の一部が城内側を想わす緩い傾斜で下降している。地元古老によれば、現遊歩道は古くからある山道を拡張したことであり、状況的には門跡を推定するには恰好の地である。

調査は門跡を想定していたので、最初に城外側からみて石垣の左屈折部に平行してT1を設けた。傾斜の高い遊歩道側には、敷石と称した一群が検出され、トレンチ下方では地山を削平して2石が並び置かれていた（これを外側列石と解し列石と称した）。露出していた石垣と列石には先後関係があり、石垣が後出のものであることはいうまでもない。この2石については、調査時から今日にいたるまでも、その性格をめぐって担当者間で異論の生じたままである。さらに石垣前面には20~50cm大の上面平らな石を用いた通路と推定される敷石部分があり、また石垣の屈折部では、当初は石垣材が転落、欠失したと考えていたところで柱穴（柱2）を検出した。このためもう一方の奥側の屈折部を注意深く観察したところ、ここにも柱穴（柱1）を確認した。柱1の上面では須恵器片とともに、饅頭金物が出土し、門跡の存在をより一層濃厚にイメージさせたので、左側にT2を設けたが、地山を削平、整形しているのみで門跡の存在はあまり期待できない状況であった。そのため柱2から石垣沿いに南側に基底石を追い、その過程で柱3を検出した。ここは基底石、石垣材をともに欠き、上部に小石材が数石詰め込まれたような状態であり、それらは後世に充填されたものと考えていたところである。なお、石垣前面の敷石はやや傾斜がきついためか、この周辺では消失していた。この段階で柱穴を3穴検出したこととなったので、安易に考えて柱3の対応側へT3を設け、地山面まで慎重に掘下げたが、柱穴は確認できなかった。そこで基底石を順次追いかけ、柱4~6を検出し、さらに当初砂防石段と考えていた右側の石垣が、柱6から接続することも確認した。しかし、転石や土砂が多いいため中間部を残し、遊歩道側の土壘部分の調査を先に行った。この一連の作業過程で、石垣の前面に敷石が存在することがあきらかとなった。こうして、この遺構の外側には長さ約13m、奥行約4mの長方形の石積みの張り出し部が付設され、その左右にも石垣が接続し、さらに土壘につながることが確認された。なお、T11は土壘延長想定線上に設定したトレンチであり、ここでも城外側敷石を検出した。また張り出し部の外形沿いに、約4m間隔で正面側4本、奥行側2本の計6本の一辺約50cmの角柱がほぼ等間隔に石垣の間に存在することがあきらかになった。こうなると問題は柱3、4に対応する柱があったかどうかである。これについては、すでにT3では存在しないことが確認されているから、柱4の対応側には存在しない可



第45図 角樓部平面図 ($S = 1/200$)

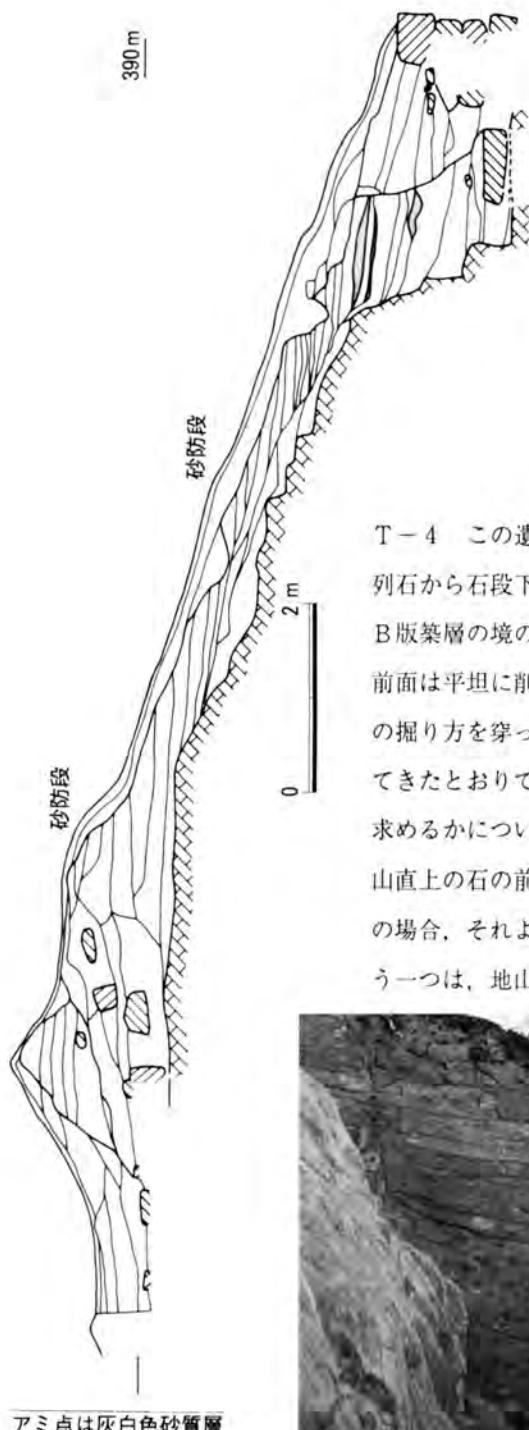
能性が高く、トレシチは設けていない。

当初、門跡とした推定は以上の状況では疑問となり、整備委員会においてむしろ望楼的な施設ではないかとの指摘を受け、構造的な観点から台輪等の痕跡を追求するよう指導を受けたが、何分にも流土が著しく、大半が消失していることもあり、その確証を掴むにはいたらなかった。

T 4 は、遊歩道から角楼石垣にかけて、この区間のほぼ中央部に設定し、版築や石積み、地山の改変等の把握につとめた。城内側では、T 1 で検出されていた凹凸の多い石材を用いた敷石が拡がっており、それに接して粗略ながら数段の石段を検出した。石段の最上段と内側列石との間には、一段低い位置に敷石と推定される石材があり、石段との先後関係をうかがわせた。下方では版築の先後関係も T 1 と同様の状況がみられ、のち全面的に新旧版築の境界線を検出した。その位置関係をみても、張り出し部の付設との密接な関係をうかがわせるようである。T 5 は石垣端部の確認のためであり、T 6 は T 1 で検出された 2 石の列石のつながりの確認のものである。T 7 は遊歩道の建設時に土壘が横断的に削平されていた部分である。そのち城内側については、T 4 で一部検出されていた石段、敷石等の全面検出を行い、また内側列石に沿うような状態で 6 本の柱穴を確認した。なお、T 2 より北側は露岩も多く、土壘外側線の確認も困難であった。また内側列石を確認するため、いくつかの小トレンチを設けた。しかし、土壘の接続線は想定できるものの、確定できる資料は何ら得られなかった。感触では、土壘の基底幅は T 5 , 7 側に比べ、T 2 側は幾分広いように思われる。以下、各部についてやや詳しくみていきたい。

T - 1 旧表土層を削り、傾斜の緩い部分は地山面を出す程度だが、下方では垂直状に削り落とし、さらに平坦部状に削り整えて整地面をつくっている。薄層の整地層上に 80cm 大で上面の平らな 2 石（列石）を並べ置いている。現状でみるとかぎり、版築層はこの列石を包括して築成されている。版築層中には礫をかなり多く含んでいるが、これは地山削平时に生じたものを混入している。層は薄層部分もあるものの、かなり厚層である。数層ごとに灰白色砂質層を含み、全体的には茶褐色系を呈す版築層（表記上 A 版築層と仮称）である。硬度は、下層の土質は粒子も細かくよく締まっているが、上層になるほど礫を多く含み軟質になる傾向がある。石垣は、この A 版築層を掘り込んで構築している。全体的に淡褐色系土の版築層（B 版築層と仮称）で、やや厚層であり、また硬度も弱い。加えて、A 版築層に存在する灰白色砂質土層はこの B 版築層には存在しない。いずれにしても、列石を含む A 版築層と、石垣をもつ B 版築層は先後関係にある。なお、このトレンチでは石段は検出されていないが、そのあたりには先後関係をうかがわせるかのような山形のたかまりもある。

T - 3 柱 3 に対応する柱穴の有無を確認するためのトレンチであったが、地山面まで掘下げ



第46図 T-1断面図 ($S=1/80$)

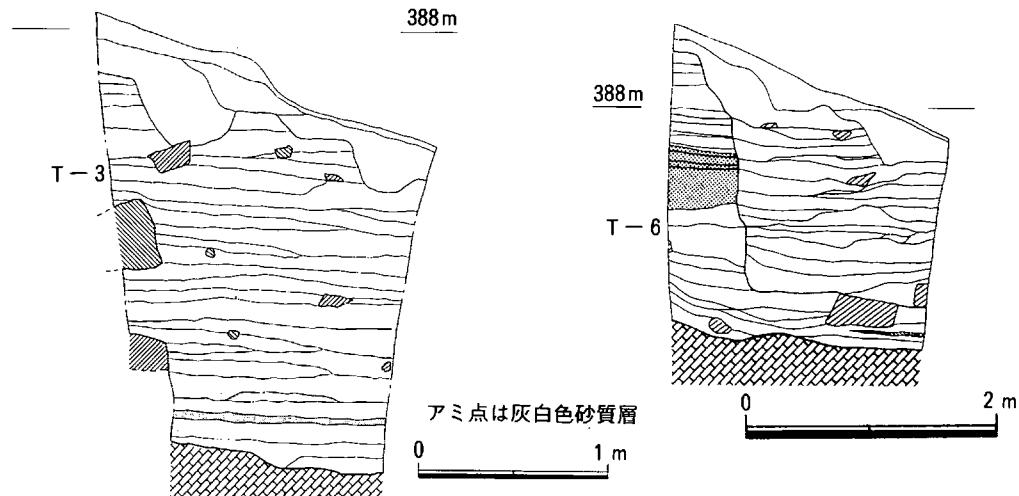
たものの、柱穴は存在しなかった。A版築層は下層4層のみで、その上層はB版築層である。両層の境は、T-4と同じく灰白色砂質層である。

T-6 T-1の2石の列石とのつながりを求めて設けた。A・B両版築層の境も明瞭に捉えられ、 $80 \times 40\text{cm}$ 大の1石があるが原位置とは考え難い。この石は列石の一つなのか否かは不明である。この石の下方に地山を穿って径 28cm 、深さ 18cm の柱穴状の穴が検出された。

T-4 この遺構の全体を通す横断トレンチであるが、内側列石から石段下の敷石は未掘である。地山面まで削り整えA、B版築層の境の $50 \sim 60\text{cm}$ ほど手前は垂直状に削り、それより前面は平坦に削り整え、先端部には石垣基底石を据えるための掘り方を穿っている。A・B両版築層の上層はこれまで述べてきたとおりであるが、A・B両層の境の下のラインをどこに求めるかについて、調査担当者間にも異論がある。一つは地山直上の石の前面から地山に直下するという意見である。この場合、それより前面はすべてB版築層との理解となる。もう一つは、地山直上の石から、灰白色砂質層が石垣基底石上



第19図版 T-1断面



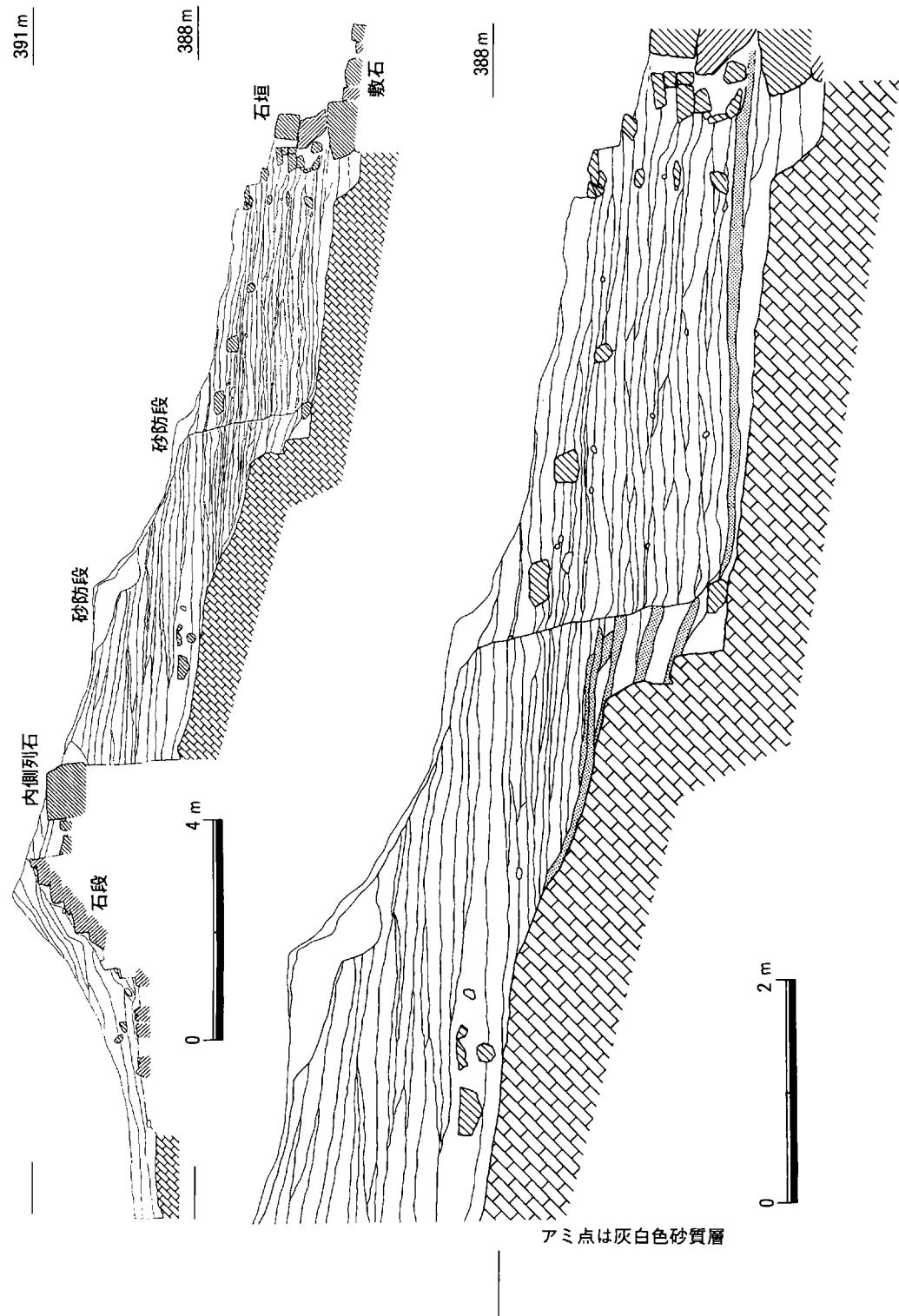
第47図 T-3 ($S=1/40$)・T-6 ($S=1/60$) 断面図

に水平にのびており、この灰白色砂質層をA版築層の残存する最上層とする意見である。この状況はT1, 3, 6でも同様であり、張り出し部石垣の築成期の評価が大いに異なることとなる。この問題は後述したい。内側列石はA版築層を掘り込んで大型の石材の面を城内側に揃えて並べ置かれている。この内側列石上に、かってどれほどの高さで版築層が積上げられていたのかは、現状では不明とするほかないが、石垣前面の敷石上面と内側列石上面の比高差は約5.3mであり、残存する石垣最高部とは約4.1mを測る。なお、このトレーナーでも列石かと思われる $80 \times 50\text{cm}$ 大の1石があり、大きさからも位置的にも列石とみても可能な方であるが、石材はアプライドで他の列石とは異なる。

T-7 遊歩道建設時に削り取られた壁面の清掃と、一部サブトレーナーによる地山面までの掘下げを行った。やや大型の安定した石材による外側列石が検出されたが、この列石と石垣の間の外側列石はややこぶりであり、屈折角度も微妙に異なっている。敷石のかなりの部分が遊歩道の側溝設置時に消失しているようである。外側列石、敷石のレベルからみて、遊歩道下にはこれに接続する列石等が残存しているとみてよく、T11に接続するものと考えられた。

T-11 T7の外側列石の延長線上に設定したもので、外側列石、敷石とも良く残っていた。壁面をみると、土壘の下部もかなり良く残っており、外側列石上面からはほぼ垂直に立ち上がっていた。版築層中の礫の混入は少なく、上層を除き全体に堅く良く締まっている。T7の土壘の状況と良く似た土層状況である。敷石は前端に大きめの石材を用いており、幅1.5mを測る。近代になって、この上面に数段積みの砂防石垣が築かれていた。

T-10 敷石が欠失していたので、版築築成時の柱穴の検出を地山面で行った。欠失部分は8m近くにおよぶが、柱穴は検出できなかった。敷石はかっては他と同様に存在したと考えられるが、この位置は小さな谷状地形をなすところであり、そのため長い年月の間に欠失したもの



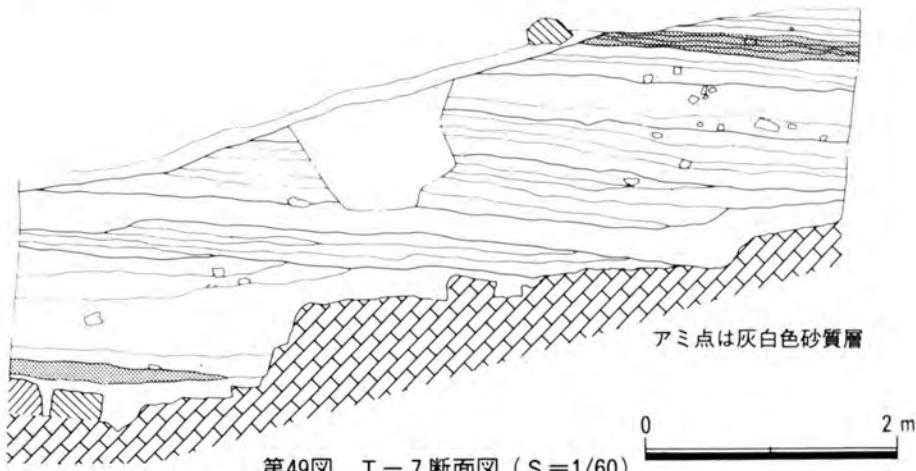
第48図 T-4・同拡大断面図上 (S=1/120)・下 (S=1/60)



第20図版 T-4 (左) 全景、(右) 石垣基底石周辺

と思われる。なお、埋め戻し時に石垣保護のため、盛土したのち敷石を復元した。

角楼石垣 この遺構は、小さく張りだした斜面中央部に位置している。北東方向から接続し
388 m



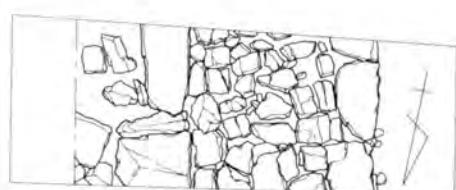
第49図 T-7 断面図 ($S=1/60$)

てきた推定下底幅8~9mの土壘が、斜面中央部で約13×4mの張り出し部を付設したのち、内折して下底幅約7mの土壘がT11を経て西門方向へ続く区間である。

石垣は、地山面を削平し平坦に整えたのち、掘り方内へやや大型で上面の平坦な50~150cm



アミ点は灰白色砂質層



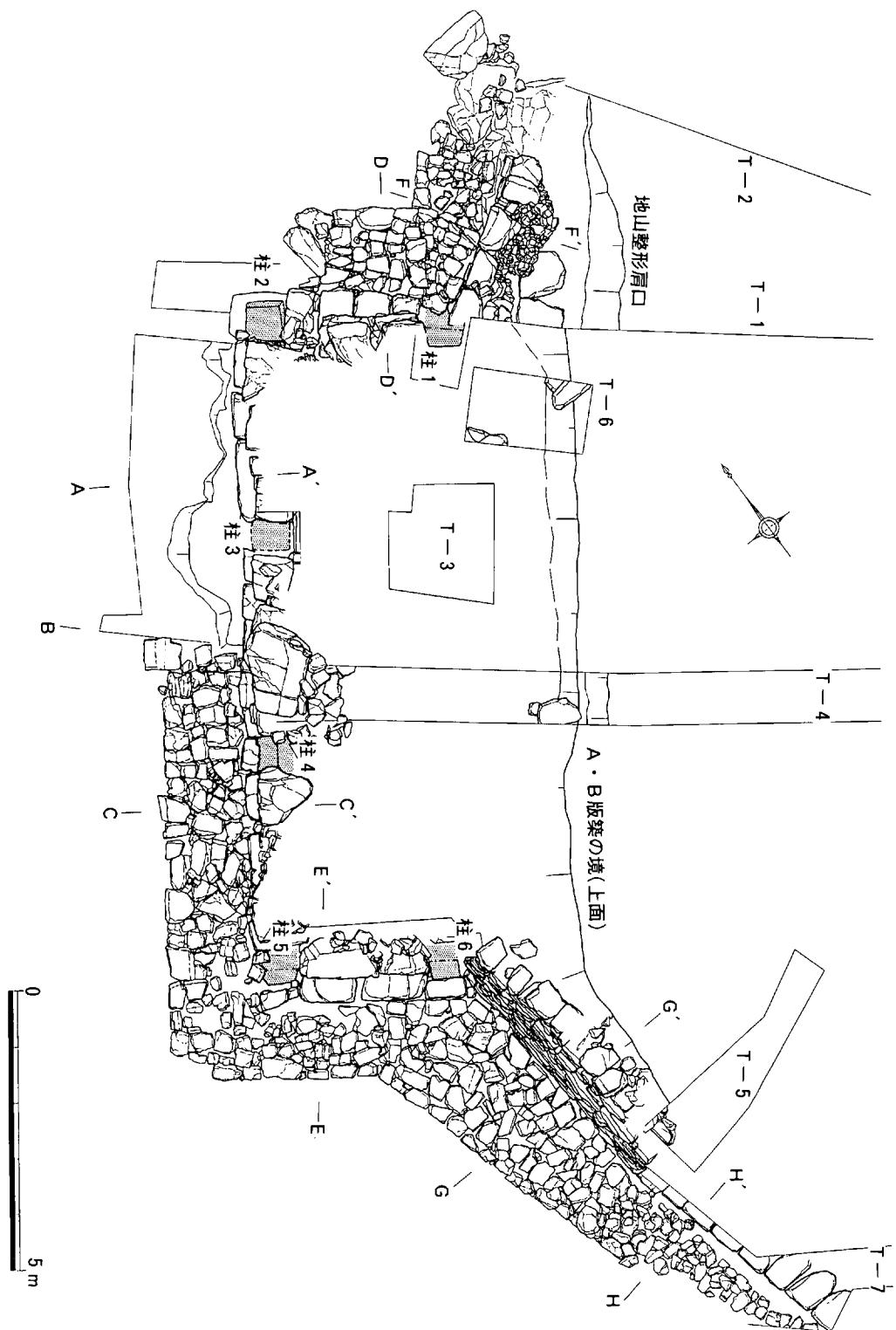
第50図 T-11平・断面図 (S=1/60)



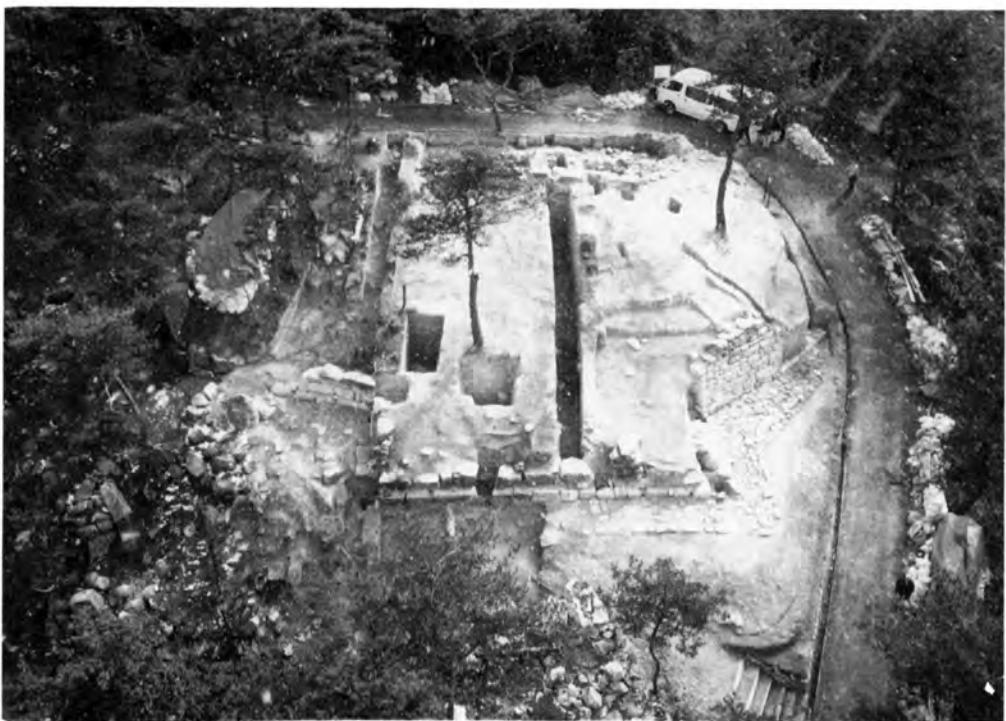
第21図版 T-11

大の石を基底石として据え、間口13m、奥行4mの基底部を造成している。基底石は、正面側及び右側は上面ほぼ水平であるが、左側は城外側へやや下降している。石材は、すべて硬質の花崗岩である。石積みは、この基底石から20~50cmほど控えて積んでいるが、控え代は奥行側がやや大きく、正面側は小さい。現状では基底石上に1段のみ残るところが大部分だが、柱4の両脇には3段積みとして残っている。残存最高部で敷石上面から1.9mをはかる。原高がどれほどあったかは不明だが、角楼右側の石垣現高が2.7mであり、しかも角樓部石垣使用材と思われる転石もあるから、原高は少なくとも5段積み前後で、推定高3m前後ではなかったかと思われる。石材はアプライト（半花崗岩）で、亀裂が多く欠失していたりして、不安定な印象を受ける。調査中、柱4左側の2、3段目が転落した。裏込めの石材は、30cm大のものを詰め込んでおり、埋土はB版築層である。このB版築層には、先述したように灰白色砂質層は含まれていない。この角楼石垣の基底石とその上段の石積み石材質のかなり厳密な選別は何を意味しているのであろうか。

石垣 角楼の左右にも石垣が接続している。柱1側の石垣（表記上左石垣と仮称）は長さ3.1m、高さ1.3mが残っている。4段積みで、基底部の右から3石までは据え置いたものであるが、その左は露岩である。角楼からは160度ほど城内側へ入る。裏込めは小石材を中心に充填しており、壁面は城内側へ15度ほど内傾している。2段目の石積みは、基底石より僅かに控



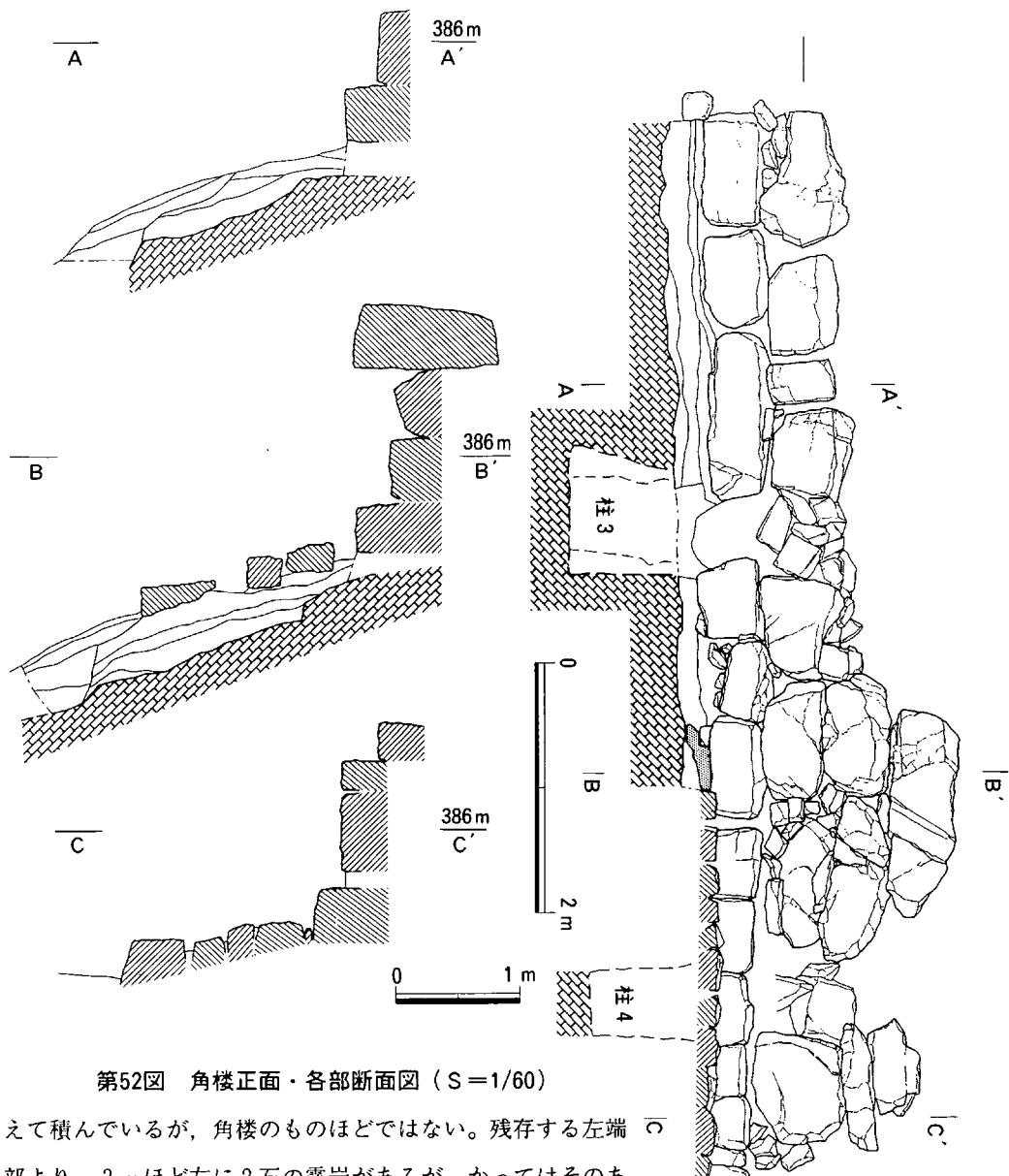
第51図 角楼平面図 (S=1/120)



第22図版 角楼（西から）

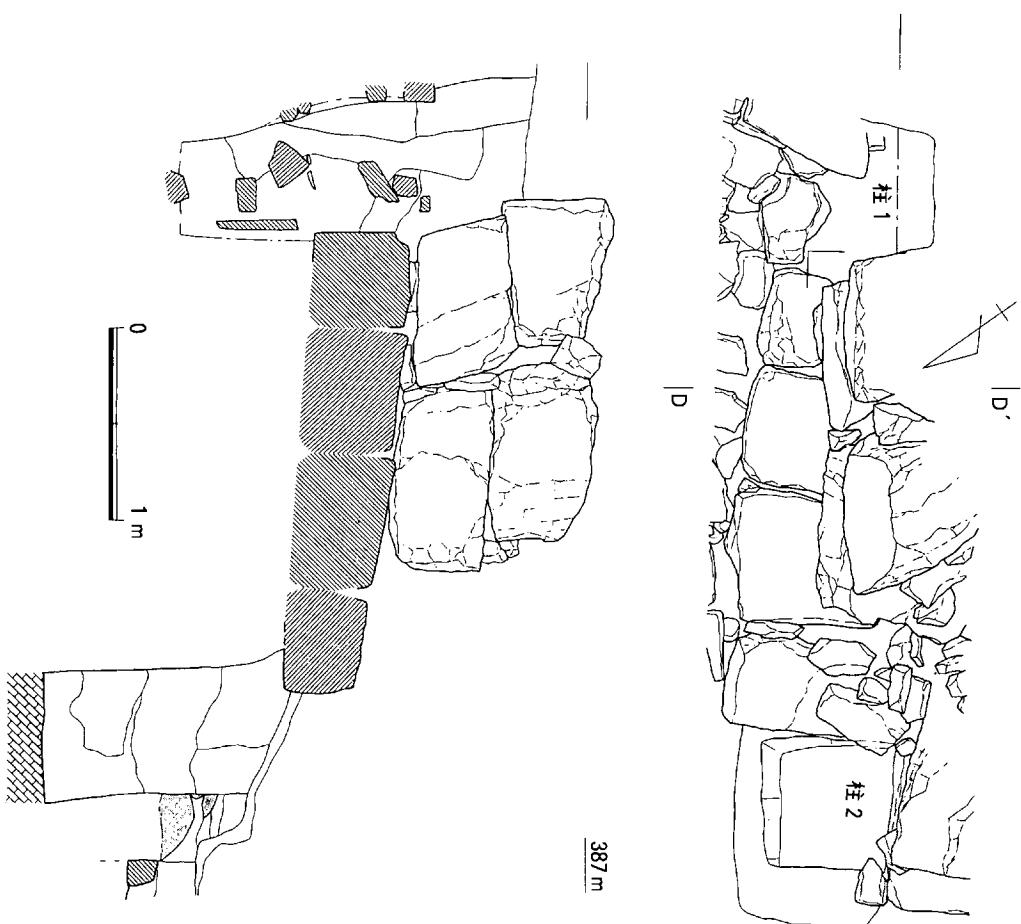


第23図版 角楼（北から）



第52図 角楼正面・各部断面図 ($S = 1/60$)

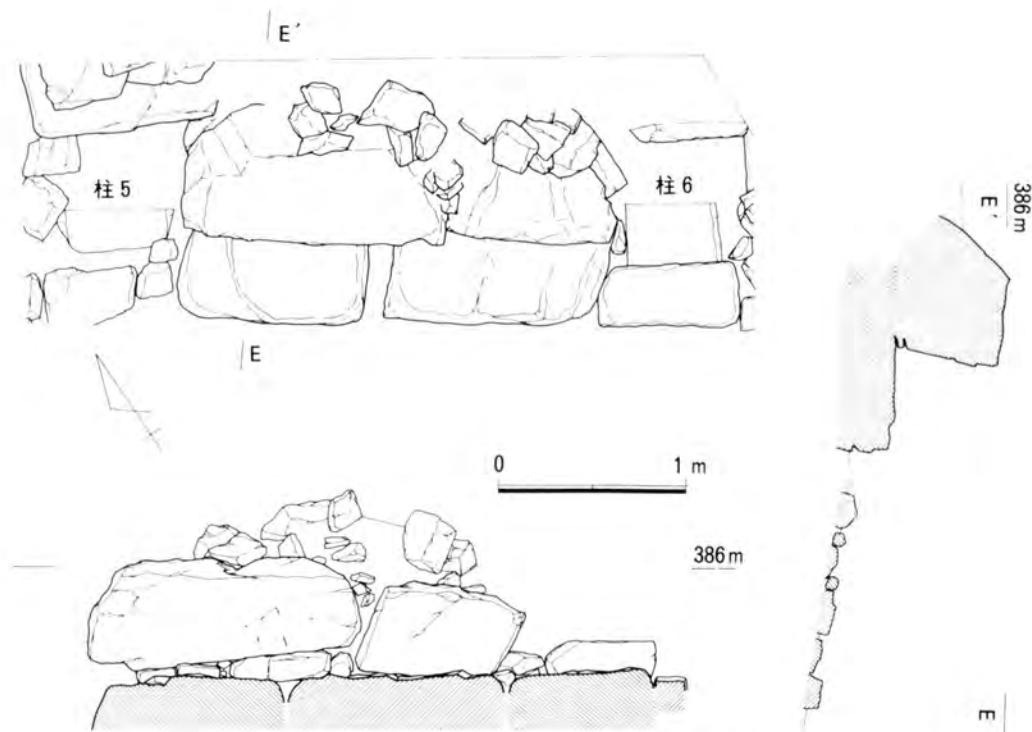
えて積んでいるが、角楼のものほどではない。残存する左端部より、3mほど左に2石の露岩があるが、かつてはそのあたりまでは石垣であったものと思われる。右の石垣よりは、絶対高で30~40cm低く、もう1段くらいは積まれていたのであろうか。柱6側の石垣（右石垣と仮称）は、残存長4.9m、高さ2.7mを測る。大半の石材は横長材で、横目地がきれいに通っている。基本的には現状では10段積みで、城内側へ10度内傾している。この石垣は調査前、上段の2~3段が露出しており、石材も小さいことから近代の砂防段と思っていた



第53図 角樓左右垣 平・立・断面図 ($S=1/40$)

ほどである。前面は全体的に流土に覆われ、多くの石材が混入していたが、その大きさ、数からみても原高が現高よりも数mも高かったとは考え難い石積み状況である。この石垣の右端下方に、どのような意図があってのことか判らないが、板石が3石立てて用いられている。また左側最下石は立てて用いられているが、これは柱6の添え石上に立てられたものである。左右端ともすっきりとした端面を形成しており、右側では土壘に接続する。

柱 角樓部の石垣の間に、6本の角柱穴があったことはすでに述べた。柱2は、2方向の添え石もすでに欠失していたため全掘したが、他は後日のことを考え半裁とした。柱2は、添え

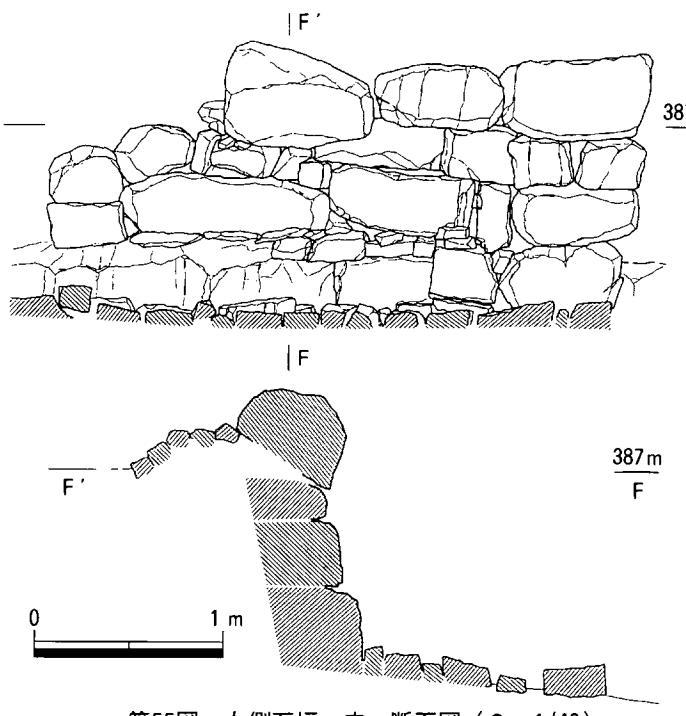


第54図 角楼右石垣 平・立・断面図 ($S=1/40$)

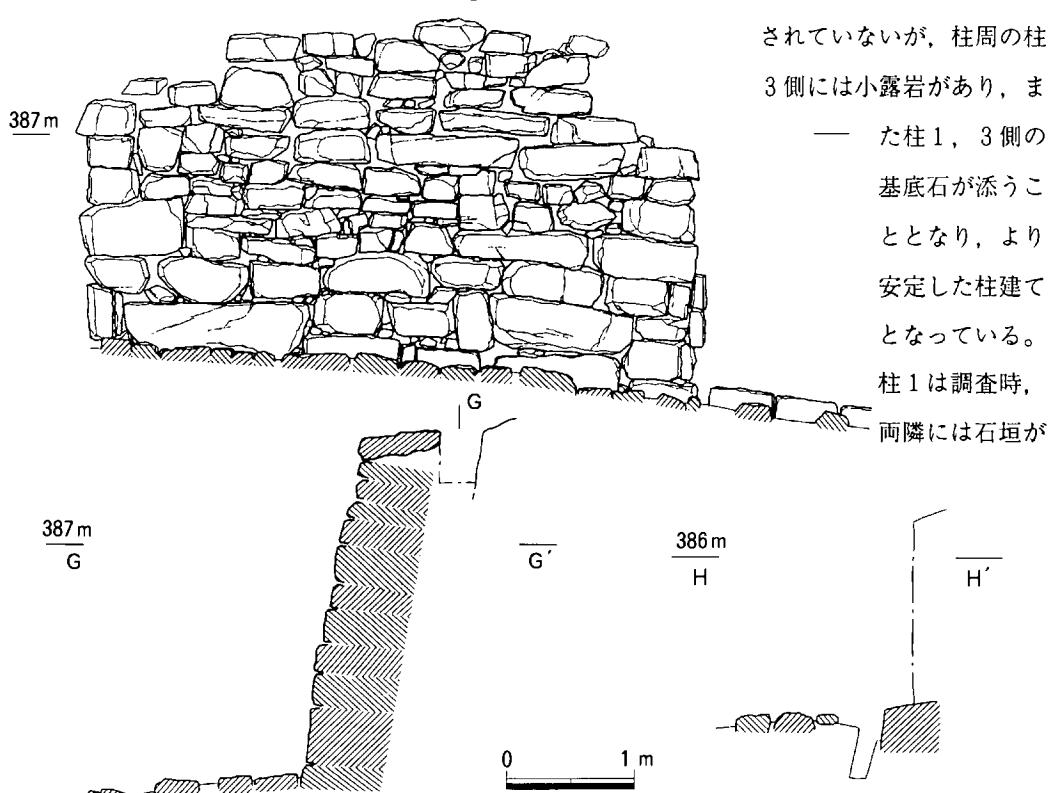


第24図版 角楼と敷石

石も敷石も欠失しており、また傾斜が下降していることもあって掘り易く、半裁ののち全掘した。当初、柱穴の存在は予測できず、基底石が転落、消失しているとばかり判断していた。しかし、T 1 の掘削の際、柱を巻いた灰白色粘質土が検出され、その形状から角柱がここに存在



第55図 左側石垣 立・断面図 ($S=1/40$)



第56図 右側石垣 立・断面図 ($S=1/60$)

第57図 土壘前面の小柱穴断面図 ($S=1/60$)

したと判断した。掘り方は、
1mほどの方形である。底
面は地山面である。底面径
は柱周の版築からみて、約
70cmを測る。しかし、基底
石との関係を考えれば、柱
は一辺50~55cmくらいと推
定される。また柱2の断面
図の右下が少し抉れたよう
な形状をしめしているのは、
柱が内傾する傾向を示して
いるとも理解できる。この
場合、一辺は50cmとなる。
深さは基底石上面から1.6
mである。断面図には表記
されていないが、柱周の柱
3側には小露岩があり、ま
た柱1、3側の
基底石が添うこととなり、より
安定した柱建て
となっている。

柱1は調査時、
両隣には石垣が

残り、しかも流土も厚く石垣を覆い隠していたため、なぜ欠石しているのか不思議に思っていた。柱1は、奥行側と平行に半裁したもので、基底石から1.3mほど掘下げたが、半裁のため掘る範囲が狭く、また深いため底面には達していない。断面図左上には版築層が確認され、その下の石材はやや小さいが添え石的な機能をもつものと思われる。この柱1で奇異に感じられるのは、柱右側の基底石上の石材の据え方である。直立柱でも一辺50cmの柱が建たないことはないが、左側の柱痕跡の傾き、右の石垣の石材の傾きは、柱の内傾状



第25図版 左側石垣



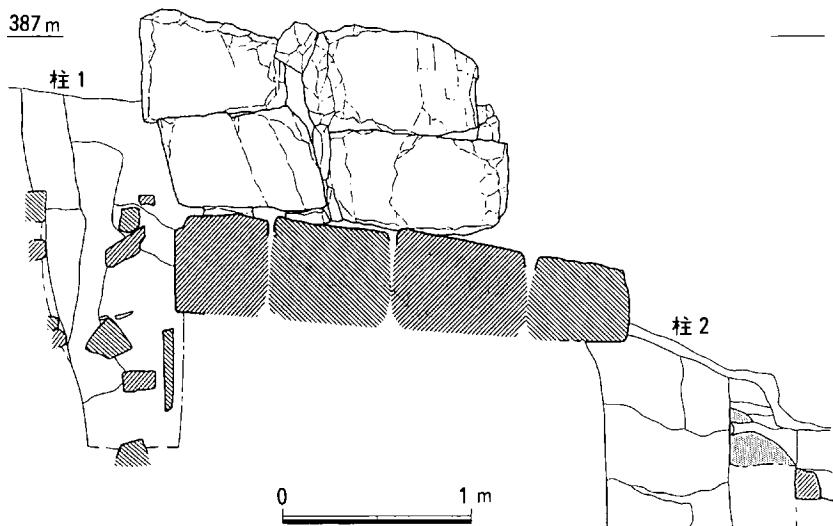
第26図版 右側石垣



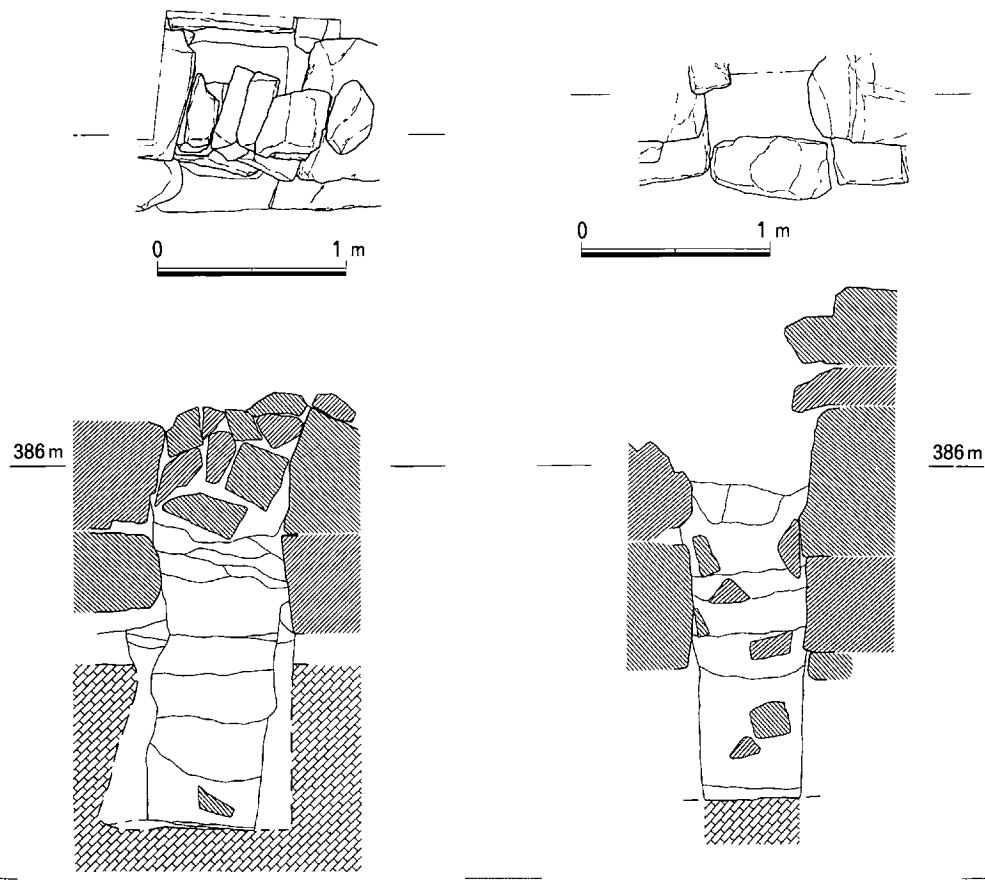
第27図版 柱2



第28図版 柱3



第58図 柱1・2断面図 ($S=1/40$)



第59図 柱3 平・断面図 ($S=1/40$)

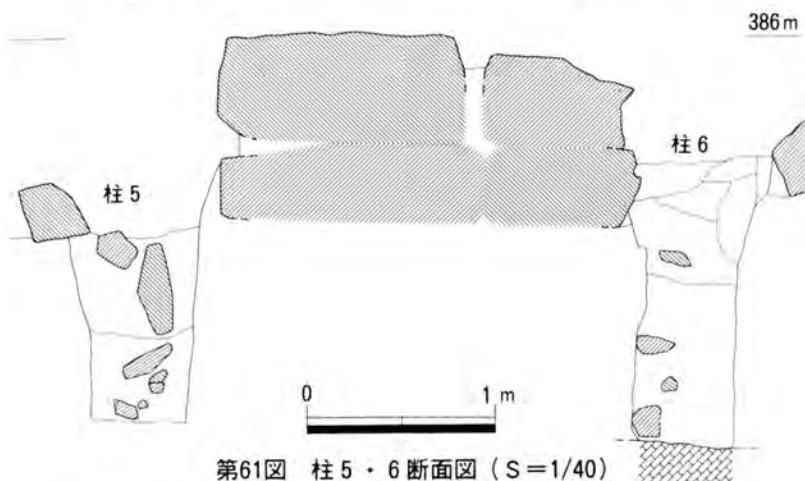
第60図 柱4 平・断面図 ($S=1/40$)



第29図版 柱 5



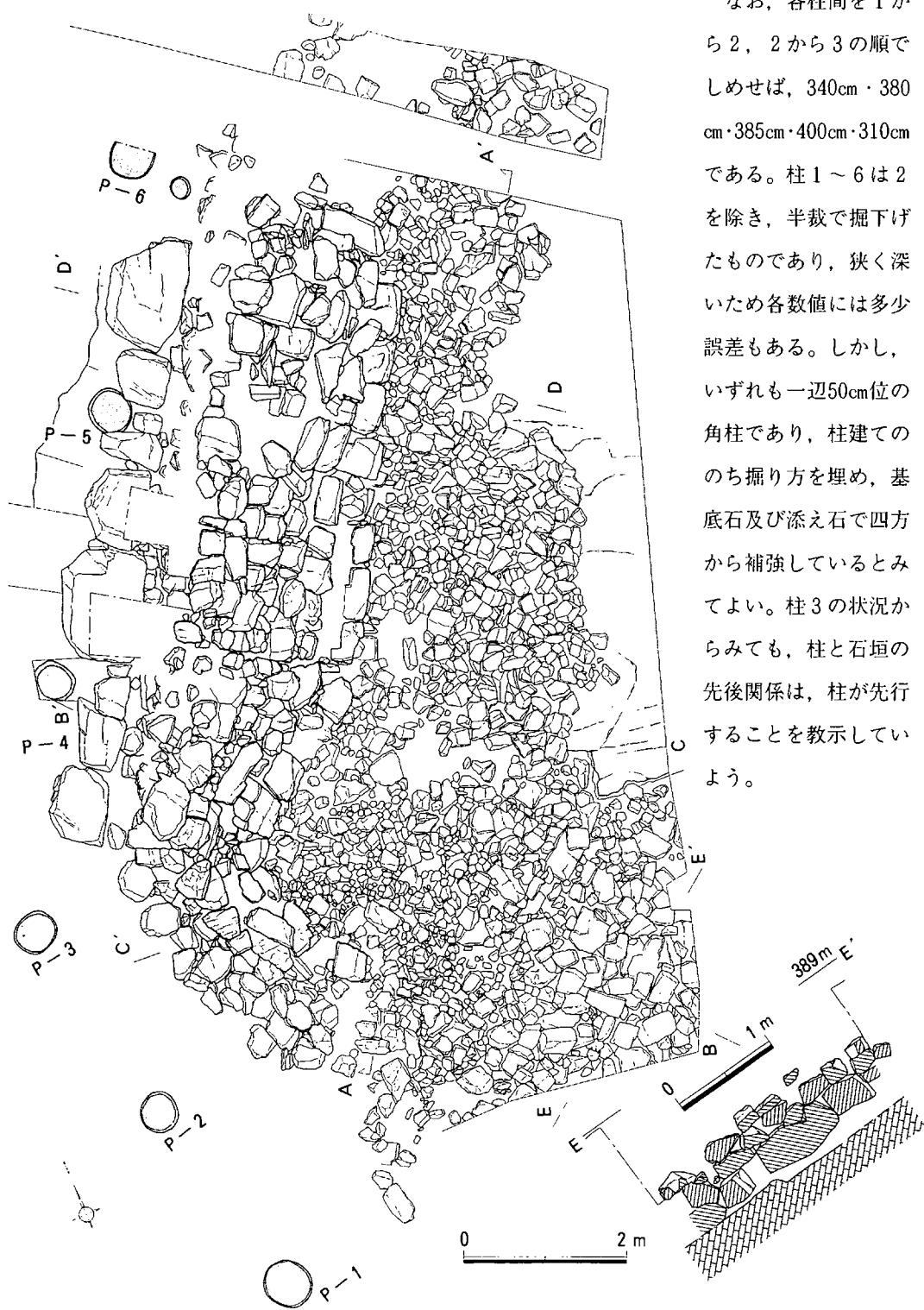
第30図版 柱 6



第61図 柱 5・6 断面図 ($S = 1/40$)

態を示唆しているのではあるまいか。柱3は、柱2、4方向に平行して半裁した。ここあたりは小さな張りだし地形の中央部になり、地山も高い。ここでは敷石も欠失していたので、柱の掘り方も検出できた。掘り方は地山上に整地した面から掘り込んでおり、1m近い方形である。柱痕跡は底部、上部とも60cmほどで、深さは基底石上面から146cmあるが、右へ少し傾いている。基底石下面で柱を粘質土で巻いており、その上面では両側を基底石で、奥側にも基底石と同高を保つ添え石がある。前面の添え石は欠失している。柱4は左右に石垣が残り、敷石も残存しているので掘り方は不明である。柱痕跡は底部、上部とも50cmは可能で、深さは130cmは可能であり、わずかに左傾気味である。柱5、6とも奥行側平行で半裁した。柱5の前面側2面とも、添え石は他にくらべやや小型である。添え石が不安定であるため、基底石上面から140cmほど掘下げているが、底面までは達していない。現底径50cmでやや柱6側へ傾き気味である。柱6は基底石上面から154cmで柱穴底部であり、底径50cmを測る。前面の添え石から65cmほど奥にも添え石があり、また石垣下となる右側にも同様の石材がある。これらの石で囲まれる範囲は60×70cmとなり、掘り方もそれに近いものと思われる。右側の石垣は、添え石上から積上げられている。

なお、各柱間を1から2、2から3の順でしめせば、340cm・380cm・385cm・400cm・310cmである。柱1～6は2を除き、半裁で掘下げたものであり、狭く深いため各数値には多少誤差もある。しかし、いずれも一辺50cm位の角柱であり、柱建てののち掘り方を埋め、基底石及び添え石で四方から補強しているとみてよい。柱3の状況からみても、柱と石垣の先後関係は、柱が先行することを教示している。



第62図 内側列石、石段、敷石平・断面図 ($S=1/80, 1/60$)

敷石（城外側） 角楼を中心に城外側で検出された。石材はアプライトで、大は 100×50 cmのものから、小は20~30cmの石材で、上面の平らなものを用いている。柱2周辺と柱3、4の中



第63図 石段立・断面図 ($S=1/60$)



第31図版
石段正面



第32図版
石段側面

間までは欠失しているが、前端線をきれいに揃え比較的良好く残っている。柱1から2方向、正面側の基底石から前端にかけては僅かに下降し、柱5から6を経て右石垣、土壘方向へかけては地形の傾斜もあり、かなり下降している。角楼部ではその形状に合致し、幅1.5mであるが、左石垣部では敷石は現状でみると直角に屈折し、左石垣の形状とは一致せず、むしろT1の2石の列石に対応するかのような角度である。また柱6から石垣左側部では最も広くて2.2～1.5mもあり、土壘前面では次第に狭くなつて幅1.2mとなり、T11へ接続するものと考えら

れる。土壘部前面では、外側列石との間に10~20cmほどの敷石空隙部があり、径18cm、深さ40cmの小柱穴が検出された。この部分の敷石は、使用材がやや小さい傾向がある。柱3~4間の土層断面をみると、地山が傾斜しているため盛土、整地したのち敷設したものである。敷石の状況から、いくつかの作業単位らしい形跡が数ヶ所でうかがえる。

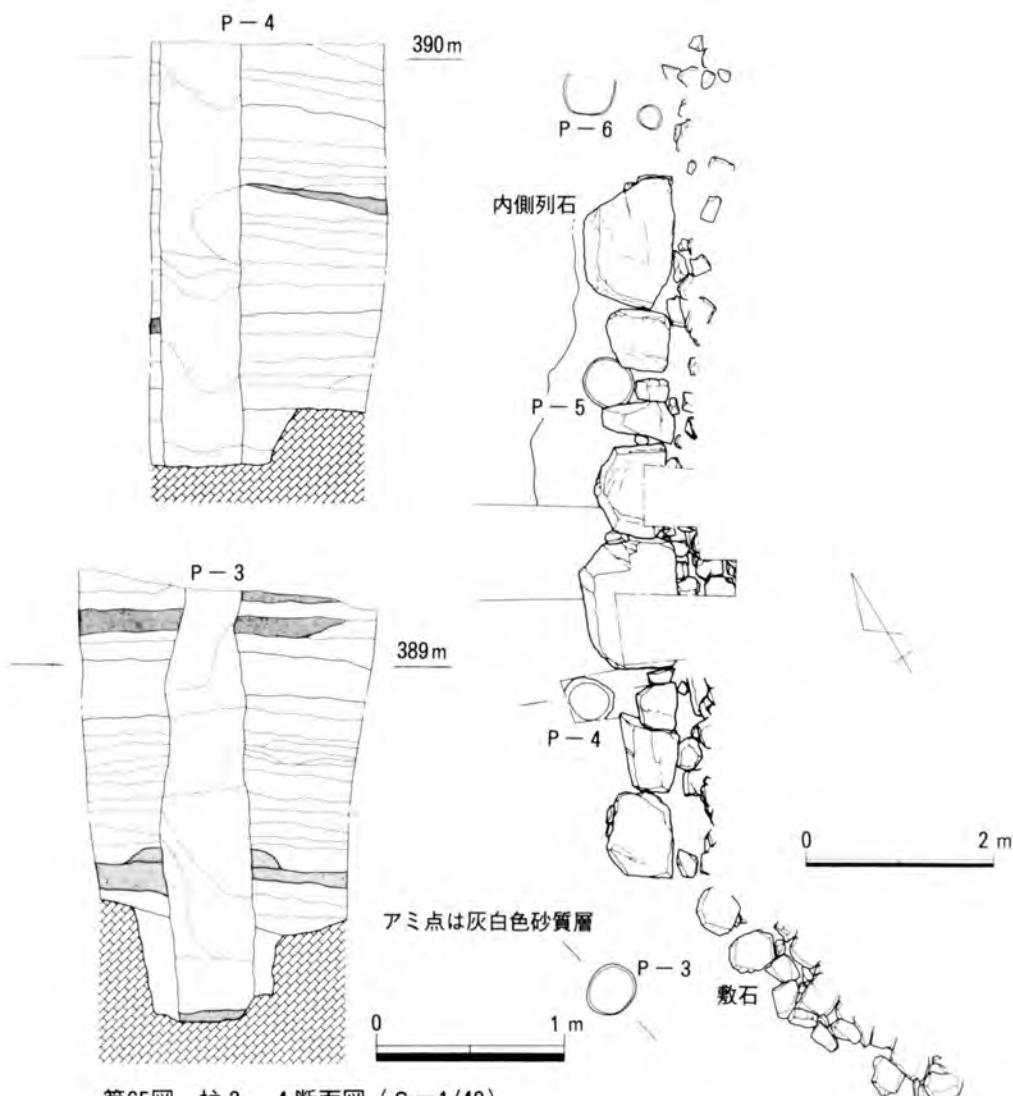
先後関係のある版築層（A、B）の境界 T 1、4~6で検出されたA、B両版築層は、表土層除去ののち全面にわたって精査し、その境を確認した。その形状は、左右石垣背後の掘り方は狭く、角楼正面側背後は平行になり、左右石垣、角楼の形状に一致するような状況である。

内側列石 両端の2石をはじめ、4石は調査前から露出していた。調査の結果、面を城内側に揃えて長さ7.5mが残存していた。列石はT 4断面図にみるとごとく、A版築層上層を掘り込んで据えたものであり、現存する内側列石の両端のあたりは流土が著しく、掘り方さえ検出できない。このため内側列石の欠失部がどのような接続をしていたのかは不明だが、P 1~6の6本の柱穴が、機能不明ながら内側列石との関係を暗示しているような配列をみせている。とすれば、P 3あたりまで直線的にのび、その後P 1の方向へ屈折するものとおもわれる。その場合、土壘の下底幅は7~7.5mくらいとなろう。一方、P 6側は現状では不明とするほかない。この内側列石と角楼前面の基底石前面との間はほぼ13mとなる。角楼正面側は13mであり、したがって13×13mの場に屈折して壘状区間が接続している形状となる。

敷石（城内側） 内側列石と石段との間に20~50cmほど下に、上面平らな石材を用いた敷石と推定されるものがある。残存する内側列石と石段の間は狭く、保存上の問題もあって充分に掘だせていないが、P 2~3間には敷石らしい石が数石あるが、流失、転落していると思われるものも多い。一部はその上に石段が築成されているから、両者には先後関係があるものと考えられる。

石段 内側列石の城内側前面には、粗雑な積み方で崩れもありみられるが、石段がつくられている。P 6~4間は直線的に6mほどのび、そこから城外側へ2.5m入り、さらに城内側へ屈折して3mほどを確認できる。傾斜はP 6側が高く、P 4から1にかけて下降している。このためP 5~4間では7段を数えるが、途中合段してP 6側では6段となる。初段と上段との比高差は1.4mであり、勾配は30度である。またP 4より下方も同巧である。段幅は20~50cmとばらついており、より粗雑な印象を受けるが、城内側から角楼部に向けた昇降施設であることは間違いない、「雁木」を想起させる。石材はアプライトである。

石段前面の敷石 石段の前面には、多数の凹凸のあるアプライトが敷かれている。P 6側はやや少なめだが、P 3前面はやや大きい石材を混入しながら、びっしりと敷き詰められた感じである。同名称をもちいているが、城外側敷石が上面平らな石材を用い、通路と考えられるのに対し、この部分の敷石は同機能とするには疑問である。というのは、敷石直下は地山であり、



第65図 柱3・4断面図 ($S=1/40$)



第33図版 柱3

第34図版 柱4

第64図 柱穴列 平面図
($S=1/80$)

石の凹凸を考えれば、このままの状態では歩行等活動しにくいものとおもわれ、埋殺されて石段前面の広場のための骨材的な用いられ方をしたのではないかと考えられる。直下が地山であることを考えれば、前面が軟弱な土質のためとはいえず、むしろ石段の崩落防止の一手法だったのではあるまいか。なお、敷石空白部南端からは地山を1m前後掘下げ、底部に大きい石材をはじめ雑然と混入した状態である。おそらく暗渠的機能を考慮していたためと推定される。

柱穴列 P 1 ~ 6 の 6 本の柱穴列が検出され、このうち P 3, 4 の 2 穴を調査した。形状的には内側列石に沿うような状況である。P 3 は地山面上の整地層から 80cm 前後の掘り方を穿ち柱を建て空隙部を埋めたのち版築で積上げている。柱穴底径は 40cm ほどで、底面から 80cm ほどの段階で灰白色粘質土で根がためをしている。調査時で 2.3m ほどが版築層下にある。P 4 も同巧である。柱は地山上に建ち、のち版築の積上げにより埋められているから、各柱は早い段階から存在したことになる。なお、各柱間は P 1 から 2, 2 から 3 の順序で記せば 270cm, 270cm, 300cm, 340cm, 320cm である。この柱穴は土壘中の柵列とするには、位置からみても不自然であり、何の目的で、どのように使われたのか理解できない。

以上、この遺構についてその概要をみてきた。その結果、二つの箇所に先後関係があることがあきらかになった。即ち

(1) A 版築層と B 版築層

(2) 内側列石と石段の間にある敷石と石段の関係

このうち (2) については、T 4 と 8 で敷石の一部を検出したのみで、石段下層等については掘下げを行っていないため、(1) ほど明確ではないが、ほぼ間違いないものと思われる。

さて、問題は (1) である。先述したように、A 版築層をどこまでと捉えるかによって評価はおおいに異なったものになる。一つは列石前面までと捉えるものであり、この場合当初は墨状区間であったと理解し、のちに角楼が付設されたとするものである。種々の状況を考慮すれば、合理的な解釈かと考えられる。しかし、そうした場合、T 4, 6 に列石が存在しないのは何故か。列石を抜き取り、角楼付設時に基底石に用いた、ということも考えられなくはない。しかし、抜き取り痕跡は確認できない。また地山を削り、列石据付位置の背後では地山を垂直状に削り落とし、その前面に平坦部をつくって列石を据え置いているが、ではその前面の地山の処理はどのようにしたのか、また敷石は存在したのか、という疑問が残る。また、この地は背面側の重要な地である。のちになって角楼を付設したとすれば、築城にあたってどのような設計意図をもっていたのか、この点も疑義をいだかざるをえない。

もう一つは、A 版築層の一部が角楼基底石までのびていたという見方である。この場合角楼またはその基部は当初から存在したことになる。基底石で画された面が一時的に存在したのか、

あるいは比較的早い段階でその上部が構築されたのか。この考え方にも当然疑問点がいくつかある。基底石で画された面が存在したとしても、その時左右の石垣は存在したのか、なぜ角楼を一気呵成に構築しないのか、そうした方が石垣背面の版築も築成しやすいのではないか、ということも疑問に感じられる。A版築層が築成時、前面がどこまで形成されていたのかは判らないが、それを削り込み石垣をきづいたのは何故か、理解しがたい。

(1)、(2)の先後関係が対応するものとすれば、その両者を結び付ける直接的な資料を得てないが、当初壘状区間として築成され、その角楼が付設されたと考えるほうが合理的かもしれない。しかし、充分な証明ができないものの、角楼の基部は当初から存在し、のち完成された、しかもその時間的経過は時期差とするほどのものではなく、作業上の先後とする考え方もすてきれない。

諸賢の御叱正を請う次第である。



第35図版 埋め戻し後の角楼

西門跡

1. 調査の経緯

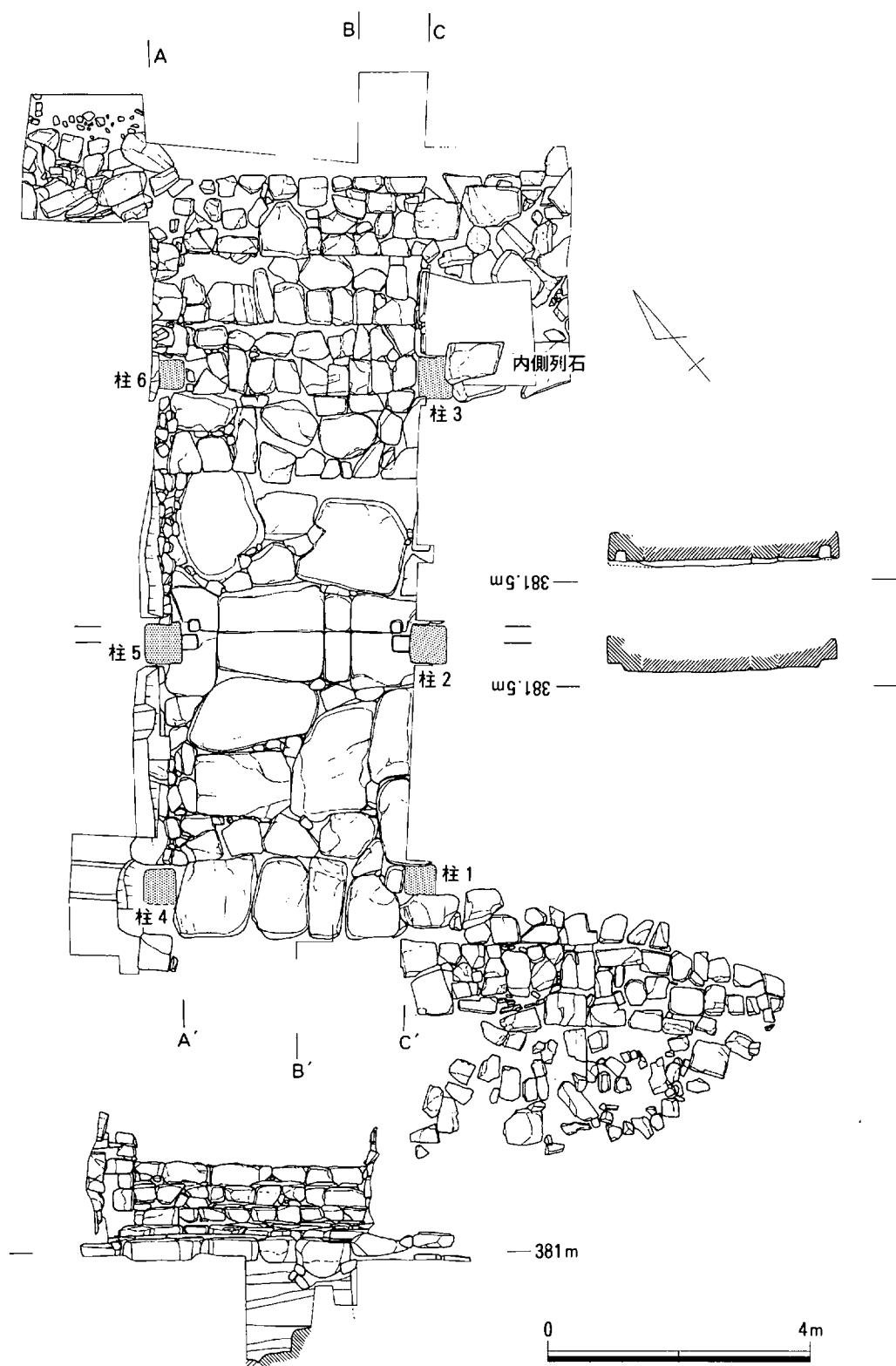
当初、旧称第3城門跡を搦手門的な門跡と想定し調査をすすめたが、ここでは門跡とする確証は得られず、焦燥の日々を送るのみであった。しかし、この地は立地からみて、背面側の枢要な地であることは間違いない、いろいろ試行錯誤の挙句、幸運にも角楼から東南60mの第2壘状区間にいて門跡に辿り着くことができた。

さて、ここ第2壘状区間に門跡があるのではないかと考えた理由は、角楼から近距離にあり、鬼ノ城の最高所である鬼城山から南へ緩く下ったところで、小さく張りだした地形であること、外側列石とみられる4個の列石（のち門跡床面の石敷前端であった）があり、対応する壘状区間の内側列石を含む土壘が、この部分のみ跡切れていた、ことなどである。最初は周辺に砂防工事による砂防段が何段もあり、その折りに切削されたのではないかと考えていたが、周辺に残る土壘の内側列石をよく観察してみると、通常は石材面の広口面を立てて用いるか、寝かせて用いるかのいずれかにしろ、1石で内側列石を構成しているのであるが、城内側からみて左側の内側列石の露出部が、粗雑な積みであるが何段かに積まれていることに疑問をいだいた。そこで露出部の一部を掘下げたり、細いトレンチで掘下げたが、設定幅が狭かったため深く掘ることができず、門跡とする確証を掴むことはできなかった。そこで、これが最後との想いで、露出していた左側の内側列石と外側列石の左端を結んで幅1mのトレンチを設定し掘下げたところ、僕倅にして門礎に遭遇した。しかし今にして想えば、トレンチの左端がもう少し左側にずれていたら、西門左壁面を掘り抜いていたかと思うと冷汗ものである。

2. 遺構の概要

西門は、第2壘状区間の中央部あたりを、土壘の走行に直交して開口し、構築されている。今回の調査では、門礎を確認したのが1月末ごろであり、年度内作業としては予算の関係もあって門内のみの調査にとどめ、城内や土壘との関係、土壘の構造などについては、次回以降の課題とせざるをえなかった。

城門構築部分は、調査時には門礎を検出できる最低限度の幅4m強を掘下げ、城内部も確認トレンチで最奥の石段が検出されていたのであまり広げず、のちに城内側へ1.5mほど拡張したのと、城内壁面を形成している部分を土壘走行に平行して2~2.5mほど拡張するにとどめた。しかし、構築時には門礎の位置などを考えれば、土壘と城門構築の作業順序の先後関係があるものの、少くとも7~8m以上は開口部をつくっていたものと推定される。城内側についても、最奥の石段レベルで城内に入り、いま遊歩道となっているあたりが傾斜変換点ではないかと考えられるから、相当広い空間が確保されていたとみてよからう。いずれにしても城内



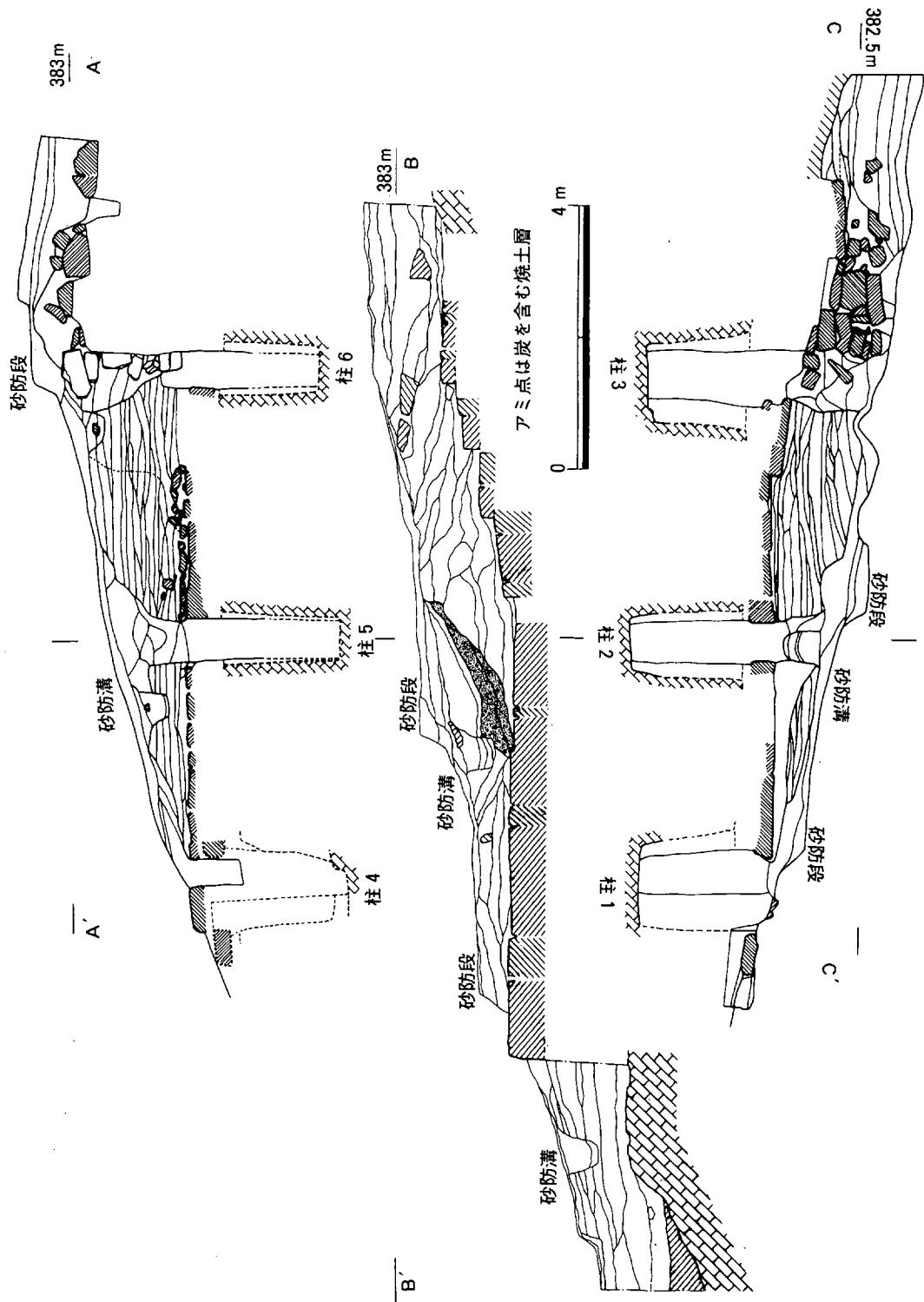
第66図 西門 平・立・断面図 ($S=1/100$)



第36図版 西門跡全景

床面は、前端から7mを大きな石材で石敷とし、その奥4.5mほどは4段からなる石段をつくり、城内へいたる構造である。柱は3対6本からなる門礎を添わせた掘立柱である。城門の両壁はのちにのべるが、現状では基本的には後柱までは版築土墨が観察され、それより奥は石積み壁である。城外は、正面前面には敷石を欠くが、城内からみて左側の外側列石に接して敷石があり、対する右側は未調査であるが1石が認められるだけである。以下、各部についてやや詳しく述べることとする。

床面 城門構築と土墨構築の先後関係については、調査では必要最小限範囲の掘下げにとどめたため、壁面への充分な長さのトレンチは設定しておらず、また遺構保護のため床下面へは掘下げていないので、部分的な土層観察トレンチと柱穴掘り方等から判断するほかない。それによると、城門構築時に土墨が城門のどのあたりまで築成されていたかは不明だが、仮に土墨の築成が先行していたとしても、石敷の範囲、柱の位置、石敷敷設作業等に必要な空間などを考慮すると、最低でも幅7～8mの空間は必要であろうと考えられる。緩斜面のうち、柱が建つ範囲を中心に地山の岩盤風化層を削って平坦状にし、石敷前端前面あたりから版築で積上げて、城門部の基礎となる地業を行っている。柱位置を定め、掘り方を穿ち柱を建て、掘り方内の空隙を埋めたのち、床面基礎部を整え、石敷作業に移る。石を敷き据える順序は詳らかにしえないが、まず門礎を据え置いたものと考えられる。柱2に添わせた門礎は140×110cm大の台形状で、厚さ40cm前後。柱5に添わせた門礎は160×80cm大の長方形で、厚さ30cm強。この両門礎間を160×120～150cm大と130×40cm大の二つの石材を並べて扉部分の石敷を構成しているが、わずかに柱2側へ傾斜している。これにつぐ作業順序はわからないが、柱1、4間の石敷前端となる部分は、4石の小口面を前端線となるように合わせて柱間に並び据える。前端線と門礎間には、最小でも130×80cm、最大は210×100cmの5石を据え、空隙に中小石材を充填しているが、柱4～5間の空隙充填材は小材が多い。ここでも柱1～2側がわずかだが低くなっている。門礎から奥は160×130～140cm大の2石を左右に配し、中間部はかなり丁寧に充填している。ただ柱2側の初段の石段との間には、幅20～40cmの空隙をそのままにしている。こうして形成された石敷は前端線から7.0mとなり、幅は版築で隠蔽された部分を含め5m弱と推定される。使用石材は主要部分は花崗岩を用い、補助材や隙間充填材はアプライトである。石敷より奥は4段の石段である。石段全体としては、長さ4.4～4.5mで、幅は各段により多少異なる。各段とも前端をきれいに整えている。1段目は幅120～124cm、1石がずれているが空隙部も殆どない。高さは20cmである。2段目は幅106cmで高さ17cm、3段目は106～102cmで高さ23.5cmだが、片側に少し空隙部がある。この3段目の柱3側前端線石の上に、壁面の石積み石材が積まれている。4段目は112～118cm、高さ20cmで柱6側が、前端のはかやや粗雑な石材配置である。石材は2石が花崗岩で、他はアプライトである。4段目より奥は城内となるが、



第67図 西門断面図 ($S = 1/100$)

わずかばかり掘っている調査区でみると、石段に接続する部分と左側（柱1～3側）には、いわゆる城内側敷石は認められない。ただ、左右側とも数石は敷石の可能性もあり、また壁面の石積み崩落石を除去していないが、その下に敷石がある可能性も考えておかねばならない。

以上のことから、城内床面は露出する部分は4m弱、長さ11.4～11.5mにわたり、石敷と4段の石段で構成されていることになる。

門柱 3対6本の柱からなる1×2間の掘立柱城門である。正面410cm、奥行770cmを測る。本柱となる柱2は140×110cmの台形状の石材の一端に、一辺60cmを測る凹字状の削り込み加工が施されているから角柱であったことが判る。削り込みの中央部には26×24cm、深さ11cmの方立が刻まれており、それより奥側は8cmほど低く削り整えてある。方立に接して一辺18cmの隅丸方形で、深さ16cmの軸摺穴が穿たれている。穴中には鉄錆や木質の付着は認められない。軸摺穴の脇には高さ3.7cmほどの、弧状となる造りだしの一部が認められる。いずれの加工部とも精緻な仕上がりである。一方、対応する柱5側は、200～140×80cmの長方形状石材に、一辺60cmの凹字状の削り込み加工を施している。他の加工部も技巧的には同じで、方立は26×22cm、深さ10cm。軸摺穴は一辺18cmの隅丸方形で、深さ15cmである。柱2と異なるのは造りだしの形状で、高さ5.0cmで52cmほどが直線状に刻されていることである。この二つの加工された石材は、柱に添わせた門礎であり、この両門礎間に大小2個の石材があり、それにも5～8cmほ



第37図版 西門（城内側から）



第38図版 柱2門礎

どの段差を刻んで蹴放しとしており、両扉が合する中央部は9cmの差としている。この門扉の開口部は両方立間が300cmとなり、内開きとなる。また柱2の深さ、つまり地中に埋まっている部分は石敷き面からみて222cmである。柱掘り方は、遺構保存のため敷石を剥さず、また壁面も残したので、柱1～3を柱部分のみ掘下げ、ピンポールの感触のみで得た数値であるが、柱2底部でおよそ80cm前後、上部で1m位である。なお底面は地山の風化岩である。控柱となる前後4本の柱についても、本柱同様柱主体部分のみ掘下げたので、数値的には若干の誤差があると想われる。前柱の柱1は44～50cmの角柱である。柱に接して横長に1石があり、当初より露出していたため、これも石敷前端の4石と同様、外側列石と考えていた。しかし調査の結果、この石は外側列石ではなく、柱に添わせた石材であることが判明した。また、その反対側には石敷の1石が添っていた。柱の掘り方はやや広く底部120cm、上部150cm位になる。深さは210cmである。本柱からは354cm。対応する柱4は一辺48～50cmの角柱である。一端は石敷の1石で添えられているが、他端はない。掘り方は84～130cm位で、深さは240cmを測る。柱1、4とも風化岩の地山上に建つ。本柱からは364cmを測る。奥柱の柱3、6は、どちらも2段目の石段の前端にはほぼ近い位置にある。柱3は一辺55cmの角柱で、掘り方は120～150cm深さは石段から220cm埋められている。この柱は、この部分の壁面が石積みになっており、二方が石積みに接したようになる。このことは柱6も同様である。本柱2とは412cmの間隔である。柱6は本柱とは406cmの距離をおき、一辺44cmの角柱である。掘り方は70～80cmとやや小さく、深さは222cmである。

敷石と内外の列石 城外側敷石は、柱1～3側で検出された。柱1前面の2石を一端とし、幅1.2m、長さ6mほどにわたって残存している。幅1.2mという数値は、他区間の城外側敷石が規則的に幅1.5mであるのに対しやや狭く、長さ3mあたりでわずかに城外へ屈折する。地形からみると、残存端から2～2.5mほど存在したようであるが、そのあたりから屈折して城内側へ入るようである。全体として南側へ下降している。敷石の前面には、敷石と同じくらいの石があり、第3、第8墨状区間城内側敷石とそれより1段下がったものと同一のものと思われる。反対側の柱4～6側は1石残るのみで未調査であるが、ピンポールで探ってあまり敷石のあるような感触がない。問題は城内床面の前面である。そこで前面中央にトレンチを設け、土層観察をおこなったが、敷石の存否についての判断は難しい。残存する敷石上面と、石敷床面の差は20cmほどであり、もし他の敷石と同じ高さでかって存在していたとしても、このトレンチの土層では最上層にあたるため、安易に判断できない。また欠失したとすれば、その最大の因は砂防工事と思われる。しかし、一方に敷石があり、他方にも1石だが残っていて、それらが大きくて指標石的なものと考えられるから、あるいはこの前面には当初から敷石がなかったのかもしれない。そうした場合、指標石的なものが動いていないとすれば、城外側へわ

すかに開き気味に開いていたのであろうか。外側列石と思われるものは、敷石使用材程度のものが片側にのみ残っている。当初は柱1の脇の露出した2石が該当石かと思っていたが、うち1石は柱1に添えたものであった。城門脇ということを考



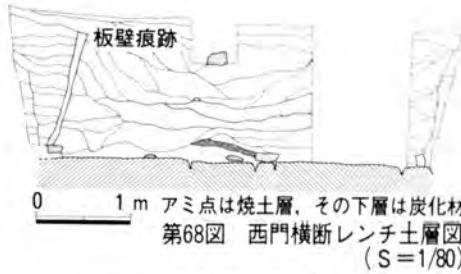
第39図版 西壁面（柱6側）



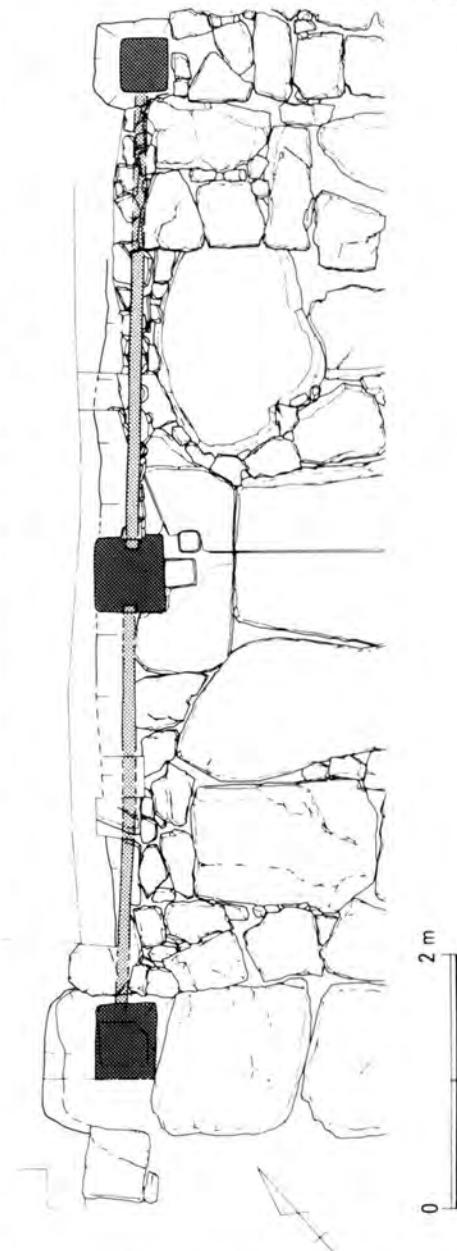
第40図版 東壁面（柱3側）



第41図版 地覆状石



第68図 西門横断レンチ土層図
(S=1/80)



第69図 板壁痕跡平面図 (S=1/60)

えれば、あまりにも小さく、外側列石とするには疑問もないではない。反対側は未調査である。

門の壁面　壁面については、土壘の自然崩落や砂防工事のため残存状況が悪く、内側列石から外側列石に向けて上半分を欠く状況であった。また城門内も当初門礎の大要が判る程度の範囲の調査にとどまったため、不明の点が多く、のちに数箇所にサブトレンチを設け補足調査した。したがって、図示している断面図はサブトレンチ設定前のものである。補足調査は柱4～6側を中心にして行い、反対側は柱2～3間に一箇所にとどめた。

壁面については、土壘の土壁のままであったか、あるいは別の壁面が作られていたのかが問題である。平成6年に実施した東門（第1城門）⁽²⁾では板壁と推定されており、また今回の西門調査を進める過程でも、柱2～5から1m強ほど城内側へ入った城門横断土層面でも、柱5側で板壁痕跡と推定される土層を検出しているが、柱2側はトレンチで掘り抜いていたので、調査は柱4～6側を主体に行った。最初小サブトレンチで断面観察をし、その後平面的に調査した。その結果、柱4、5間で版築土と崩落土の間に、幅10cm、高さ12cmほどの淡黄橙色砂質土が石敷上面に残っており、この土層が板壁痕跡と考えられた。この部分の石敷は、隙間充填材のような小材が多い。柱5、6間では門礎の造りだし上から、両拳大ぐらいの石材が一部石敷との間に薄い土層を挟みながら、2m弱にわたって検出された。この小石材は地覆石のような用い方であるが、柱2～5間でみられたような板壁痕跡と思われる土層は検出できなかった。その理由は、板壁らしい痕跡が内傾していたため、すでにこの部分では排土中に掘り抜いていたことによる。しかし、築成時の版築と崩落した版築土の境は確認できた。これらのことから、柱5、6側の壁面も板壁とみてよかろう。問題は地覆状の小石材の配列である。推定されるのは、両門礎で形状は異なっているが、造りだしが扉止めの機能を果たし、その後何らかの理由でその機能を停め、地覆状石の上に地覆または板壁が置かれた、とも考えられる。もしその仮定が成り立つなら、壁面位置は前者ではもっと土壘内側へ入ることになるが、今回の調査ではその追求まではできていない。一方、柱1～3側は石敷材が大きく、また地覆石状の石材も検出していないが、柱4～6間で検出されたような板壁痕跡らしい土層がある。とすれば、柱1～3間も同様に板壁であったとみてよいのではなかろうか。

ところで柱3、6より城内側へかけては粗いが石積みの壁面になっている。調査作業に障害となる数個の転石は除去したが、図示されているものの中には転落石も含んでいる。現状では柱3、6を二方から挟み込むようにしながら、石段最奥段の城内側端までが石積み壁面のような印象を受ける。しかし細かくみると、柱6部分の断面図の柱の奥の面にみると、石積みが城内側へ面を揃えたような状態で数段も積まれている。転石を除去していないので軽々には判断できないものの、これがある時期かまたある工程において面を形成していた可能性もあり、その後石積み壁が拡張されたのかもしれない。内側列石の面が、城内側を意識して据え置か

れていることも、そうした考えを補強できるのかもしれない。一方、柱3側は図上には反映されていない。しかしこの西門がまだ門跡と確認できる以前に行なった小試掘では、柱3上に露出している内側列石下で数段の石積みを確認しており、その面は城内側を意識していることが判明している。とすれば、状況的には柱3も柱6も同様な意図の下に行なわれたと考えてもよいのではなかろうか。

最後に西門の構築について考えてみたい。調査により検出され、図示されている城門は、最終段階の状況である。前面から7mほどの床面は石敷とし、その奥は4段の石段で城内に通じ、壁面は後柱までは板壁と推定され、その奥は粗い石積み壁面を構成している。ここに構築された城門は、6本柱で門礎をもつ掘立柱城門で、間口4.1m、奥行7.7m、開口部3.0mで内開き、という城門である。

この城門は、廃棄後罹災したものと思われる。中央縦断トレンチをみると、石段部周辺に土壘崩落土がかなり堆積した後で相当量の焼土、炭などのほか炭化した50×60cm大の板材らしいものも出土した。

さて、この西門は改修を経て現在みるような構造の城門になったのか、あるいは改修はなく一時に建築されたものなのか、その可能性のいくつかについて考えてみたい。ただ先述したように、今回の調査が年度末近くになり時間的に逼迫していたことや、遺構を保存し将来整備する計画があるため、大幅な改変にならないよう調査であったこともあり、多くの課題を残した。

(1) 柱と石敷 本柱は凹字状の割り込みをもつ門礎を添わせるものであり、方立や軸摺穴・造りだし、蹴放しを刻した石材を使用しており、単に柱に添わせただけのものではなく、門扉の規模、機能を考えれば、一連の作業工程の中で行なわれたものであることは間違いかろう。

(2) 石積み壁面と石段 石段使用材の中には、壁面に喰い込んでいるものもあり、両方が同じ工程の中で作業が行なわれたとみてよかろう。

(3) 石積み壁面 転石等があるため、通路側からみた石積み壁面の長さがどの程度になるのかは数値的に提示できないが、少なくとも通路側から見る石積み壁面は同工程とみて差し支えなかろう。問題は柱に添わせ土壘中に埋没している石積みである。表記上これを仮にAとし、通路側の石積み壁面をBと表示しよう。課題となるのはAとBが別工程または時間差を表すのか、あるいはA+Bを同工程と考えるかである。柱6では5石が図示されているが、柱3は断面図位置の関係で図示されていないが4石がある。そのいずれもが城内側へ面を揃えている。柱に添わせるだけの石積みであれば、城内側を意識した積み方もあり問題にはならないかもしれないが、西門確認前に柱3側への小試掘でも、面を城内へ向け数段積み上げていることが判明している。もしA+Bが同一工程の中で行なわれたとすれば、Aは埋め殺しになるところで

あり、城内側を意識することもさして必要ではなくなる。とすればAが先行し、のちA+Bに拡張された可能性も考えられる。埋め殺しになることを意識しなければA+Bを一連の工程とする可能性もでてこよう。この点は課題であり、できれば平成9年度に補足調査したいと考えている。

(4) 柱間壁面　　門礎の一端に刻まれた造り出しが、扉止めとして正常に機能を発揮していた場合、壁面は柱間心々間を結んだ線より20~30cmほど土壘側へ入り込むこととなる。この数値は板壁想定ラインより、当然ながら土壘側である。とすれば、扉止めが正常に機能していたかどうか判断するためにも、もう少し土壘側へ入り込んだサブトレーナーが必要となり、この点も課題として残っている。

(5) A築成のための掘り方　　柱4~6側断面図にみると、A築成のための掘り方が柱6上に確認されている。平、断面図からみると柱4~6間は板壁痕跡をしめしており、作業順序からすれば、板壁がAに先行する状態であることが読みとれよう。

以上のことから考えると、三つの過程が考えられる。

イ、石敷・扉止め機能稼働　　ロ、石敷・板壁・A　　ハ、石敷・石段・板壁・A+B

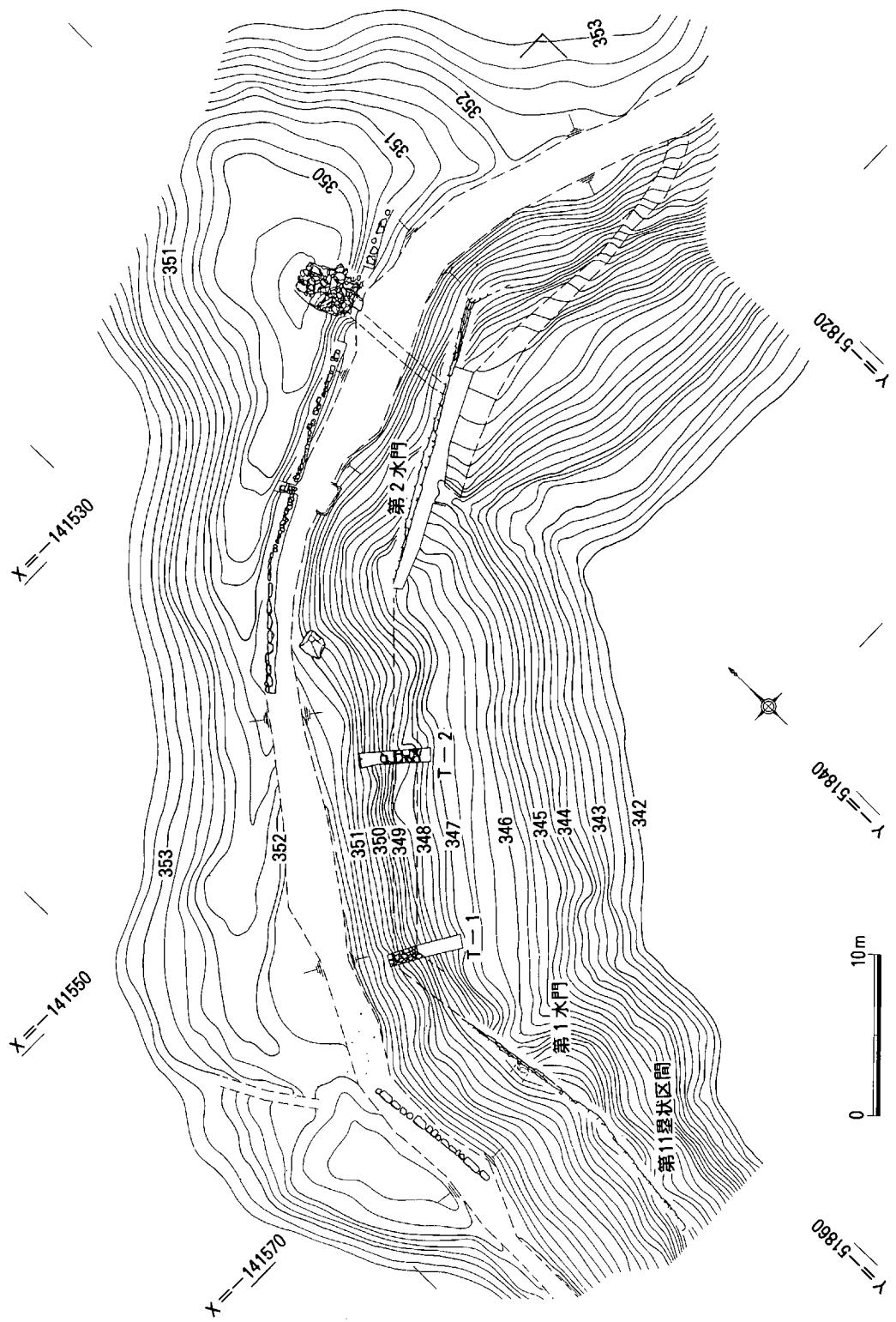
したがって、扉止めが機能を発揮していないとすれば、イは成り立たないこととなる。いずれにしても補足調査を行わねばならないと考えている。



第42図版　板壁痕跡



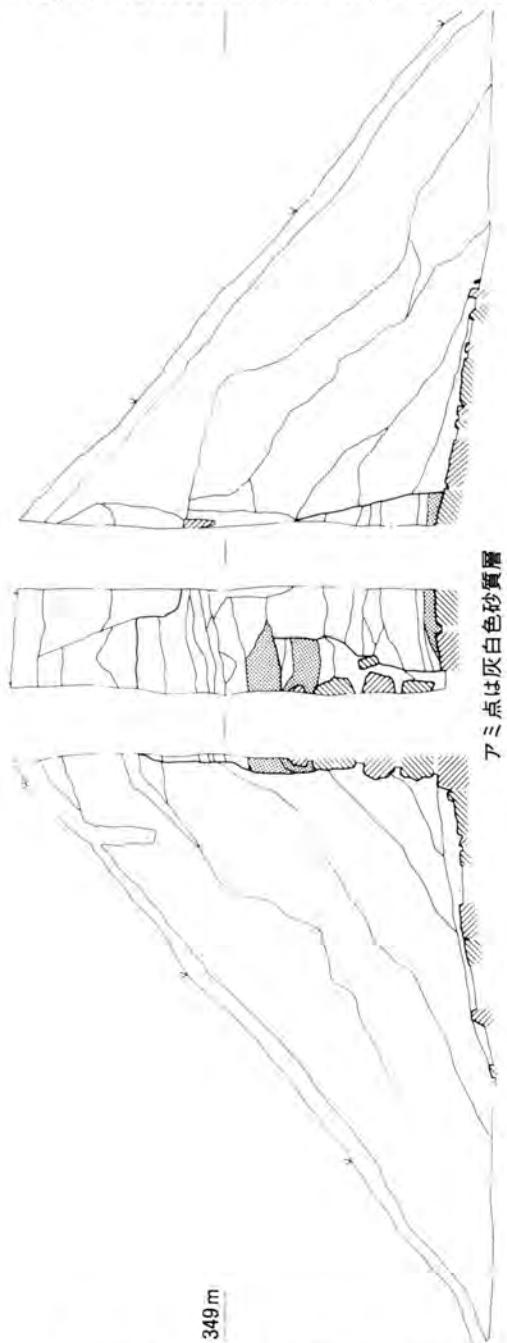
第43図版　版築層と崩落土



第70図 第15墨状区間トレンチ位置図 ($S=1/400$)
平面図は『鬼ノ城』より 一部合成

第15塁状区間の試掘調査について

第15塁状区間は、第1水門と第2水門の間に位置する長さ約27mの区間で、土塁の残存度は鬼ノ城の城郭線の中でも最右翼に位置する。二つの水門に挟まれ、高くて良く残っている土塁は、鬼ノ城の城郭線をイメージするとき、最適の地である。



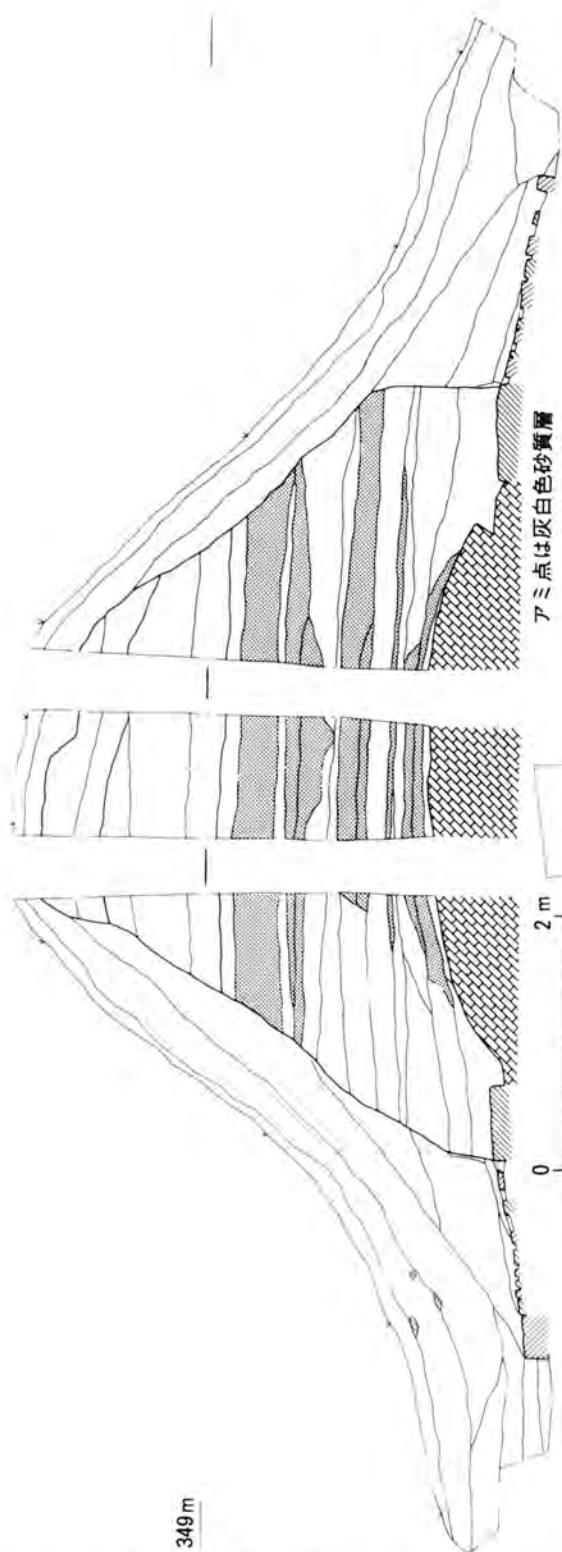
第71図 T-1 平・断面図 ($S=1/60$)

このため、平成8年6月24日の第4回鬼城山整備委員会においてその旨を説明し、第15塁状区間にトレンチを掘削、土塁の残存状況を観察し、可能ならば流土を除去、あるいは流土を除去することが土塁の崩落を進めるようであれば埋めもどしをする旨を提案し、了承された。なお、第1水門跡についても同様の措置をとも併せて了承された。

T-1は、第15塁状区間の城外側からみて左端寄りに幅1mで設定した。ここでは幸いにして、第1水門と第15塁状区間との屈折部を検出できた。基底石を据え、約1.5mほど土塁を粗



第44図版 T-1



第72図 T-2 平・断面図 ($S=1/60$)

く積上げたのち、水門石垣のための掘り方を掘削し、4段の石垣を構築している状況をみることができる。水門の天端高より上部は、第15塁状区間と一体に積上げたものであるが、概して粗い積上げである。水門石垣の上部の土壘は、トレンチでみるとかぎり、左壁では垂直に近く、右壁でも80度弱の角度を示している。その上部1mほどは、土壘崩落による流土である。土質は礫の混入は少ないが全体的に砂質土で、単位層も厚く不揃いであり、堅さを欠き軟質な積上げとなっている。このトレンチでは、予想もしなかつたことに城外側で、角楼部跡と同様な城



第45図版 T-2

外側敷石を検出した。30cm前後の上面の平らな石を中心に、空隙に小石を詰め幅1.5mほどを敷石としている。石材はアプライトである。なお第1水門と第15塁状区間の屈折角度は125度を測る。

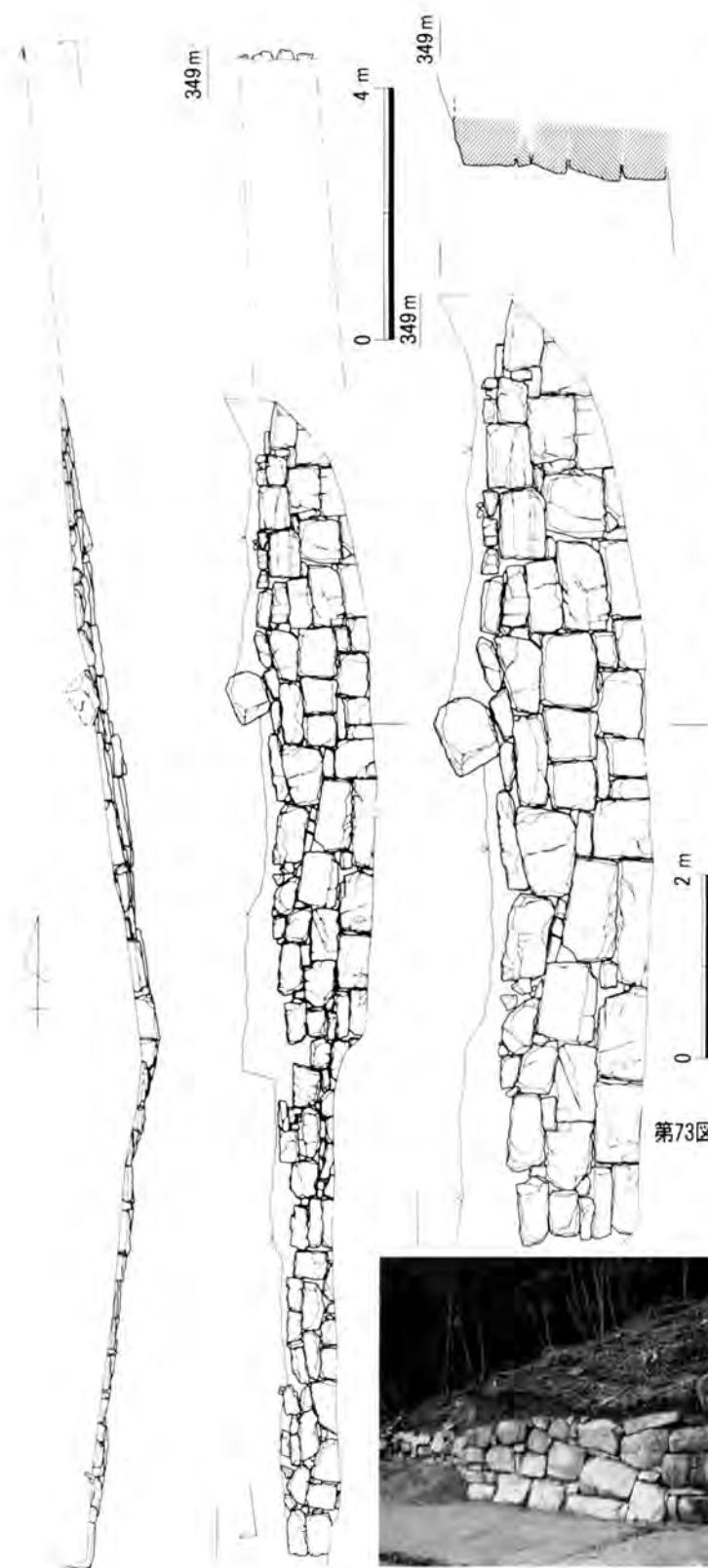
T-2は、T-1の約12m右寄りに幅1mで設定した。このトレーニングの土壘は、今回の調査の中でも最も見事な版築層といえるものである。地山の花崗岩風化土層を整地したのち、外側列石となる基底石を据え、その上部を版築工法で積上げて土壘としている。版築土は礫の混入がきわめて少なく、下層0.3mほどは薄く積上げ、その上部は厚、薄互層に積む。上層は厚層で、軟質である。全体として下層ほどよく叩き締まって堅いが、上層になるほど堅さを欠く。とくに地山直上の灰色土は、唐鋤で掘っても難航するほどの堅さをもつていて、あるいは何かの硬化剤的なものを使用しているのではないかと考えられるほどで、その分析を白石 純氏⁽³⁾に依頼した。ところで土壘の立上がり角度であるが、左壁では基底石上35cmほどは80度ほどである。一方右壁では、基底石上約1mがほぼ垂直である。この角度が築成時の状態を表すものと考えられる理由に、土壘下端に被熱による赤化と敷石直上面に炭層があり、それらが築成時からあまり時間的経過を経ていないものと考えられるからである。土壘の立上がり角度は留意すべきことの一つだが、この壁の状況は手掛けりになるものであろう。また、このトレーニングでも基底石前面で敷石が検出された。石材質、構造ともT-1とよく似た状況であり、幅1.5mを測る。

この二つのトレーニング調査の結果、第15塁状区間の前面に幅1.5mの敷石が存在することが確認され、また現地の状況からみて、二つのトレーニング間にも敷石が存在すると考えて大過あるまい。しかし、土壘の崩落状況、土質、排土量の膨大さなどと、土壘の保護や復元措置のないまま土壘を露出させ、流土を排出することは土壘の保護上問題がありすぎると判断し、埋めもどして旧状に復することとした。

第1水門跡

第1水門跡は、これまで中央部のみが長さ4m、4段積みで高さ1.6mほどが露出していた。この数値と背面の扇状の小凹地から、正面側に既存する5つの水門のなかでも、現状でみると最小規模のものと位置づけられていた。今回第15塁状区間の二つのトレーニング調査の際、水門部にもトレーニングをいれて土層を観察した結果、水門石垣上部の土壘崩落土で覆われていることが判明したので、流土を除去し規模の確認を行った。城外側からみて水門石垣の右端は第15塁状区間に設定したT-1で検出しているので、土壘の崩落を懸念し、その周辺は現状のまま残すこととして、左端の確認に努めた。

この調査の結果、第1水門は長さ14.6m、高さは1.6m強の規模をもつ水門であることが確認され、第2水門にくらべても遜色のないものであることが判明した。石積みは中央部2mほ



どを中心に構築したようで、石積みの段数は石材の大きさや部位により異なるものの、大まかには中央部及び両側面とも3工程であったかと推定される。中央部は工程単位の高さがほぼ水平に近いが、両側からは中央部に向けて下降気味に積み、最終的には天端で高さを調整している。中央部天端上に一石あるが、これは通水口の天井石が側壁の崩落により落下したものと思われる。第2・第5水門通水口の天井石は平石だが、本例は第3水門の天井石の使い方と良く似た状況である。こうして構築された水門石垣は、城内側へ7度内傾したものになっている。石材は花崗岩を主材とし、詰石など調整に用いたものの中にはアブライトもある。

第73図 第1水門・同拡大 平・立面図
(S=1/80, 1/120)

第46図版 第1水門



第11壘状区間石垣

第1水門跡の流土除去時に、水門屈折部左側区間の流土を除去した。下部は石積みの保護上必要と考えられたので、残したままである。この区間では8.2mにわたり、4～5段の石積みをおこなっている。高さは石垣下部の流土を排していないので不明だが、1.5m弱くらいであろうか。石積みは水門石垣に比べ、やや粗雑な印象をうけるが、天端高は第1水門石垣と同高に調整している。第1水門との接続部では、水門石垣が城内側に7度屈折して入る。

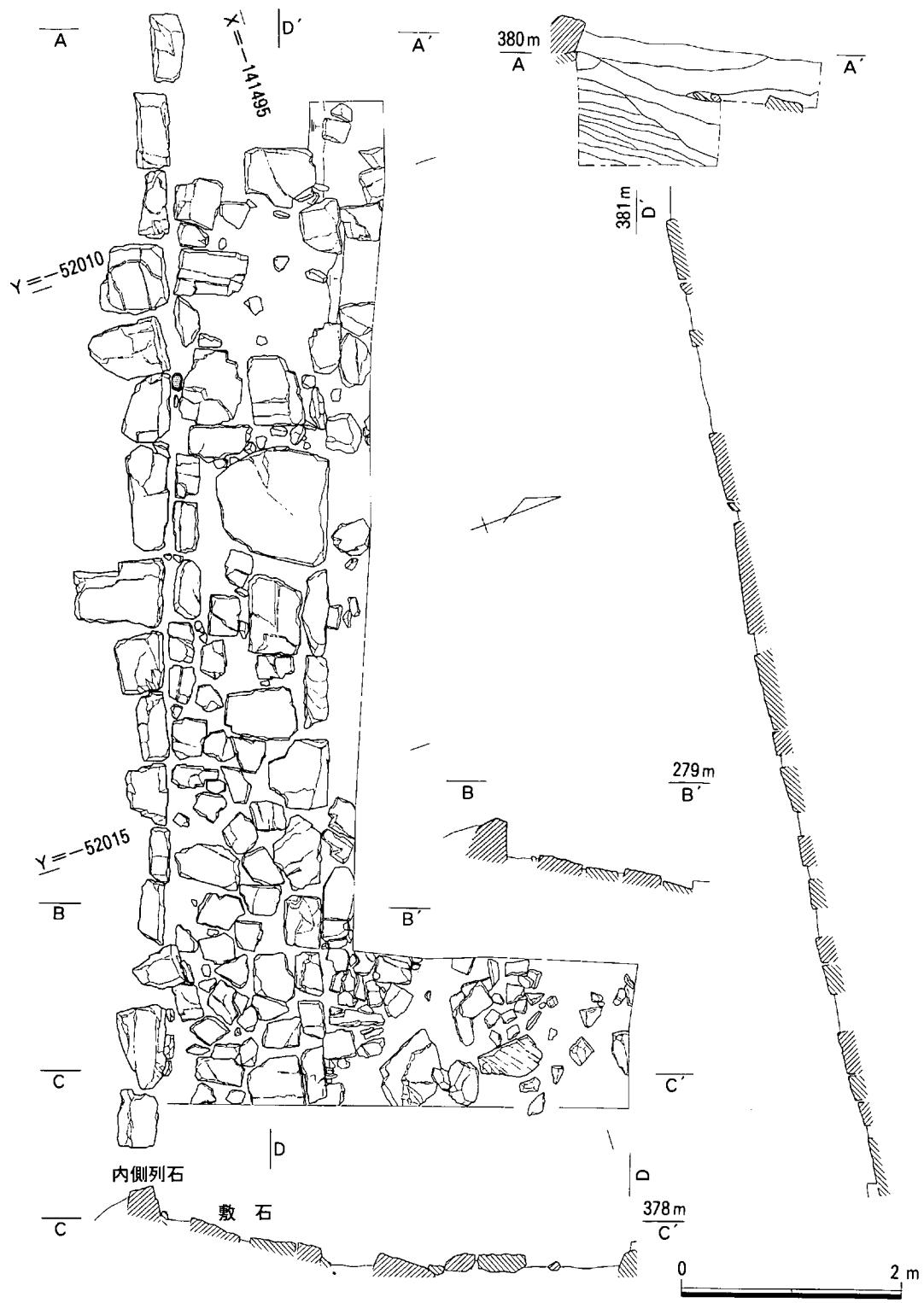
従来、鬼ノ城の壘状区間の城外側については、1石を置いた列石上に版築土壘を積上げた区間と、高石垣区間が知られているが、この第11壘状区間はその中間的な形態といえるもので、他に第37壘状区間などに同種例をみることができる。

第3壘状区間城内側敷石

この区間の内側列石は、比較的残存状態がよく、長さ45mにわたって露出しており、内側列石に接して上面平らな石材が散見されていたが、それが築城時のものか、後世のものかは不明であった。そこで、保存状態が比較的良さそうで、仮に調査後公開しても雨水等による侵蝕の恐れがすくないであろうと思われる高石垣背面側の9×2mの範囲を調査対象とし、敷石の検出に努めた。しかし、清掃してみると一部の敷石がずりおちており、後述する第8壘状区間のものほどの整美さには欠ける。とは言うものの、敷石の城内側端面を揃えていたことは確実で、敷石幅は1.5mを測る。前端面使用石材の中には1×1mほどの大きなものもあり、隙間には小平石を詰めている。内側列石から城内側に向けて10度ほど下降させるとともに、長軸方向も地形にあわせて傾斜させている。調査区端部に設けた拡張区では、敷石より10cmほど下げて平石材を並べ、それより城内側では不揃いの石材を据えているが、一部には転石も含まれるようである。また上方に設けたサブトレーニチでは、版築土壘の状況が検出された。幅狭いサブトレーニチであるため、地山までは掘っておらず、また城内側も遊歩道に接しているため掘り抜けなかった。確認した状況では、礫を含む茶褐色土を城内側へ下降する形状で積み、その上層は整地目的に礫を少量しか含まない淡褐色土で城外側へ薄く、城内側へ厚く積み、その最上層から掘り込んで内側列石を据えている。

第8壘状区間城内側敷石

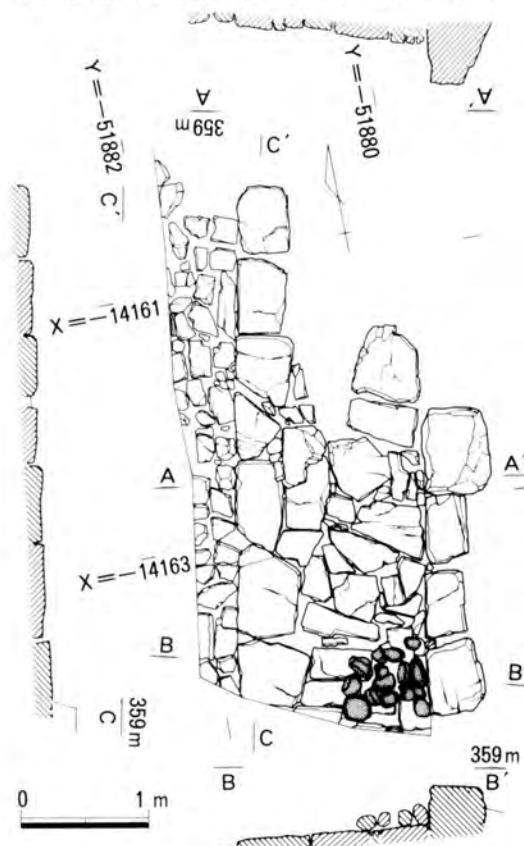
鬼城山から東南へのびる尾根上に位置する区間で、遊歩道沿いに60×30cm大方形石材が、4個立てて用いられ、内側列石を構成している。それに接する遊歩道には50cm大方の上面平らな石があたかも石畳のごとく散見され、一部には円礫もかたまっている状態をみることができた。流土を除去し清掃したところ、城内側敷石がきれいに残っていた。石材はアブライトを用い、幅1.5mで敷石端面を城内側に向けてきれいに整えている。敷石端面からさらに城内側に10cmほど下げて石を並べた状態が検出されたが、それが城内側へどれほど拡がっているのかは今回



第74図 第3塁状区間敷石（城内側）(S=1/60)

調査していない。敷石は内側列石に沿わせて、城内側へ少し下がるような角度で敷きならべているが、これは城内側からの雨水による内側列石の保護を目的とした捨石的なものとも考えられる。また内側列石に接して20cm大の円礫15個が敷石上面に集中して置かれていることも判明した。この円礫は、攻撃してくる敵に対して、あるいは投石用のものかもしれない。

(村上幸雄)



第75図 第8壘状区間敷石 ($S=1/60$)



第47図版 第3壘状区間敷石



第48図版 第8壘状区間敷石

出土遺物

平成8年度は、角楼・西門・第1～2水門間の発掘調査を行った。その際、角楼・西門から須恵器を中心とした若干の遺物が出土している。また、調査中別の地点において数点の遺物を採集しており、その一部もあわせて報告する。

出土遺物は、須恵器甕の小破片が大半をしめる。甕の部位、傾き、上下の区別等が不明のため断面図は省略し、拓影の図示にとどまった。

(出土状況)

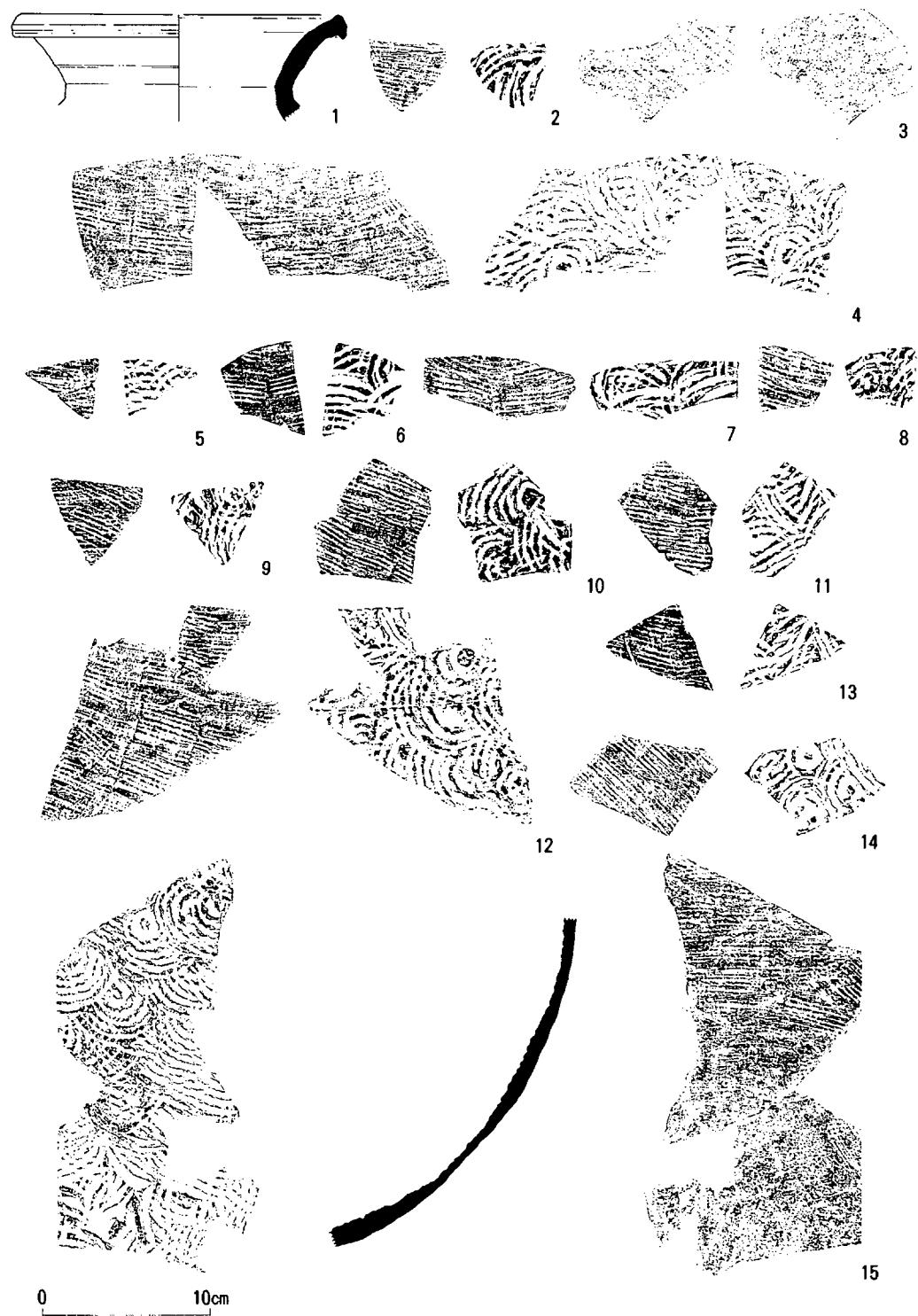
角楼からは1～17・21が出土し、西門からは18・19が出土した。また、20は第3水門で表採したものである。

1はT-5を掘削中、外側敷石付近から出土した。2はP-4の柱痕跡埋土から出土したものである。遺物は遺構検出面から深さ75cmで採集した。3は柱2、4は柱1から出土したもので柱痕跡を半裁した際に出土した。5～7は内側列石付近の表土を掘削時に出土した。8は階段部から出土したもので、下から一段目の中央付近から採集した。9～13・17はT-9から出土し、石敷上に堆積した黒色土中よりそれぞれ採集した。その内12は、黒色土中から出土した破片の他に、T-5の外側敷石直上から出土した破片と接合している。14・15は前面石垣を検出中、出土したものである。ただし、15は前面石垣から出土した破片の他に、柱1の埋土中から出土したもの、T-9の石敷上から出土したものとに接合した。出土地点は異なるが同一個体であることを示している。16は角楼の突出部西側に堆積した流土を除去する際に出土した。21は突出部東側の外側敷石上面より出土した。18・19は西門から出土したもので、18は最上段の石段よりやや城内側で検出された。また19は下から一段目の石段直上から出土している。20は第3水門の内側列石付近で表採したものである。なお、調査中表採した遺物は第6塙状区間の外側列石付近、第8塙状区間の内側列石付近、礎石建物群でそれぞれ須恵器の小片を採集しているが、細かい破片のため図示しえなかった。

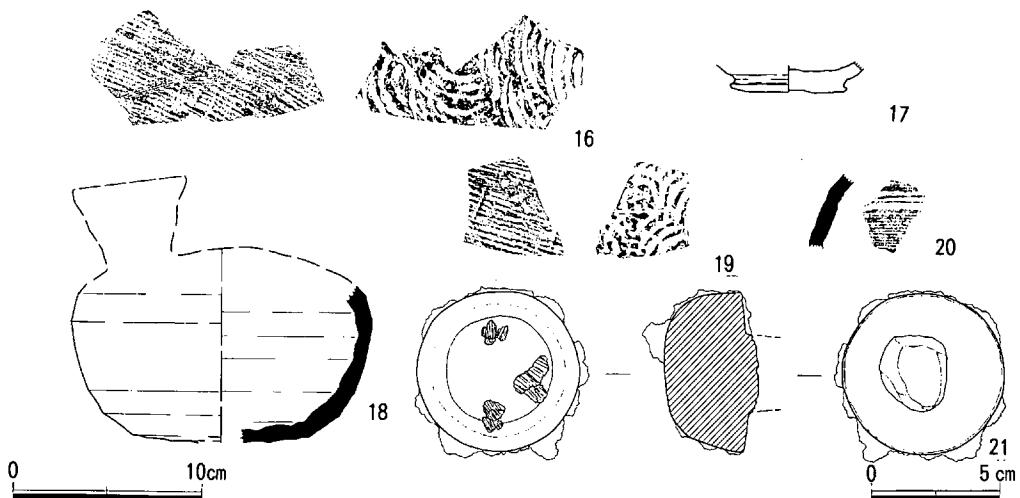
(遺物)

1は須恵器甕で、口縁部の1/4が残存している。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、端部は上下に肥厚する。復元口径は約19cmである。2～16・19は須恵器甕と考えられる。外面はタタキ目のちカキ目調整がみられ、内面には同心円状の当て具痕が顕著である。なお、3の内面にはヨコナデが見られる。20は甕の口縁部で、外面はカキ目調整のち3条の沈線を施している。17は回転台土師器碗で、底径6.2cmを測り、底部にはヘラ切り痕がみられる。21は鉄製の饅頭金物である。直径約6.1cm、厚さ最大3.6cmを測る。表面は円形を呈し、サビの上に木質が付着している。また裏面には釘の基底部が一部残存している。

角楼で出土した甕の破片（2～16）のうち、接合関係はないが焼成・色調・各種の調整技法



第76図 出土遺物 1 (S=1/4)



第77図 出土遺物2 ($S=1/4, 1/3$)

等の観察から同一個体と考えられるものがある。それは4・5, 7・11・13, 6・7・9・10・12・14・15で、資料上の制約はあるが一応3個体分の甕が予想される。

出土遺物の時期については1が8c前半、18が7c後半と考えられる。また、2~16, 19・20も7c後半~8cにかけてのものであろう。17は11cと考えられ、角楼T-9の黒色土中より出土している。鬼ノ城廃絶後の山上寺院期の所産である。 (松尾洋平)

おわりに

今回の調査では、長方形の張り出し部、張り出し部石垣の間の柱、城内外の敷石など、日本の古代山城では初の事例が検出され注目された。最後にそれらについて述べ、まとめとしたい。

角楼について

間口約13m、奥行約4mの長方形の張り出し部が検出され、角楼と称することとなった。この角楼が初築時から設置されていたのか、ある段階になって敷設されたのかは確定しないものの、鬼ノ城に角楼が存在したことは間違いない。国内では、対馬金田城の一の木戸のそばに突出部があり、築城当初のものかどうか議論のあるところである。⁽⁴⁾ 佐藤興治によると朝鮮半島では、「城壁に伴う施設として角楼・雉・敵台がある。いずれも、城壁外面に多くは長方形に突出した部分で、隅角にあるものを角楼、門に近接してあるものを敵台、そして両者の中間位置にあるものを雉と呼んでいる。角楼は、主として戦闘指揮所であり、敵台は門を保護すると共に敵の動静を把握する目的で設けられる。雉は、敵が城壁下に取り付くと死角となるためにこれを側面から攻撃できるように一定間隔を置いて突出部を設けたもので、中国の城郭の「馬面」⁽⁵⁾に相当する。」という。

鬼ノ城の張り出し部は、性格的にもまた位置的にみても雉の側面をもつが、雉は中国では、

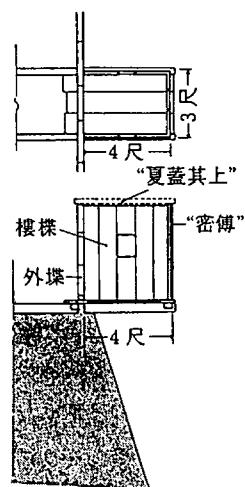
1. 雉堞・雉堞すなわち女牆（ひめがき）または、2. 城壁の長さの単位の意であるといわれる。張り出し部の存在する位置を立地的にみると、敵の侵攻上からも背面側の重要な地であり、西門へも60mと近く、また城内最高所の鬼城山は40mほど上方にあり、防御上の要となる地である。⁽⁶⁾

またこの角楼では、石垣の間に正面側で380~400cmの距離で4本、奥行側310~340cmで2本の計6本の一辺50cmの角柱痕跡が検出された。これも国内では初例である。田村晃一によると、朝鮮半島では、大聖山城跡があり、そこでは「二重に構築された厚さ8mの城壁が残っていたが、その中間の壁面」の「表面に約2~1.5mの間隔をおいて、高さ2~2.5m、幅・奥行ともに30~40cmほどの空隙部が作られ」ており、「筆者はこの空隙部には元来、木材が立てられていたのではないかと想像」⁽⁷⁾されている。⁽⁸⁾この他には、独樂山城や土城であるが蛇山城⁽⁹⁾にも類例がある。

では、この角楼にはどのような施設があったのであろうか。一辺50cmの角柱という規模は、立派というほかない、上部に建物的な施設を考えたいところである。しかし、正面側の中央2本に対応する内側の柱は検出されていない。また、角楼石垣の原高も不明である。一つの推測は、石垣がかなり垂直に積み上げられているので、3.5~4m程度が高さの限度となり、後方の石段（雁木）から推定される角樓上面まですべて石垣積みとするのは困難であり、従って、⁽¹⁰⁾石垣上を板壁で補って、その板壁はさらに上まで延び「胸壁」を形造るというものである。もう一つの推測は、柱が内転びの側脚の可能性もあり、片持ち梁を利用して石垣前面まで伸ばして床面をつくり、板囲いを設けるものである。⁽¹¹⁾つまり“候樓”である。上記の二つの推測は、基本的には相似た形状になるが、相違するのは石垣より前面へ床面をつくるか、つくらなければの違いであろう。樓的な施設の床面が敷石からどれほどの高さとなるのかは不明だが、いずれにしてもそれらは張り出し部につくられる施設であり、その背後には100m²以上の空間がある。角樓前面の敷石と内側列石の比高差は約5.3mであり、石段上段はさらに20cmほど高い。板壁または板囲いの施設の床面高が内側列石または石段とおよそ同高になるのか、あるいは張り出し部と背後の、空間が段差をもつ施設となる可能性もないではない。ことによるとA、B版築の関係、つまり角樓が初築時から存在したのか、のちに付設かを解く鍵もそこにあるのかもしれない。

したがって、この角樓は監視、防衛のための役割を担ったものであり、背後の空間には望樓状の施設が存在した可能性もないではない。

なお、他区間においては、現状ではこの角樓のような張り出し部は 第78図 註11説明図より



みあたらない。しかし、正面側に所在する六ヶ所の高石垣は、片持ち梁あるいは棧道の支脚柱のようなものを用いて施設をつくれば可能であり、これら高石垣箇所は角楼と同じ機能をもっていたとも推定されよう。とすれば、この角楼は第3墨状区間高石垣と関連して西門防備をも意図していたのであろう。

城門について

平成6年度の東門につづき、8年度に西門の調査を行った。幸い両門とも残存状態がよく比較検討も可能な状況である。構造的には両門とも類似しており、門礎をもつ掘立柱城門で床面は石敷、壁面は板壁の可能性が高く、城内側近くは石積み壁となっている。相違点は柱材で、丸柱と角柱、 1×1 間と 1×2 間だが、東門の前柱は流失している可能性もある。規模的には西門がやや大きく、こちらが正面ではないかとの考えもある。9年度調査予定の南門は、石敷の床面をもち、一辺58cmの角柱であることま

では把握しており、西門と類似する可能性が高いようである。国内例では大野城太宰府口門跡が著名である。また9城で門礎が出土しており、うち角柱例は播磨城山、石城山、讃岐城山、怡土城がある。しかし原位置を保つものは少なく、規模、構造をつかみうるものは太宰府口門跡くらいである。朝鮮や中国の事例は寡聞にしてよく知らないが、渤海海上京竜泉府宮城門の床面石敷は類似しているようであり、また同宮城第3号門跡の東側前面の散

表3 鬼ノ城 西門跡・東門跡比較表

	西門跡	東門跡
門		
(構造)	掘立柱式	掘立柱式
	1×2 間の6本柱	1×1 間の4本柱
	門礎間に内扉	前面列に内扉
(規模)	間口ー410cm(心々間)	間口ー346cm(心々間)
	奥行ー770cm(心々間)	奥行ー270cm(心々間)
	扉間口ー300cm	扉間口ー240cm
門礎		
(構造)	柱添えのくり抜き	柱添えのくり抜き
(柱添)	方形のくり抜き (一辺60cm)	円弧のくり抜き (径約58cm)
(方立)	$22 \times 24 \sim 26$ cmの方形	11×25 cmの長方形
	深さ10~11cm	深さ10cm
(軸摺)	一辺18cmの隅丸方形	一辺18cmの隅丸方形
	深さ15~16cm	深さ10cm
(蹴放)	段差6~9cm	段差4.5~5cm
門柱		
(掘形)	80~100cm	一辺約1mの方形
	深さ222cm(敷石上面より)	深さ120cm(敷石上面より)
(柱)	最大60cmの方柱	径40~45cmの円柱
その他		
(城内通路)	段差20cmほどの石段(4段)	前面に露岩があり、不明

の散水は西門の状況ともよく似ている。また西門前面では敷石を検出できなかつたし、また濠も存在しないが、あるいはここに釣橋のような板材使用の通路状のものがあり、危急の場合にはそれをはねあげて門扉前面を閉鎖し、門扉と合わせ二重の防御法をとったのかもしれない。

西門、東門ともほぼ同じ太さの60cmの柱材を用いている。しかし、西門は角柱、東門は丸柱であり、南門はほぼ同じ太さの角柱である。また西門と近距離にある角楼の石垣の間はほぼ一辺50cmの角柱である。この角柱と丸柱の相違が何を意味しているのかわからないが、興味深い事例といえよう。

土壘について

城郭線の中核をなす土壘については、崩落流失が著しく原形を保つ区間はない。城壘は両面構築法で、下部を石垣または列石で、上部は版築土壘で構成され、2.8kmにわたって巡っている。幅については外側の石垣または列石と城内側の内側列石との水平距離から、7mないし⁽¹⁴⁾7m強とされ、7.5m [25尺] の可能性があるという指摘もある。今回の調査では、副員について提示できる資料は得られなかった。また高さについては、上半部の著しい流失のため最も困難な問題であるが、今回検出された敷石の機能がその謎を解く鍵になるかもしれない可能性をもっていると思われる。それは城内側からの土壘への昇降方法である。すなわち土壘の高さが、施設的なものが必要なほど高かったのか、あるいは必要としない程度の高さだったのかということになろう。角楼部へは、城内側からは石段を利用していることはこれまでにみたところである。いずれにしても敷石との関係が何らかの手掛けりをもつように予測される。また城外側で検出された敷石は、外側列石が版築土壘に覆い隠されるのか、露出するのかについて、一つの解答を与えてくれた。それによると、城外側敷石の存在する部分については、露出するということである。しかしこれが、城外側のすべてに敷衍できるかどうかについては、もう少し時間をかけたい。また土壘の立ち上がり角度については、高石垣部分は比較的よく残っているから、その角度は判明している。しかも高石垣が城壘線の全周をめぐるわけではなく、要所に存在し、その前後は列石を基部に土壘線がとりつくのであるから、そうした限定した区間にかぎれば両者の角度が密接に関連するのは当然である。今回の調査では、角楼部のT11と第15壘状区間のT2で資料が得られた。それによると外側列石上に約1mほど原形を保っていたが、その角度はほぼ90度を測る。流失している上部がそのまま立ち上がっていたのか、ある部分で内傾し角度をかえていたのかは不明だが、T2の場合接続する第1水門で7度内傾、第2水門では測定部位により0~10度内傾しているから、T2の土壘角度はこの区間、つまり第15壘状区間ではほぼ垂直状に立ち上がっていたとみてよいであろう。したがって、土壘の立ち上がり角度は、接続する前後の高石垣、数段積みの低石垣、列石等により、多少角度幅をもつているものと推定される。

なお土塁築成に使用された土量は龐大なものであり、また石塁築成の石材量も然りである。それらの土、石については現地調査によるものであろうと考えられ、その供給先の特定も今後の課題となっている。

敷石について

第6塁状区間は、神籠石状列石のある区間としてよくしられているが、対応する城内側遊歩道にはまるで石畳のように板石のような石材が敷き詰められていることははやくから知られていた。しかしそれがいつできたかについては、漠然とながら城内にある江戸時代の観音石像と関連づけられてきた感がある。この度の調査で、角楼前面に敷石があり、それらが上記のものと同工であることが確認された。敷石のうち城外側については、角楼とその周辺・T11・西門・第15塁状区間で、城内側については第3・第8塁状区間で確認できた。幅は1.5mを基本とする。その成果をもとに未調査区間を見直してみると、城外側は土塁の流土で覆われているため露出部がなく不明だが、城内側ではいくつかの区間で敷石と推定される石材が露出していたり、またピンポールの感触でも確かめられる。こうしたことから判断すると、鬼ノ城ではかなり多くの区間で敷石が存在すると考えても、なまじ誇大表現とばかりもいえないようである。日本の古代山城においては、敷石は初の事例であり、構造を考えるうえで大変興味深い。朝鮮半島では蛇山城に類例⁽¹⁶⁾があり、中国ではこれを散水⁽¹⁷⁾といい、また第3・8塁状区間の城内側敷石の一段低い石敷部を敷石⁽¹⁸⁾（ふせき）とよび、埋め殺されているそうである。

（村上）

註

1. 坪井清足ほか『鬼ノ城』 鬼ノ城学術調査委員会 1980
2. 高田・前角・松尾「鬼城山第1城門跡の発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報6』 1996
3. 白石 純氏の分析によれば下表のとおりであり、特別な成分は認められないとのことで、むしろ版築の突き固め方が異なるのではないか、との御教示をいただいた。

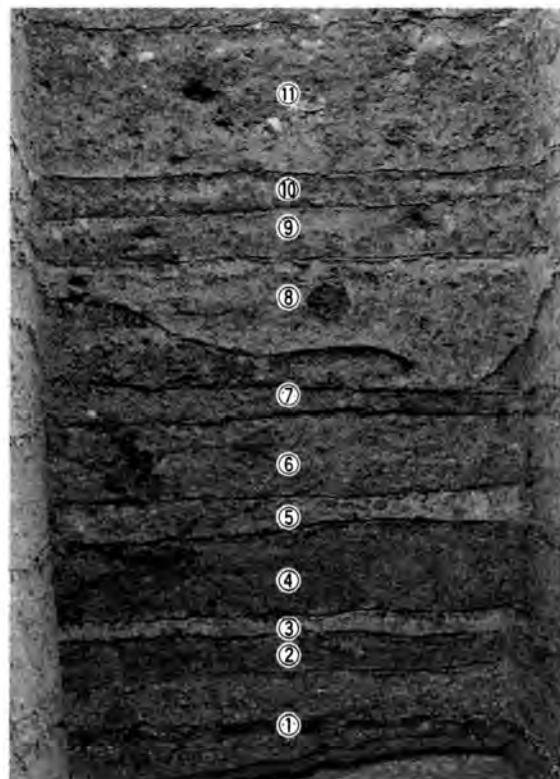
なお、石材の鑑定についても同氏を煩わした。厚く謝意を表したい。

表4 版築土層分析値（%）

資料番号	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P
1	74.38	0.23	15.76	0.98	0.01	1.28	0.48	1.71	5.01	0.09
2	74.53	0.20	15.85	1.06	0.01	1.24	0.41	1.72	4.78	0.12
3	73.71	0.28	15.15	2.94	0.01	1.27	0.51	1.62	4.33	0.07
4	74.46	0.25	16.32	1.34	0.01	1.32	0.39	1.20	4.54	0.09
5-1	70.35	0.22	17.20	4.28	0.02	1.40	0.36	1.60	4.39	0.09
5-2	74.42	0.27	15.75	1.26	0.01	1.26	0.44	1.69	4.70	0.11
6	73.90	0.22	15.91	2.01	0.02	1.27	0.42	1.60	4.44	0.12
7	74.22	0.26	15.12	1.81	0.02	1.17	0.54	1.90	4.77	0.11
8	74.26	0.25	14.61	1.99	0.01	1.20	0.51	1.94	5.01	0.12
9-1	74.70	0.35	14.70	1.87	0.02	1.24	0.59	1.54	4.71	0.10
9-2	74.33	0.39	15.48	1.87	0.01	1.29	0.58	1.42	4.42	0.10
10	74.61	0.22	15.06	1.70	0.01	1.18	0.51	1.80	4.74	0.11
灰	11.39	0.37	5.07	7.79	1.69	3.60	47.34	0	18.97	3.21

4. 向井一雄「対馬金田城の木戸について」『溝堀』第4号 1993
5. 佐藤興治「朝鮮古代の山城」『日本城郭体系』別巻1 新人物往来社 1981
6. 田中 淡氏の御教示による。
7. 田村晃一「高句麗の城郭について」『百済研究』第19輯 忠南大学校 百済研究所 1988
- 8・9. 亀田修一氏の御教示による。
車勇杰「竹嶺路とその付近嶺路沿辺の古城跡調査研究」『国史館論叢』16 1990
『稷山 蛇山城 発掘調査報告書』 百済文化開発研究院 1994
10. 鈴木嘉吉氏の御教示による。
11. 田中 淡氏の御教示による。氏は「座候樓」について説明図を描いておられ、候樓はその規模の大きいものと思われる。
- 田中 淡「『墨子』城守諸篇の築城工程」『中国古代科学史論』 京都大学人文科学研究所 1989
12. 梅崎恵司「第一章西日本古代山城の研究の歴史と現状」『西日本古代山城をめぐる諸問題－東アジアの視点から－』青丘学術論集第10集 韓国文化研究振興財團 1997
13. 西川 宏氏の御教示による。中国遼寧省鳳城市の鳳凰山城北門は幅4m前後で、門礎は鬼ノ城西門のものよりやや小さいが、同じ形態のことである。
14. 西川 宏氏の御教示による。
15. 乗岡 実「33. 古代山城」『吉備の考古学的研究(下)』 1992
16. 註8と同じ
- 17・18. 田中 淡・宋鎮豪氏の御教示による。

[補註] 北門跡推定地については、平成9年度の確認調査で城門跡であることが確認された。



第49図版 第15墨状区間 T-2 版築土層分析資料採集層

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 三軒屋遺跡Ⅱ区、東槇前遺跡、上三本松遺跡
所在地 総社市三輪701-1外
調査期間 1996年5月27日～1996年7月15日、1997年2月4日～1996年3月31日
調査面積 2400m²
調査概要

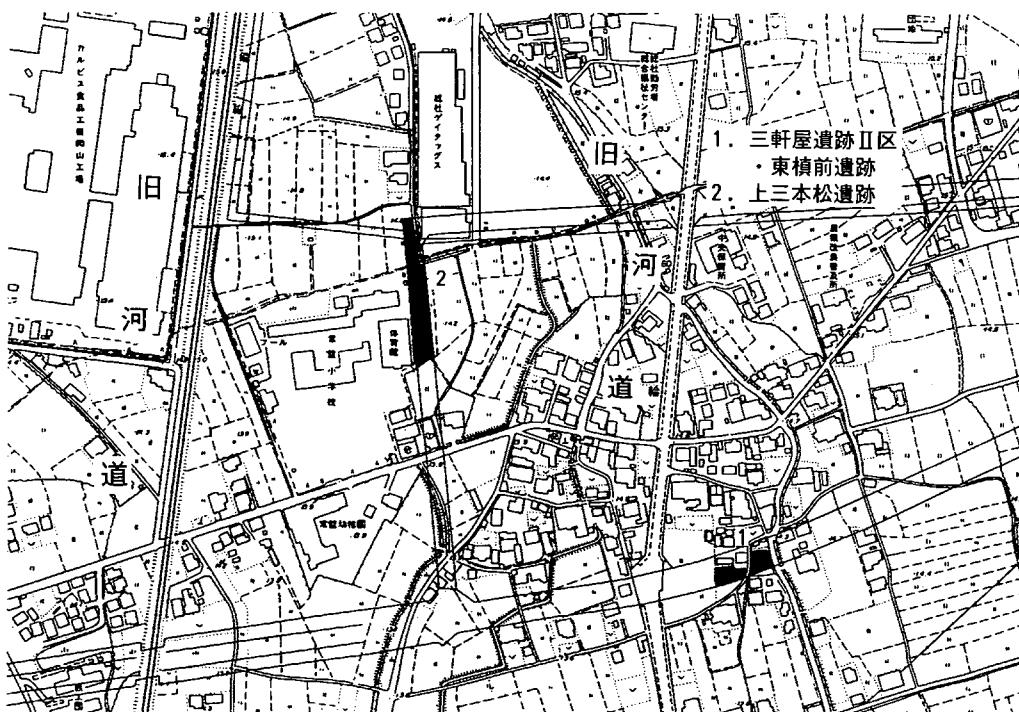
(調査経緯)

総社駅の南部地域を対象とした区画整理事業に伴う道路建設予定地の発掘に着手して、今年度で3年目に入る。工事工程に合わせて発掘調査を行なっていたが、今年度は工事対象箇所が少なく、僅かに22m道路の一部と、この道路から派生する駅南幹線道路の発掘調査を実施したのみである。以下、各調査区ごとに概要を記す。

(平井)

三軒屋遺跡Ⅱ区・東槇前遺跡

三軒屋遺跡は、今回の調査地の西隣にあたる地点を1994年度に調査しており、本調査地をⅡ区として区別することにした。三軒屋遺跡Ⅱ区と東槇前遺跡は小道をはさんで東西に隣接しており、地形は全体として西から東に下がってきている。



第79図 調査地位置図 (S=1/6,000)

三軒屋遺跡Ⅱ区には上・下層の二つの遺構面が認められる。上層の遺構は、耕作土・床土を除去するとすぐに検出されはじめた。調査区の西端に南北に走る溝状遺構があり、土壙・柱穴・溝状遺構が数多く検出された。遺構の残りは浅いものが多く、上部を削平されている可能性が高いと考えられる。遺物の量が少なく、時期を明確に出来ないが、中世以降の遺構と考えられる。

上層の遺構面から約20~30cm程度掘り下げた下層遺構面からは大小の土壙13基と柱穴が検出された。遺物をほとんど含まないため時期不詳であるが、I区の状況から縄文時代後・晚期の遺構の可能性が高いと考えられる。

東槻前遺跡は、耕作土・床土の直下が遺構検出面となっている。三軒屋遺跡Ⅱ区の遺構検出面と比べ標高が50cm程度低くなっている。検出された遺構は大小の溝状遺構と土壙で、遺構は礫層に切り込んでいる。出土した遺物は古墳時代後期と考えられる須恵器が多いが、中世以降と考えられる土器が混在している。出土遺物より、遺構の時期は古墳時代後期~中世と考えられる。

(高橋)

上三本松遺跡

今回発掘調査を実施した区は、1997年度も引き続き調査を行なう予定であり、調査が終了していない現在その全容は不明であるが、現時点までの調査成果を述べたい。

この調査区は、旧河道に挟まれた中州状の微高地に立地しているものと思われ、北側が高く南にいくにしたがって低くなる。

上層の遺構の調査はすでに終了しており、室町時代以降のものと考えられる溝が、東西、南北方向に数条走る。この他には、凹みが確認された程度で、遺構密度は低い。これらの遺構は洪水砂を切り込んでおり、この洪水砂は下層の地形が南に下がっていくことから、北端は10cm



第50図版 東槻前遺跡完掘状況



第51図版 三軒屋遺跡Ⅱ区上層



第52図版 三軒屋遺跡Ⅱ区下層

未満と薄いが、南端では約50cmと厚く堆積している。

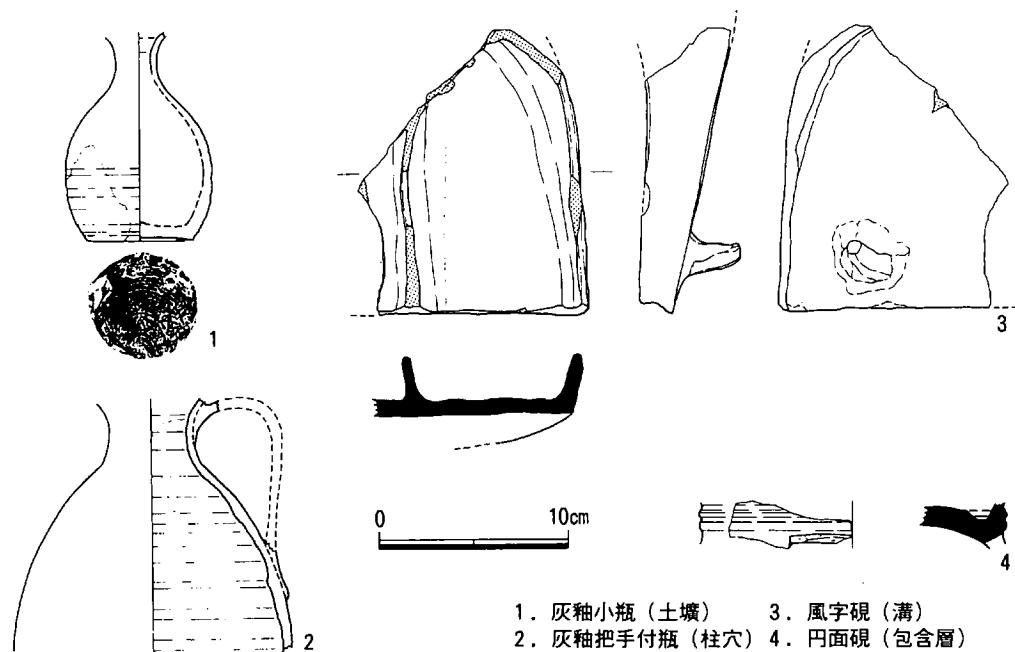
洪水砂を挟んで、下層には古代～中世初頭の遺構が多数存在する。地形が上がっていく北半には特に遺構が密集し、井戸、建物、柱穴、土壙、溝等が検出された。井戸は215×250cmの方形を呈し、北側にのみ井戸枠が残存していた。建物を始め柱穴は方形の掘方をもつものが多い。

遺物は古代～中世の土器、鉄器等が数多く出土しており、良好な資料が少ない10世紀後半の一括遺物も出土している（第81図）。ここで特筆すべきことは、調査途中段階ではあるが、円面硯（第80図4）が1点、風字硯が図示したもの（第80図3）を含め少なくとも4個体は出土していることである。また灰釉陶器を始め、縁釉陶器にいたっては数十個体の出土をみた。このうち灰釉陶器の小瓶（第80図1）・把手付瓶（第80図2）は9世紀後半のものと思われる。

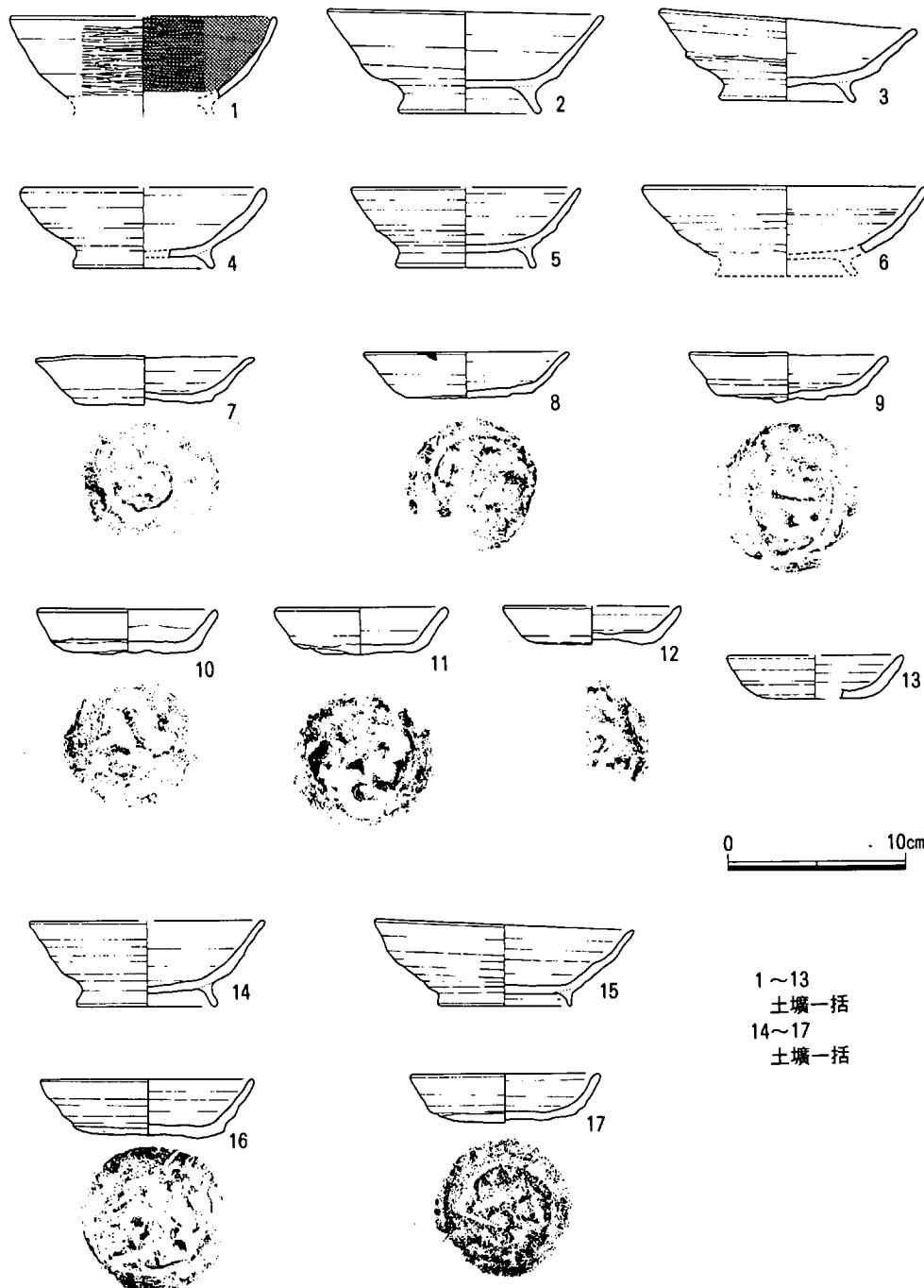
以上のように遺構・遺物からみて、極めて官衙的な性格の強い遺跡と考えられる。

調査地は雀屋郡にあたり、賀陽郡、下道郡との境に近く、旧山陽道からは北へ約1.5kmの地点に位置する。西には大きな河道の存在が想定され、陸運、水運共に交通の便に恵まれた地と考えられ、なんらかの官衙施設が造られたものと思われる。今後の調査で、その性格を明らかにしていきたい。

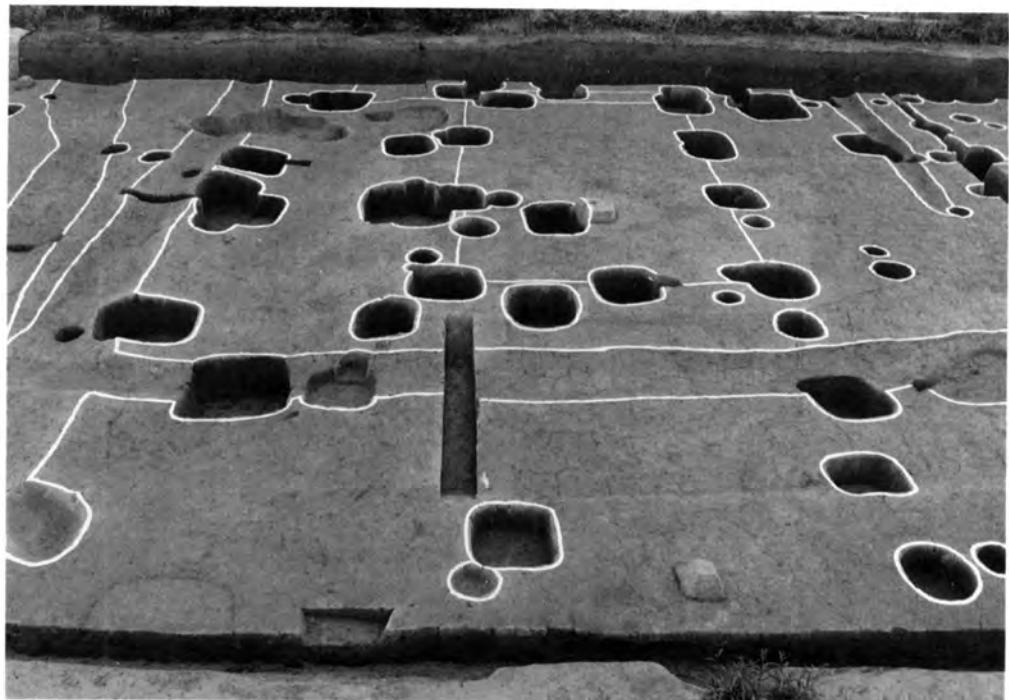
（平井）



第80図 上三本松遺跡出土遺物 (S=1/4)



第81図 上三本松遺跡出土遺物 ($S=1/4$)



第53図版 上三本松遺跡建物完掘状況（東から）



第54図版 上三本松遺跡井戸枠出土状況（南から）

4. 発掘調査報告

すりばち池南墳墓群

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経過

すりばち池南墳墓群は、当初古墳群と認識されていた。これは、昭和56年に藪田兎登木線が国道180号線の迂回路として拡幅された際、発掘調査されたすりばち池3号墳の周辺分布調査により発見された。この時点では横穴式石室を主体部とする古墳1基と前半期古墳2基から成る古墳群と考えられた。すりばち池3号墳の報告では、赤坂1・2号墳と西の奥1号墳と記載されている。⁽¹⁾

その後、すりばち池古墳群を含む泉団地北西丘陵が総社北公園として整備された。また、交通量の増加に伴い迂回路としての機能もその重要度が増した。このため、平成7年度から藪田兎登木線の改良工事が開始された。この工事に伴い兎登木古墳群の所在する丘陵の一部と本墳墓群の所在する丘陵が削られることとなった。兎登木では当初古墳の存在は知られていない部分の工事であったが伐採後の確認調査で古墳1基が新規に確認され、⁽²⁾発掘調査を行った。

本墳墓群の位置する丘陵地に一部保安林があるため、平成8年度では南の1号墳墓が調査対象となった。しかし、計画では2号墳墓が平成9年度の工事範囲に含まれることから担当課と協議した結果、発掘調査は同じ8年度で実施することとした。

第2節 調査の体制

発掘調査は平成8年12月から実施の予定であったが調査地の伐採ができなかつたことから平成9年1月20日から開始し、3月31日まで岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施した。

出土した赤色顔料については、岡山理科大学自然科学研究所 白石 純氏に分析を依頼し調査結果をいただいているので、掲載して感謝の意を表したい。

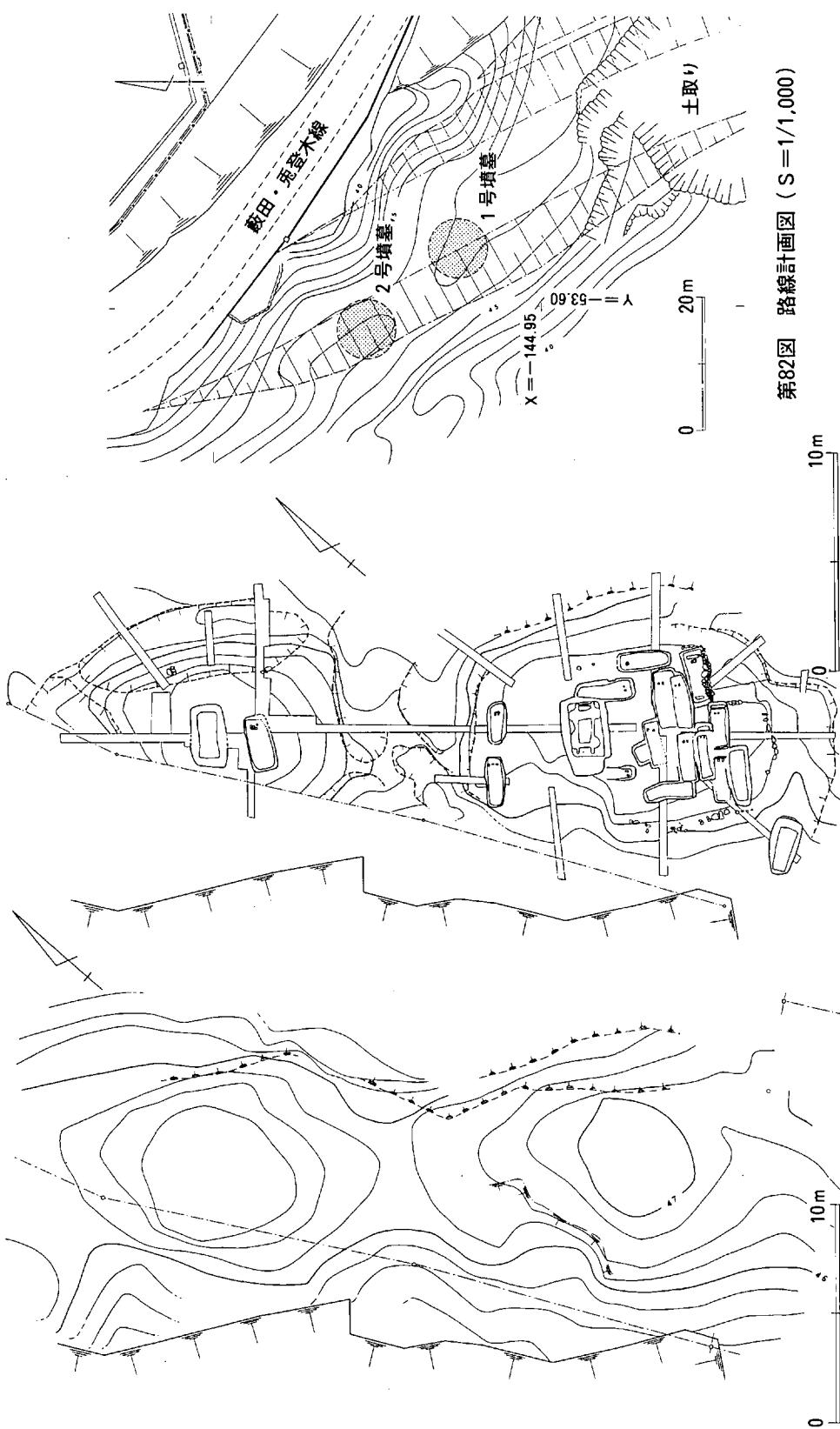
また、遺構実測図の方位は座標北である。

調査組織

文化財室

参事兼室長	村上幸雄	(調整担当)	
室長補佐	加藤信二	(庶務担当)	
主任	谷山雅彦	(調査担当)	
主事	土家慶子	(庶務担当)	
作業員	小池克己	松本和子	岡本慎輔

第82図 路線計画図 ($S = 1/1,000$)



第83図 調査前・後墳丘図 ($S = 1/300$)

第2章 地理的・歴史的環境

すりばち池南墳墓群は、総社市小寺に所在する。小寺周辺は、大字でみると西から井尻野、門田、小寺、福井、泉など多くの丘陵部を含む。井尻野周辺で市内では最も古い先土器（旧石器）時代の遺物が採取されている。⁽³⁾

井尻野は、総社市を南流する高梁川が吉備高原を抜け出る位置にあたる。これより南は平野部で微高地から縄文早期の土器片が出土している。平野部では堪井から東流する幾筋もの旧河道が認められる。溝口、真壁、福井、井手などはこの旧河道に沿って形成された微高地上の集落である。微高地の形成は縄文晩期には現在に近い状態に成了と考えられる。しかし、晩期以降も高梁川の氾濫から新たな河道が形成された。このことは、近年の発掘調査で弥生時代の集落が旧河道で削られていたことから明らかである。

丘陵部では一部弥生時代の遺跡と多くの古墳群が知られている。岡山県遺跡地図では新田古墳群（40）から井尻野古墳群（57）までが含まれる。このうち新田古墳群から高池古墳群（46）⁽⁵⁾は県営住宅団地造成に伴い発掘調査または保存がなされた。現在の泉団地である。保存古墳の中には直径約36mの円墳である尼子山古墳がある。⁽⁶⁾ 顯著な古墳では全長約50mの前方後円墳、⁽⁷⁾ 井山古墳が兎登木古墳群中にある。⁽⁸⁾ また、短甲などが出土した一辺約25mの方墳、佐野山古墳⁽⁹⁾は井尻野古墳群中に含まれる。

古墳群の多くは前半期古墳と考えられる。横穴式石室を主体部にもつ後期古墳群は、すりばち池古墳群（47）、塔坂古墳群（51）、大谷古墳群（52）などである。内容が明らかになっている古墳群は発掘調査が行われた、すりばち池古墳群と大谷古墳群（大塚古墳群）である。昭和60年に刊行された全国遺跡地図（岡山県）⁽¹⁰⁾では井田古墳群20基からすりばち池南古墳群を含む23基に追加された。大谷古墳群は、台帳では4基確認されていたが、開発に伴う分布調査や確認調査で最終段階には24基の古墳が明らかになった。このため調査では小字の大塚を古墳群の呼称に用い福井大塚古墳群とした。⁽¹¹⁾ この古墳群には、直径約26mの円墳や全長約22mの前方後円墳が含まれた。

すりばち池古墳群⁽¹²⁾は3基の古墳が確認されていたが、発掘調査により6基の古墳と7基の箱式石棺、奈良時代の火葬墓も3基検出された。この中には、すりばち池3号墳も含まれる。

すりばち池南墳墓群は、先のすりばち池古墳群と谷を挟んだ南に位置し、井田古墳群・赤坂古墳群と呼称された古墳群である。井田古墳群は大字では井尻野と小寺を含む。また、井田が地名でないことから今回の調査では既知のすりばち池古墳群の南に位置することから、すりばち池南古墳群とした。しかし、調査後古墳でないことが明らかになったので墳墓群とした。



第84図 周辺古墳分布図 (S = 1/25,000)

第3章 発掘調査の概要

第1節 位置と環境

本墳墓群は総社市小寺に位置する。

すりばち池南墳墓群の所在する尾根は主尾根から南東方向に幾筋か舌状に延びる低丘陵の一つである。墳墓は尾根の付け根、鞍部に築かれている。墳墓の北、主尾根との接点部分は山道で切断されている。

墳墓群の位置する丘陵地周辺の古墳の分布をみると、泉田地や総社北公園を含む丘陵上には主に前半期古墳が所在する。その一方谷を挟んだ北の地域では塔坂古墳群、青谷川古墳群、福井大塚古墳群など後期古墳群が多い。昭和56年（55年度）と平成元年・2年にすりばち池古墳群が発掘調査された。この古墳群は当地域の横穴式石室導入期のものと考えられる。同じ南東斜面に石室と墳丘を持つものと、明確な墳丘を持たない箱式石棺を主体部とするものが同時期に築かれている。

弥生時代の遺跡は、すりばち池古墳群の調査で中期の遺構や遺物わずかに検出された。井田古墳群の所在する丘陵地には弥生時代後期の遺物が出土する地点があり、墳墓地と考えられている。

当墳墓群は先のすりばち池古墳群との関係や調査前には遺物が採取されていなかったことから、前半期古墳2基と考えられた。

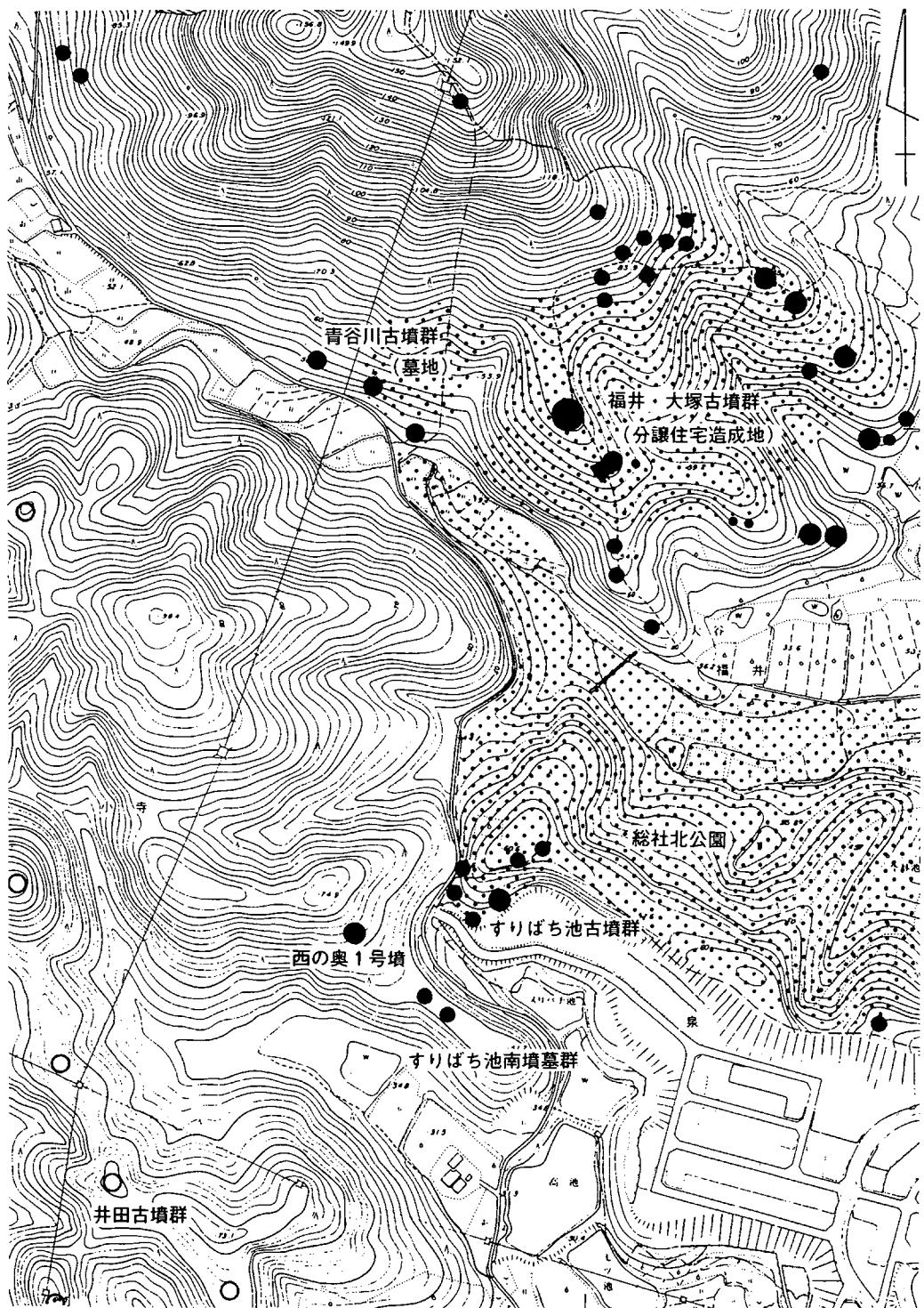
第2節 1号墳墓

1. 墳丘と周溝

1号墳墓は、当初扁平な円形の古墳と考えられた。尾根は南東が高く、周溝と思われる凹部が認められた。南西部は山道の切り通しが墳端近くまで及んでいた。北東部は急斜面で砂防段と思われる段が数段認められた。北西部の墳端は小さい谷が入り込んでおり明確でなかった。また、北西部角にわずかな土取りが認められ、この部分の墳端を不明瞭にしていた。

調査の結果、墳形は長方形に一部張り出しを付けた形であった。この張り出し部は、土壙墓の先後関係から土壙墓の増加に伴い拡張された結果と考えられる。

墳端は北西と南東の尾根を周溝で切断し、配石を巡らす。全体には盛土がなされていたと考えられるが中心部分のみ残存していた。配石もほとんど周溝や斜面に落下し元位置をたもった石は少ない。



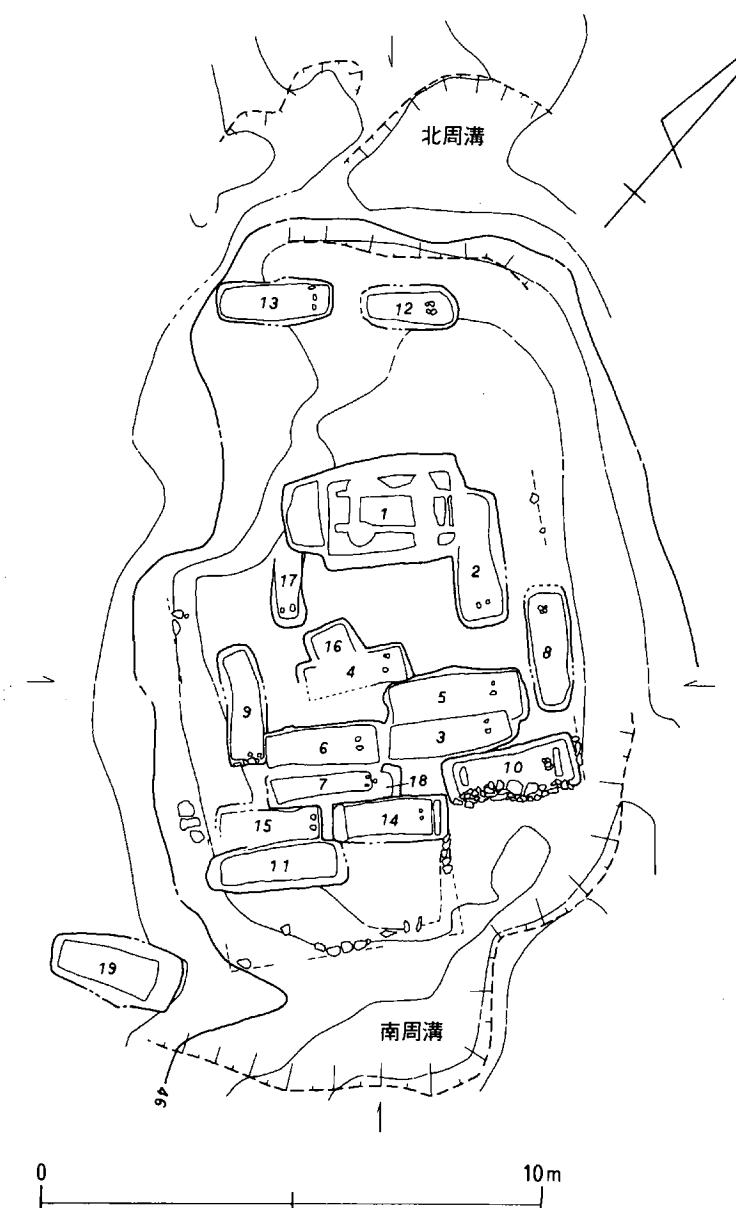
第85図 調査地周辺図 ($S=1/5,000$)

墳墓は最大長で約14.4m、短辺約8mあり、そのうち拡張部は4.8×2.2mの規模であった。

2. 埋葬施設

第1主体部（第88図）

第1主体部は、墳丘のほぼ中央に位置する。墓壙検出面で、規模は長さ290cm、幅219cm、深さ69cmである。第2主体部を切って掘られていた。検出時に上面からガラス玉が出土している。この主体部はその他の主体部と異なり墓壙が広い。また、棺の外側に柱穴が認められた。柱



第86図 1号墳墓平面図 (S=1/150)

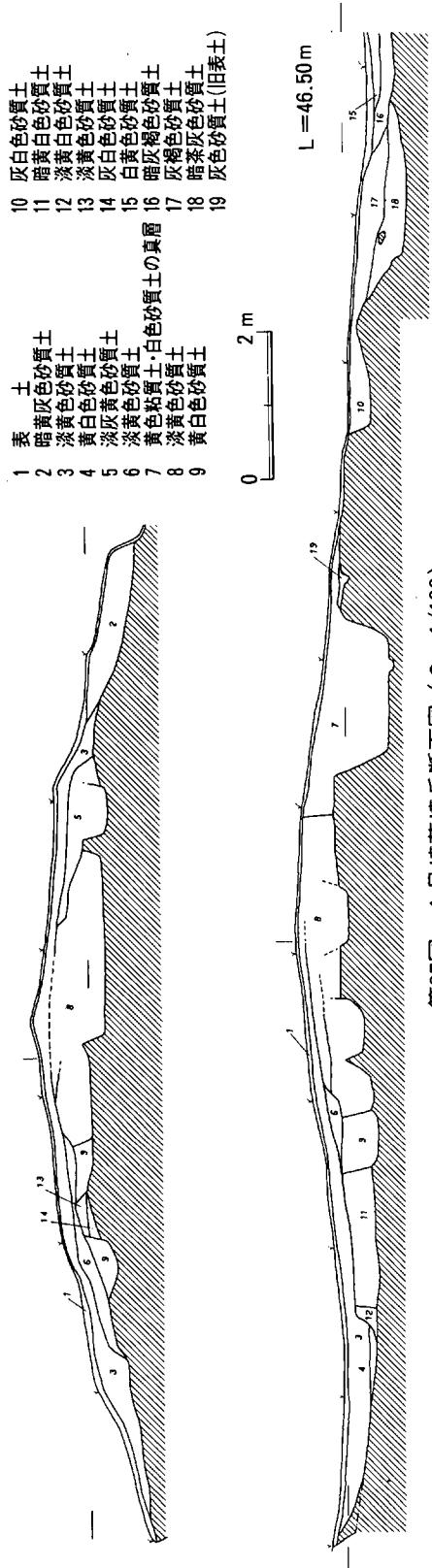
穴はいずれも深さが20cmほどであった。棺痕跡は認められなかつたが、棺材を立てるためと考えられる掘り込みが検出された。床面全体に赤色顔料が認められ、特に頭部と考えられる北では多く出土した。副葬品は鉄器1点のみであった。

第2主体部（第89図）

第2主体部は第1主体部に接してあり、一部重なっている。規模は検出面で長さ276cm、幅100cm、深さ45cmであった。南東部がやや広く床面に枕石一対が出土した。棺内には副葬品は認められなかつた。

第3・5主体部（第90図）

この主体部は墳丘の東西トレーナーで存在が



第87図 1号墳墓壇丘断面図 ($S=1/100$)

明らかになった。当初は1基と思われたが、検出時に北東角に段が付くことから2基に分かれることが判明した。中央に残した畦の観察から棺痕跡は認められず、床近くで第3主体部が新しいことが検出された。いずれも北部で一対の枕石が出土した。第3主体部の枕石近くで赤色顔料が微量出土している。第3主体部の規模は長さ267cm、幅92cm、深さ39cmである。第5主体部の規模は長さ270cm、幅90cm、深さ27cmである。

第4・16主体部（第91図）

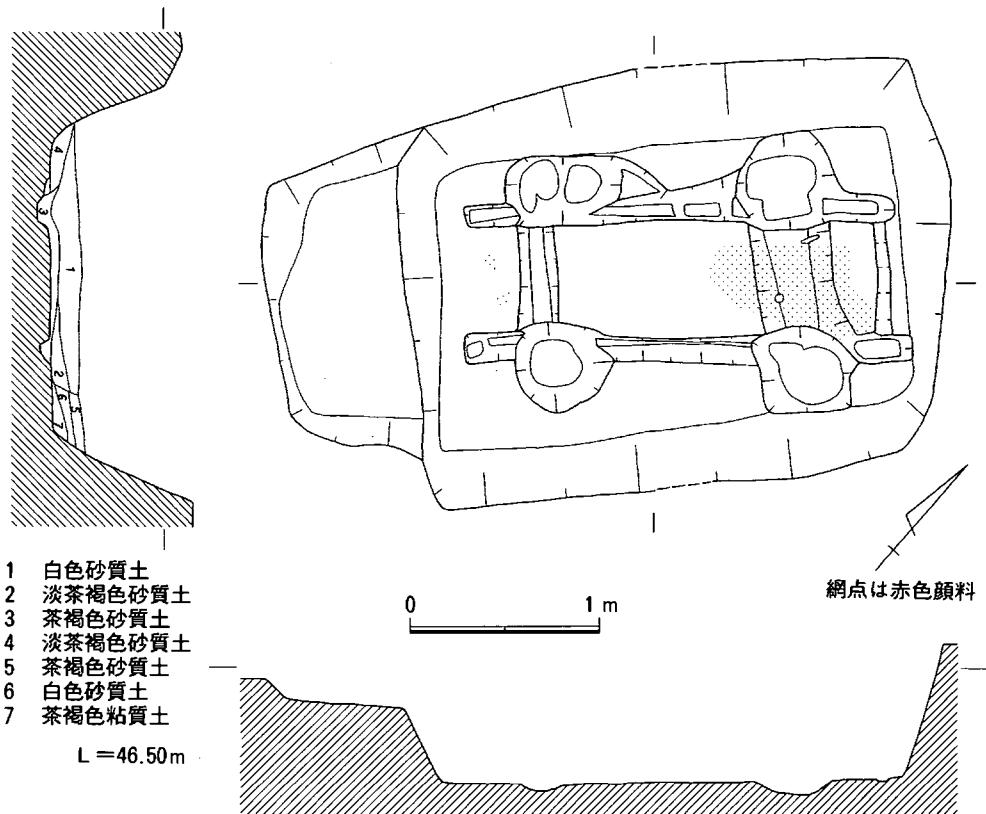
この主体部は当初、東西（短辺方向）トレンチで埋土が明らかになったが、断面が主体部に対し斜断であったため墳丘盛土と思われた。検出時に2基の切り合い関係があることが判明した。第4主体部が第16主体部を切って掘り込まれていた。第4主体部の北部床で一対の枕石が出土した。副葬品はこの枕石周辺から管玉1と鉄剣1が出土した。第4主体部の規模は、長さ224cm、幅78cm、深さ25cmであった。第16主体部は長さ不明、幅70cm、深さ14cmである。

第6主体部（第92図）

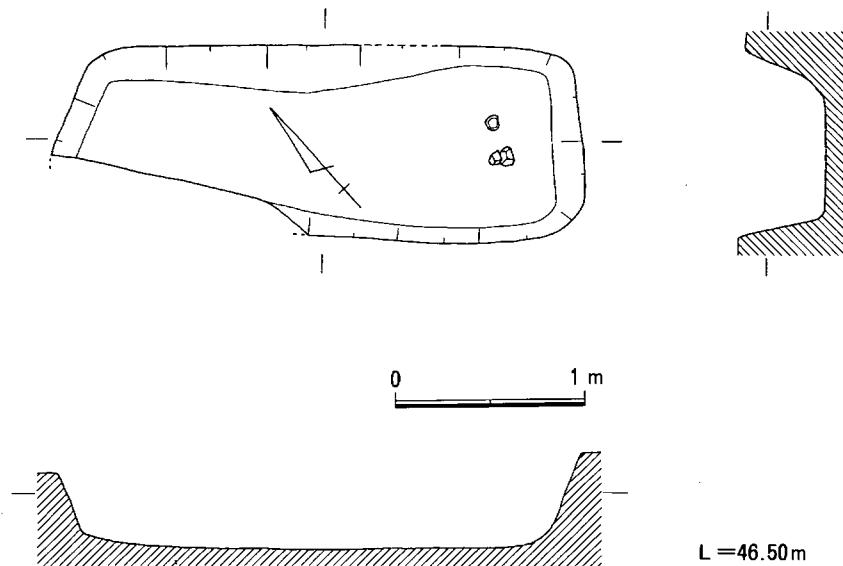
この主体部は南北（長辺方向）トレンチの断面で明らかになった。この部分は多くの土壤が重なっていた。断面観察で南の第7主体部が新しいことが判明した。このため規模は残存で長さ230cm、幅83cm、深さ23cmである。北部に一対の枕石が認められ、石の脇から管玉1が出土した。

第7・18主体部（第93図）

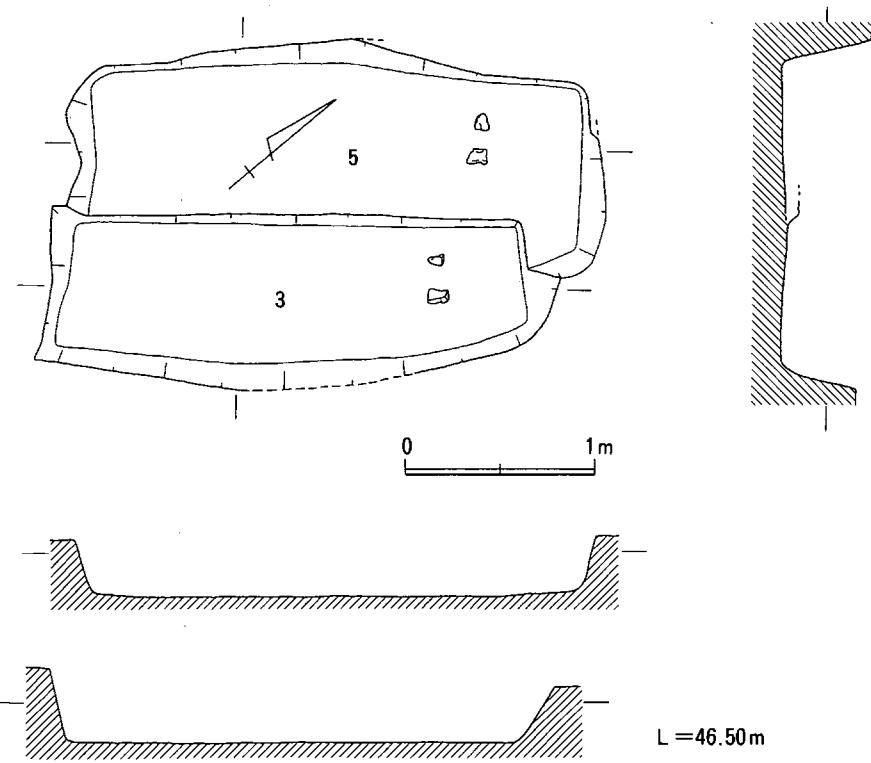
この主体部は第6・14・15主体部の後に掘られた土壤で、当初1基で調査した。しかし、北で段が付き第7主体部より古い主体部が判明した、第18主体部である。この主体部では頭部で一対の枕



第88図 第1主体部 ($S = 1/40$)



第89図 第2主体部 ($S = 1/40$)



第90図 第3・5主体部 ($S=1/40$)

石と立石1が出土した。また、南側で詰めと思われる石2が出土した。規模は長さ228cm、幅100cm、75cmである。第18主体部の幅は85cm、深さ45cmである。

第8主体部（第95図）

この主体部は東西（短辺）トレンチで明らかになった。やや断面が舟形になるが棺痕跡などは認められなかった。北部で枕石と思われるまとまった石が出土した。規模は長さ243cm、幅88cm、深さ31cmである。

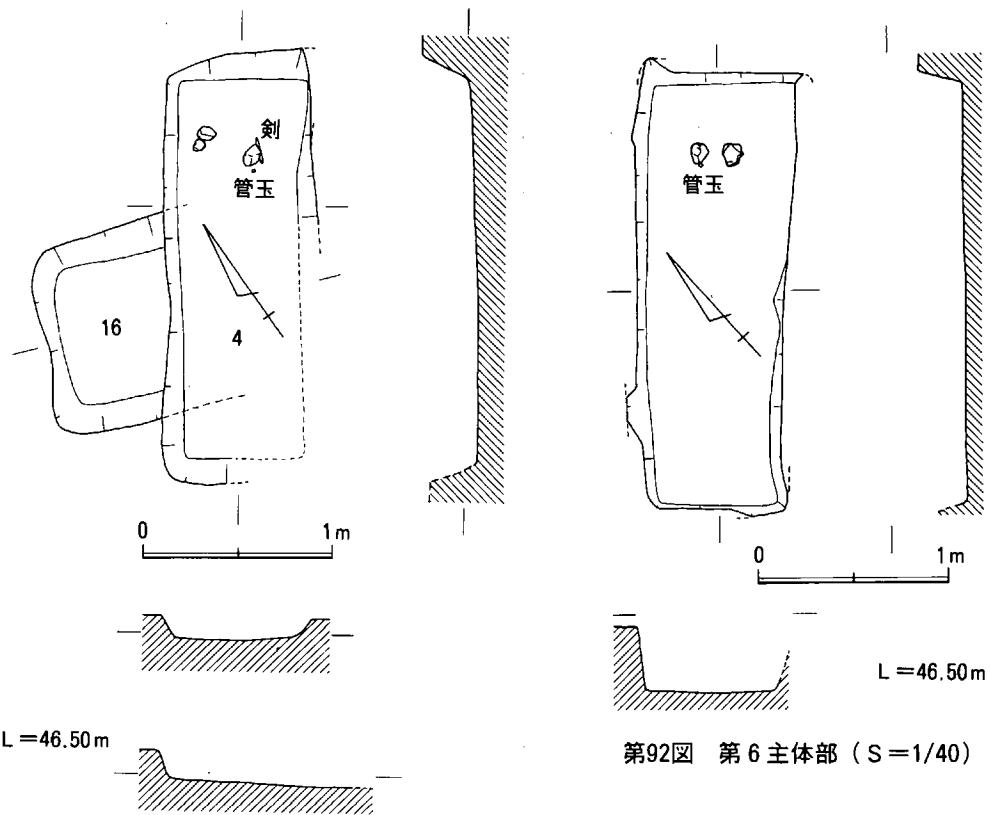
第9主体部（第96図）

第9主体部も第8主体部同様東西トレンチで明らかになった。明確な枕石は無く、南側面上部に簡単な石組が認められた。規模は長さ240cm、幅77cm、深さ45cmである。

第10主体部（第97図）

この主体部は、墳丘北東角にあり墳端の石列と重なる。石列が主体部の後築かれた。棺痕跡は不明であるが、床面で小口板を立てた掘り方が検出できた。組み合わせ式木棺と考えられる。墓壙の規模は、長さ266cm、幅97cm、深さ30cmである。棺の規模は推定長さ174cmである。

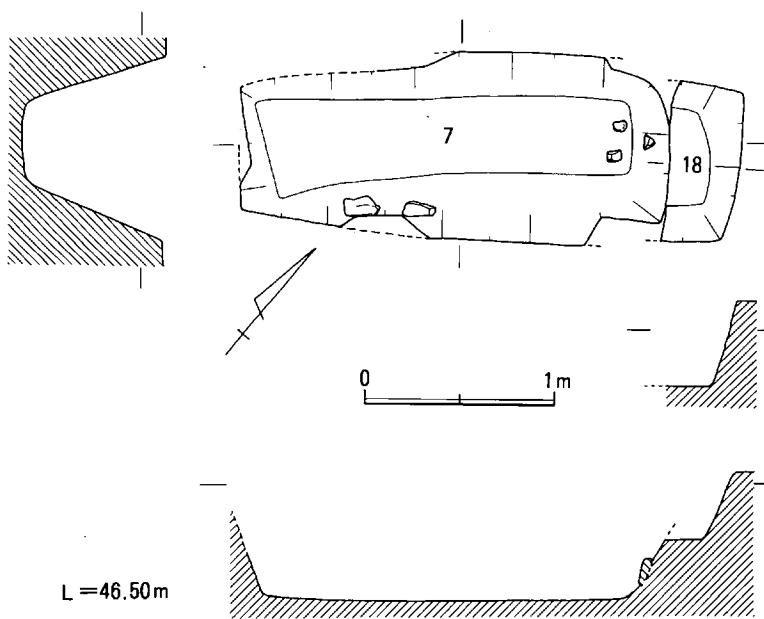
第11主体部（第98図）



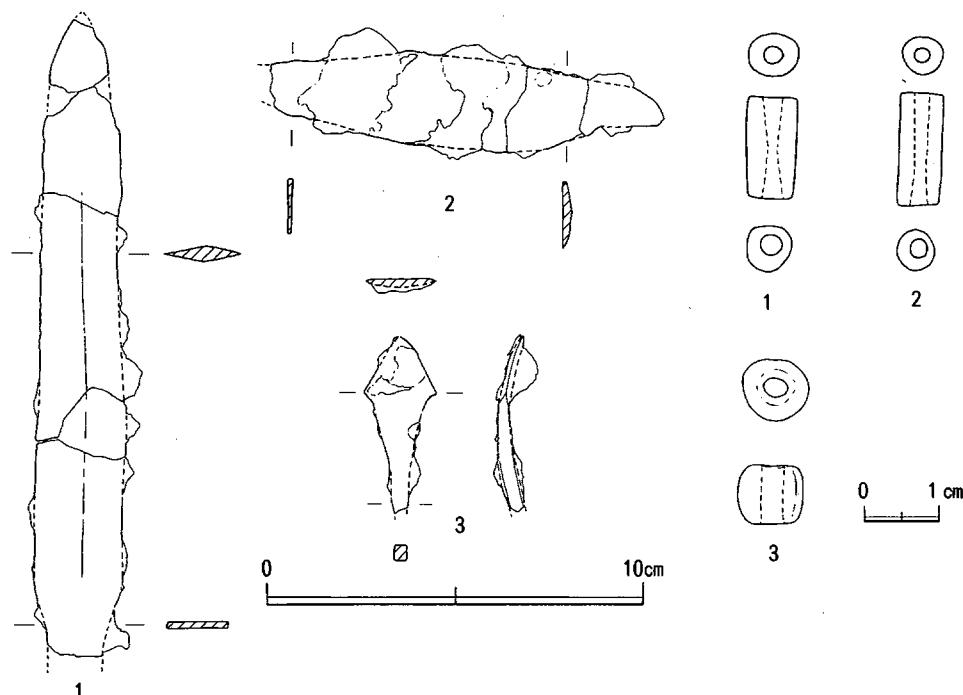
第91図 第4・16主体部 ($S=1/40$)

第11主体部はこの墳丘では最も南に位置する。第14・15主体部より新しく、この区域で

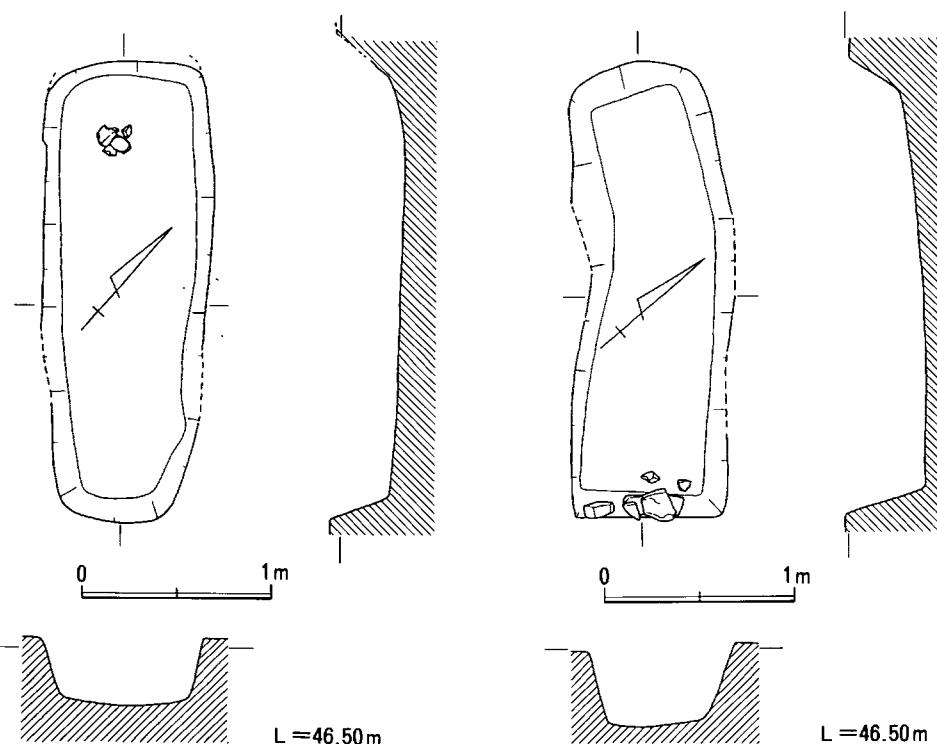
は最終段階に設けられた墓壙と考えられる。規模は、長さ282cm、幅109cm、深さ82cmである。早い段階でトレンチを設けたため北寄りで砥石と下部から小石数点出土したが、取り上げたため位置の図化はできなかった。他の土壙と同じく北に枕石が存在したと考えられる。



第93図 第7・18主体部 ($S=1/40$)

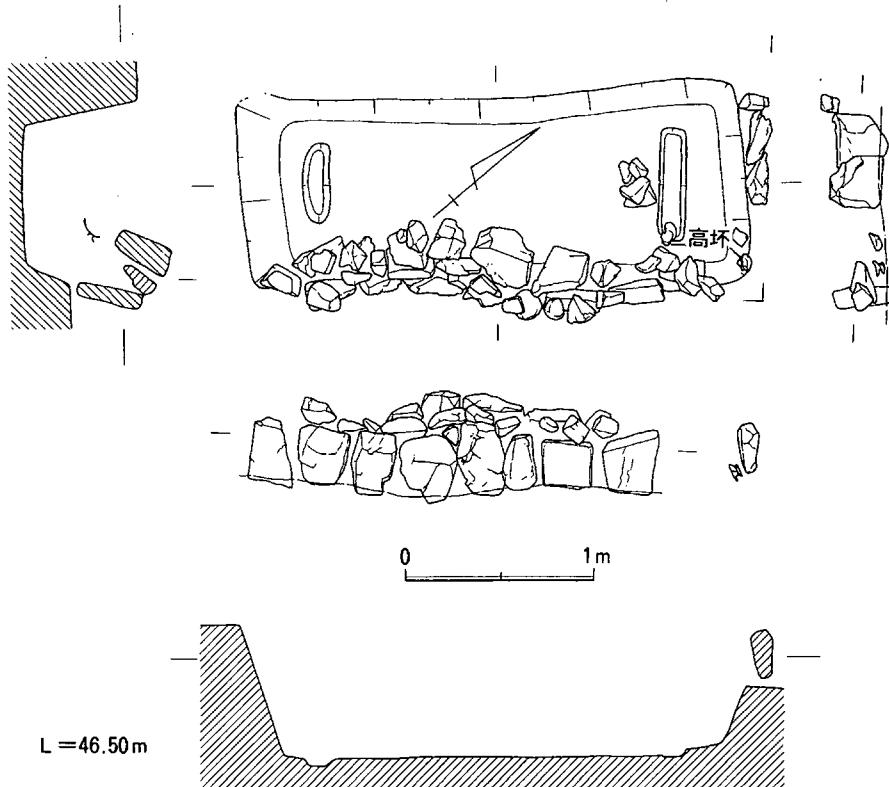


第94図 鉄器・玉類 (S=1/2, 1/1)

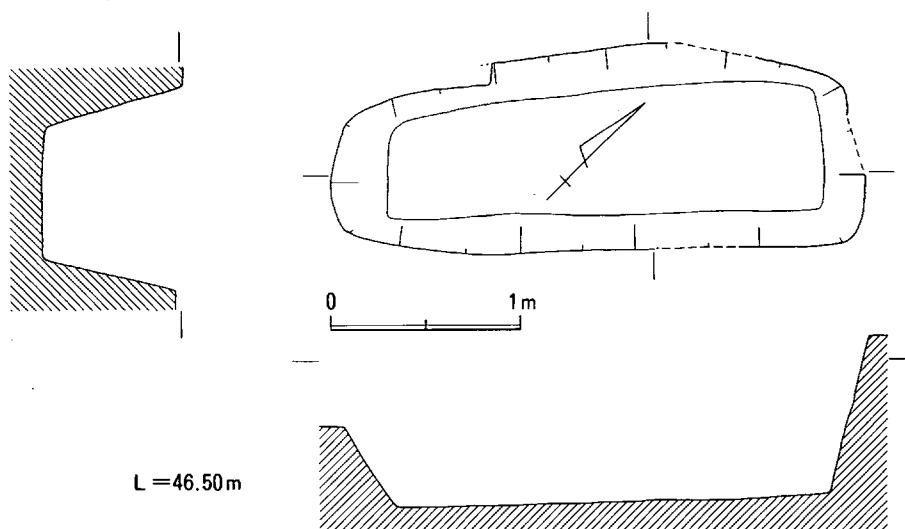


第95図 第8主体部 (S=1/40)

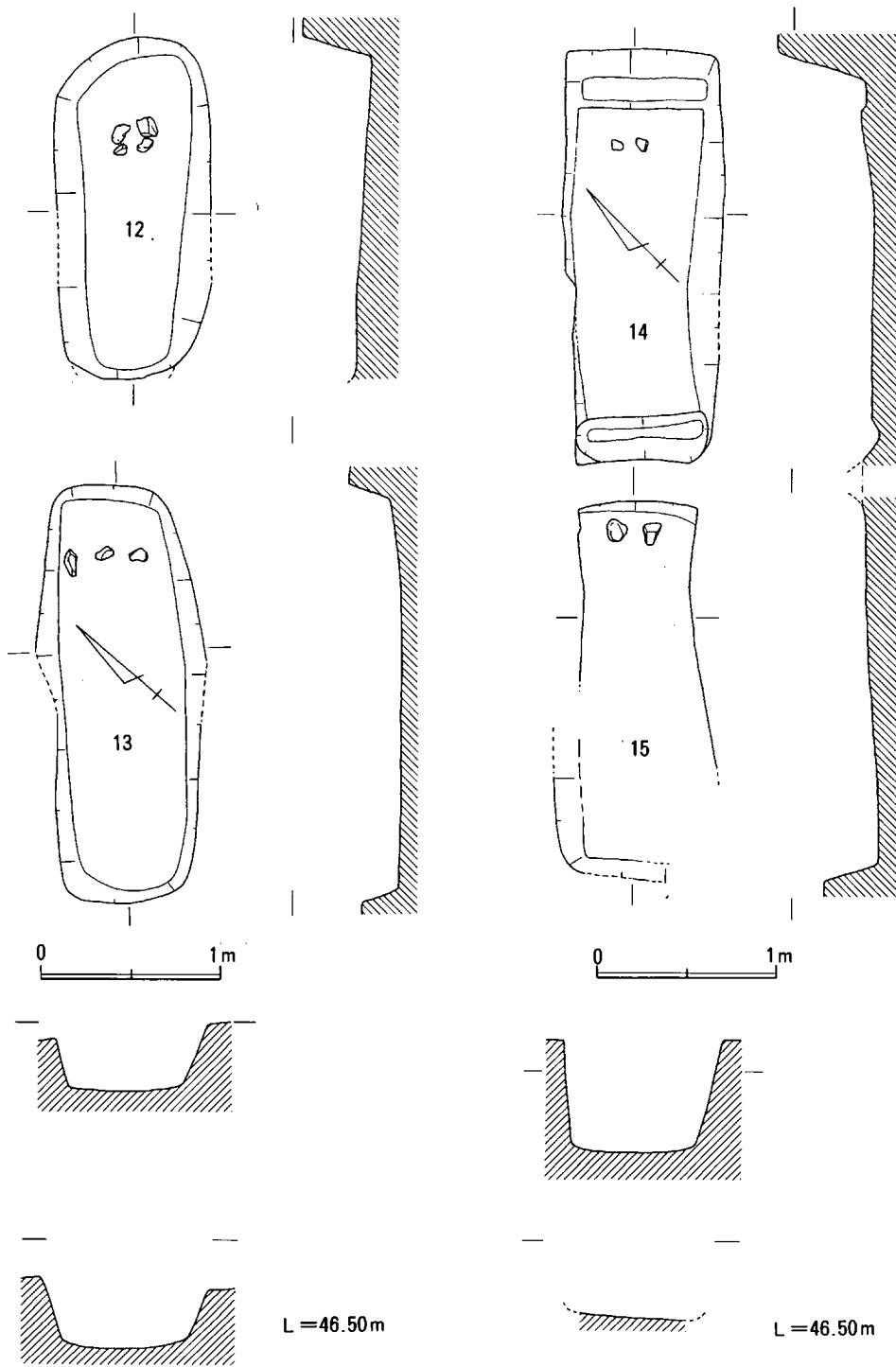
第96図 第9主体部 (S=1/40)



第97図 第10主体部 ($S = 1/40$)

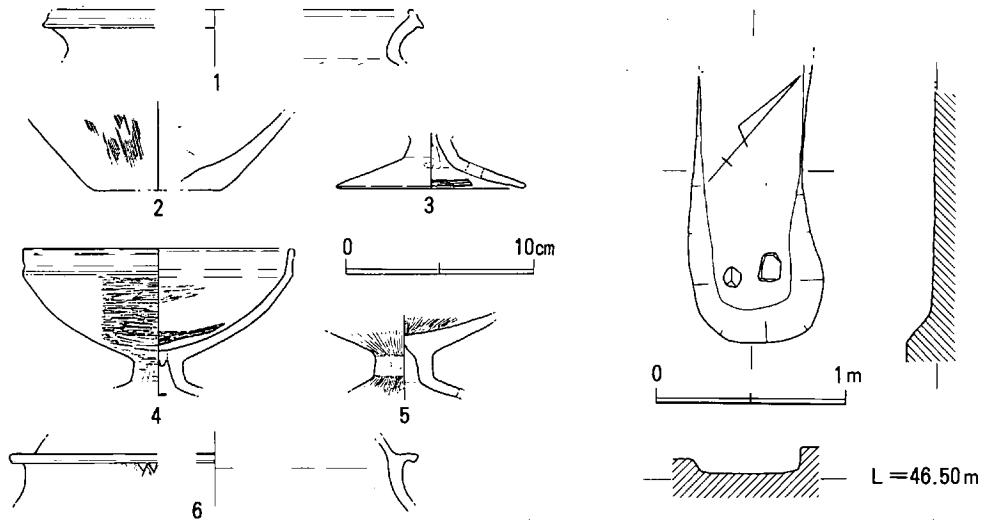


第98図 第11主体部 ($S = 1/40$)

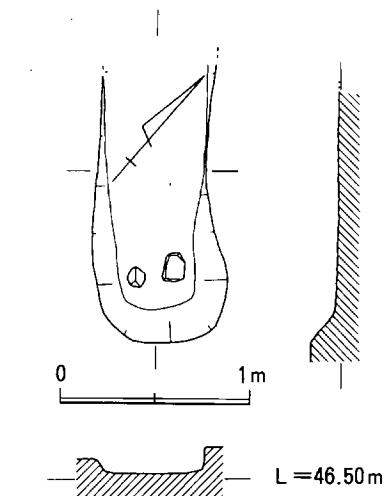


第99図 第12・13主体部 ($S=1/40$)

第100図 第14・15主体部 ($S=1/40$)



第103図 出土遺物1 ($S=1/4$)



第101図 第17主体部 ($S=1/40$)

第12・13主体部（第99図）

この2基は墳丘北部寄り位置する。第12主体部の規模は、長さ190cm、幅85cm、深さ40cmである。北寄りに4石の枕石が認められた。第13主体部の規模は、長さ233cm、幅95cm、深さ23cmである。北寄りに3石の枕石が認められた。

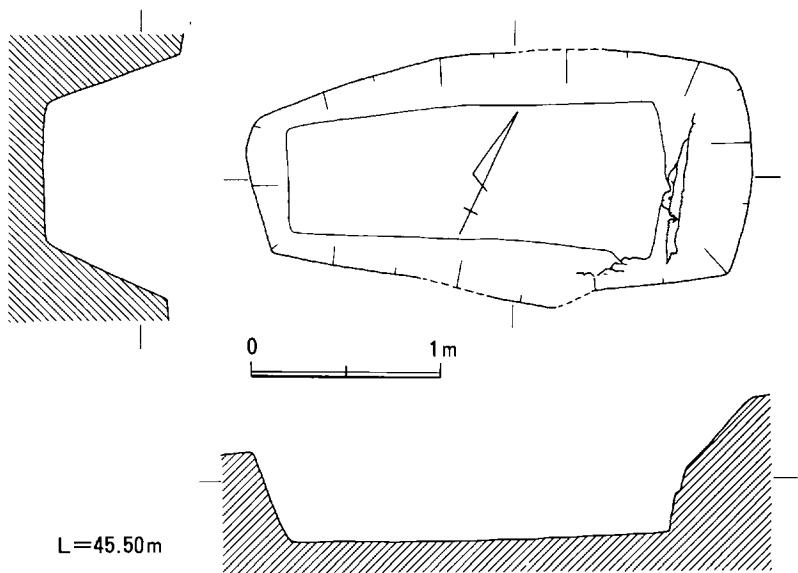
第14・15主体部（第100図）

この主体部2基は第7・11主体部により挟まれて肩部が切られている。14・15の先後関係は不明。第14主体部の規模は長さ226cm、幅90cm、深さ47cmである。床面で小口板を立てる掘り方を検出した。組み合わせ式木棺と考えられる。枕石が北寄りで出土した。

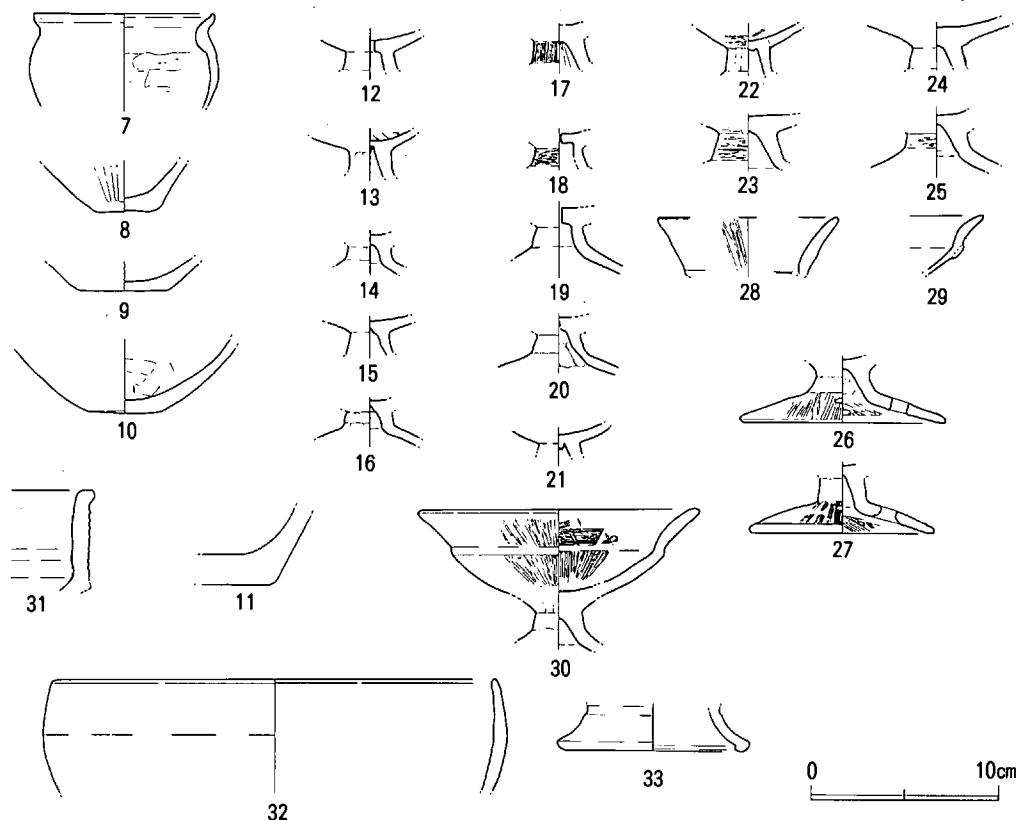
第15主体部は第14主体部の南に並んで検出された。

規模は長さ210cm、幅70cm、深さ30cmである。北寄りから枕石が一対出土

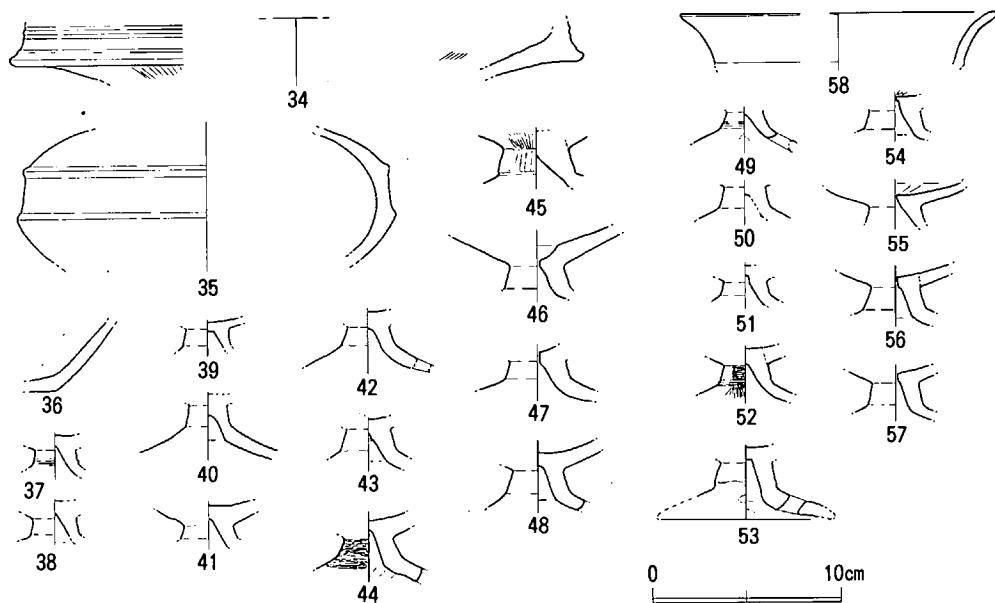
した。



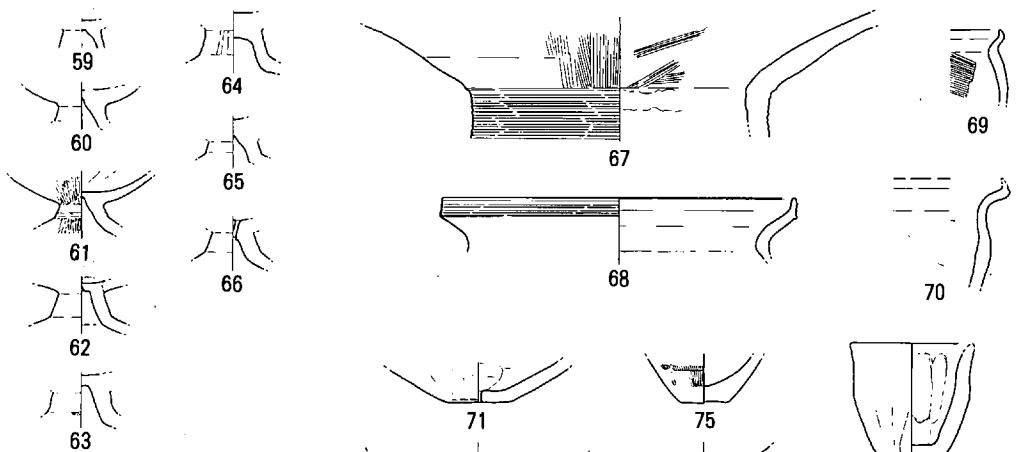
第102図 第19主体部 ($S=1/40$)



第104図 出土遺物2 (S=1/4)



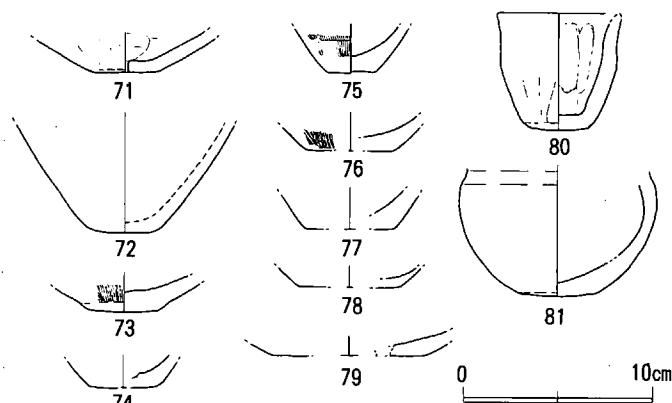
第105図 出土遺物3 (S=1/4)



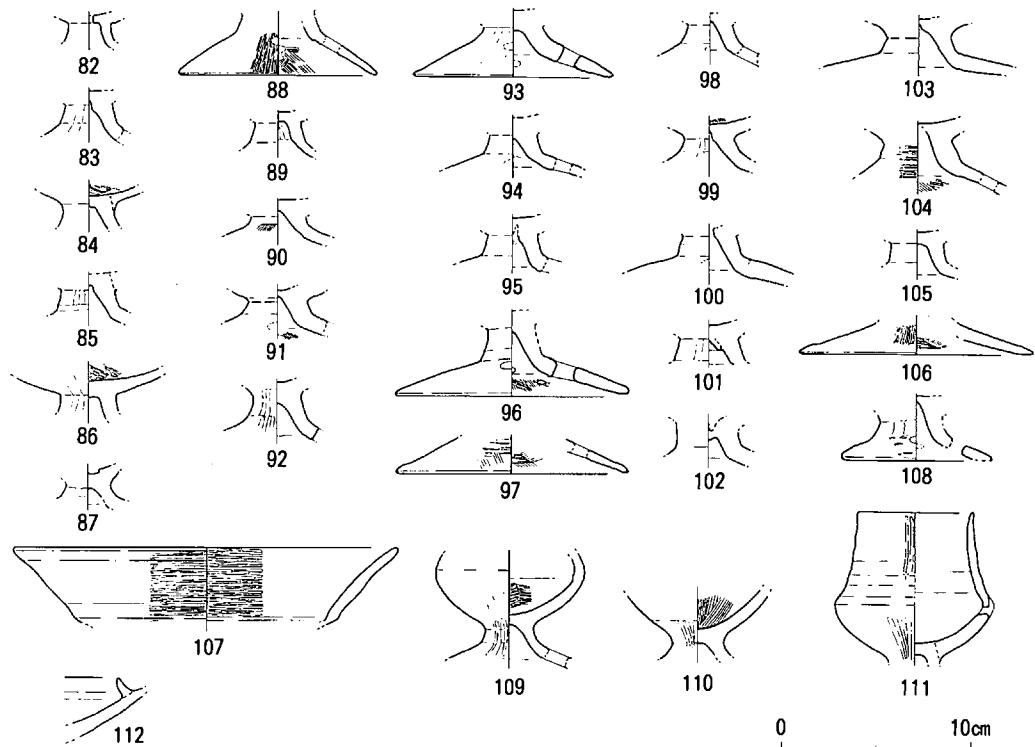
第106図 出土遺物 4 (1/4)

第17主体部 (第101図)

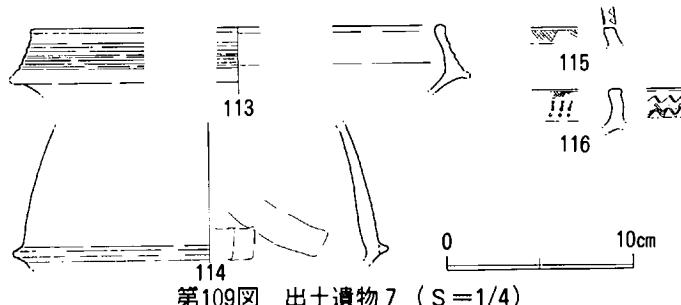
この主体部は、第1主体部南で検出した。残存状態は他の主体部に比べ悪い。残存長140cm、幅70cm、深さ14cmである。南寄りから一対の枕石が出土してい



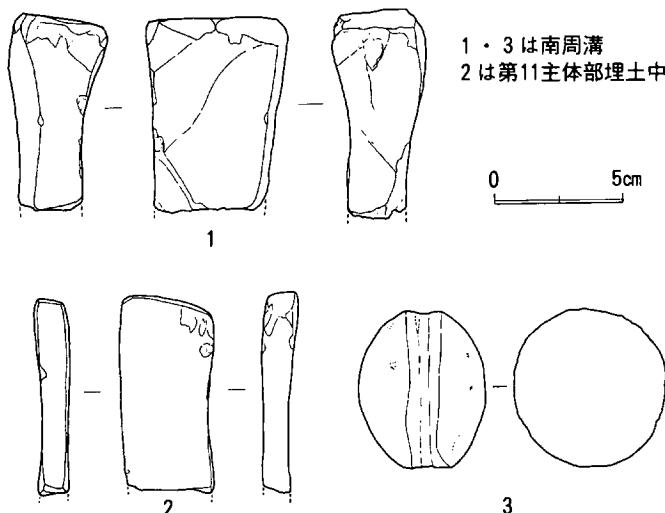
第107図 出土遺物 5 (S=1/4)



第108図 出土遺物 6 (S=1/4)



第109図 出土遺物 7 ($S=1/4$)



第110図 石製品 ($S=1/3$)

のである。1は第9主体部から出土した甕形土器の口縁部である。端部は欠損している。色調は赤褐色で、胎土に細砂粒を多く含む。2は底部で墳丘盛土中から出土した。外面の調整はハケ目の後荒いミガキで仕上げている。3・4・5は高壺形土器で3は西石列全面、4・5は第10主体部から出土した。いずれも短脚で4・5の脚部は縦方向の整形痕が認められ、その後横方向のヘラミガキの調整と思われる。壺部外面の調整はヘラミガキであるが方向が異なる。色調は3点共赤褐色を呈する。6は装飾高壺の脚裾部と考えられる。第14主体部から出土した。

第104図は東斜面から出土した土器である。7は鉢形土器である。8から11は壺・甕形土器の底部である。12から30までは高壺形土器である。31は器台または壺の口縁部で赤色顔料が認められる。胎土は赤褐色を呈し他の土器と同じである。32は鉢形土器、33は台付きの土器の脚である。

第105図は北(2号墳墓との境)周溝から出土した土器である。34は壺形土器の口縁部で赤色顔料が認められる。胎土は赤褐色で他の土器と同じである。35は壺形土器の胴部である。風化が進み調整不明。色調が茶褐色で、わずかに砂粒を含む。37から57までは高壺形土器である。

る。

第19主体部(第102図)

この主体部は墳端確認のトレンチで存在が明らかになった。位置は南周溝内である。規模は長さ267cm、幅132cm、深さ71cmである。枕石などは認められなかった。

3. 出土遺物

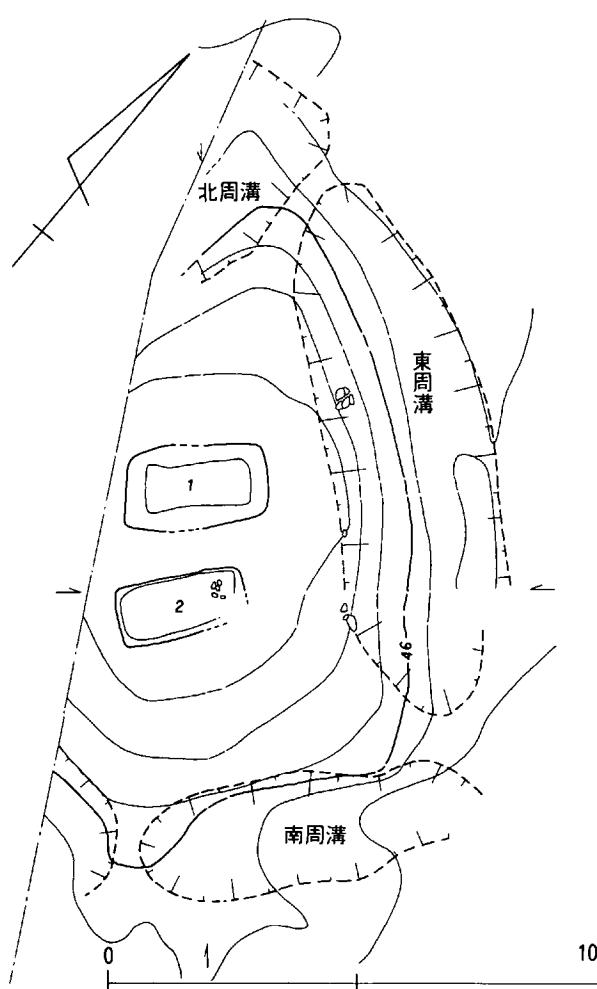
1号墳墓から出土した遺物の多くは土器で墳丘斜面や周溝からである。このため土器がどの主体部に供なったかは不明である。また、破片が多く全体の形が分かるものは少ない。土器は出土した区域ごとにまとめて図に示した。第103図の土器はその中でも遺構内か近くなどで出土したもの

風化して調整が分かれるものが少ない、いずれも短脚である。

第106図の土器も北周溝から出土した。いずれも短脚の高壺形土器の脚部である。

第107・108・109図は南周溝から出土した土器である。67は壺形土器の頸部である。68は甕形土器の口縁部、69・70は鉢形土器の口縁部である。71から79までは底部である。80・81は小型の鉢・壺形土器である。82から107までは高壺形土器である。108は台付き土器の脚。109から111は台付き直口壺と考えられる。111は胴部に穿孔が認められる。112は装飾高壺の一部の可能性が考えられる。113は小型器台の口縁部で、115・116は装飾高壺の口縁部端部と考えられる。114は台付きの土器が考えられる。

鉄器（第94図）では1の鉄剣が第4主体部から出土している。鉄剣の残存長16.8cm、最大幅2.3cmである。2は第1主体部から出土した不明鉄器で、残存長10.4cm、最大幅2.3cmである。



第111図 2号墳墓平面図 (S=1/150)

3は墳丘上の表土から出土した鉄鎌である。

玉類（第94図）は1の碧玉製管玉が第6主体部から出土した。長さ1.3cm、幅0.7cmである。2の碧玉製管玉は第4主体部からで長さ1.45cm、幅0.6cmである。3は濃青色を呈するガラス玉である。

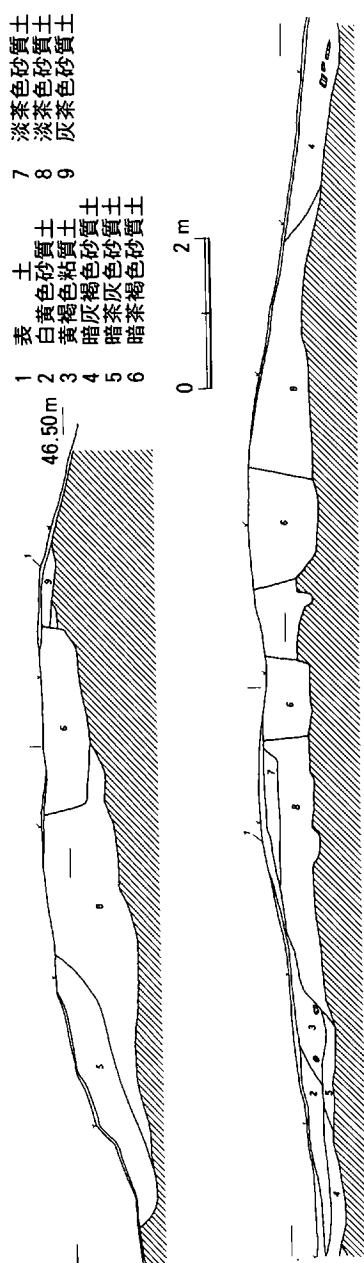
その外に砥石と石錐が出土している。（第110図）

第3節 2号墳墓

1. 墳丘と周溝

2号墓も1号墓同様、当初は円墳と考えていた。南東部（南）の周溝は地形の谷部と一致し、他の部分に比べ明瞭であった。しかし、北西部（北）・北東部（東）の墳端は不明瞭であった。墳端を確認するトレンチから北と南では土器などが出土し墳端が明らかになった。東でも土器などは出土したが、

墳丘盛土が厚く墳端は明瞭ではなかった。このためトレンチ幅を広げ確認を行った。このとき、第2主体部が確認された。墳丘盛土は淡茶色砂質土で、砂質土と粘質土の細かい互層であった。調査は計画路線部分のみのため全体は調査できなかった。墳丘は長方形を呈すると考えられ、長辺13m、短辺9mであった。



第112図 墳丘断面図 ($S=1/100$)

周溝は墳丘と地山を掘り窪めるが、全体が連続しない。

1号墳墓との切り合いは無く、先後関係は不明である。

2. 埋葬施設

第1主体部（第113図）

第1主体部は埋土が墳丘盛土とほとんど同じで、検出に困難した。地山の尾根筋が南寄りにあるためこの部分では地山を大きく掘り込んでいる。このことを手がかりに土壤を検出した。主体部の規模は、長さ285cm、幅160cm、深さ97cmである。

第2主体部（第114図）

この主体部は東西トレンチの観察で明らかになった。とのトレンチ内で枕石の端が断面に掛かった。埋土は第1主体部同様に盛土と似た土であった。床面北寄りで枕石が5石出土した。副葬品は第1主体部共に出土していない。

3. 出土遺物

2号墳墓からの出土遺物はほとんど土器で周溝内もしくは墳丘斜面からの出土である。南周溝から鉄鎌1点が出土している。遺物は出土した地区ごとに図示した。

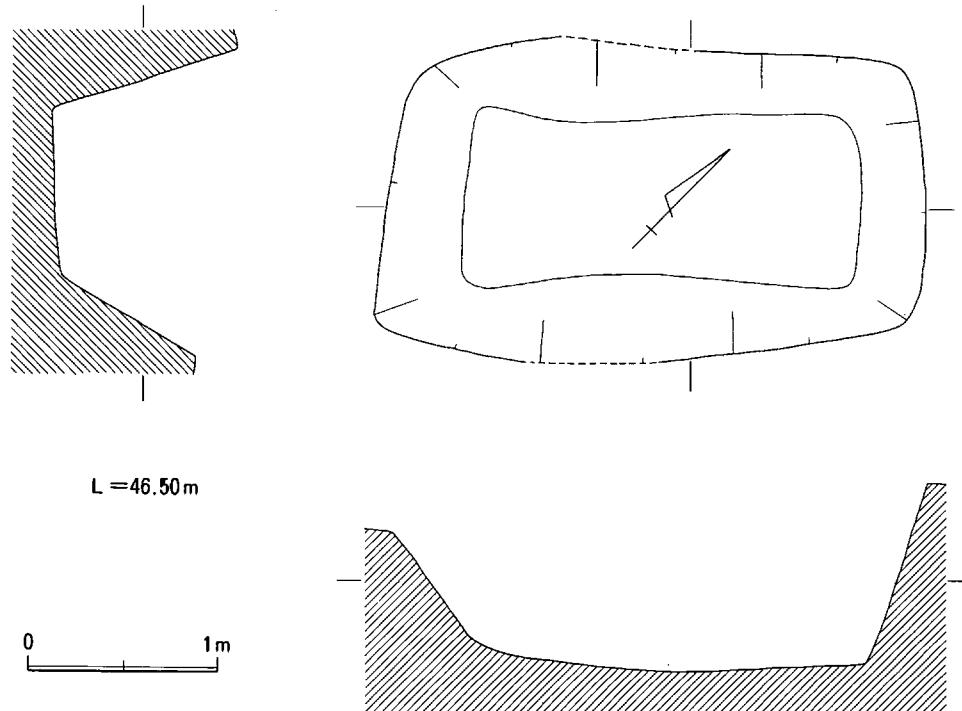
第115図は北と東周溝から出土した遺物である。122は壺形土器の口縁部の可能性がある。117から120は北から出土した甕形土器の口縁部である。123から125までは北から出土した甕・壺形土器の底部である。127から131、134から136・138は高壺形土器でいずれも短脚の高壺である。調整の判別ができる土器では外面はヘラミガキ、脚内面はハケ目である。145・146は台付き直口壺の口縁部と胴部と考えられる。

126・132・133・137・139から144までは東周溝から出土

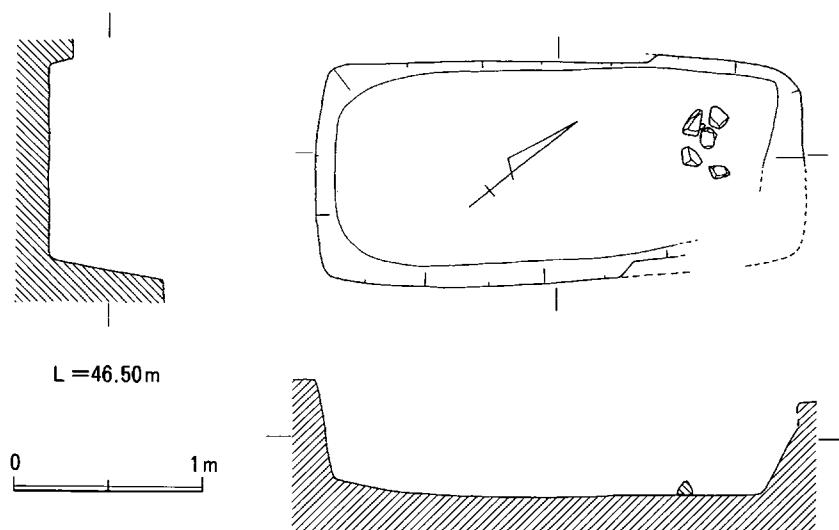
した高壺形土器である。147は小型器台の脚と考えられる。

148・149は台付き土器の脚部と考えられる。149の外面には半裁した竹管文を組み合わせた文様が施されている。

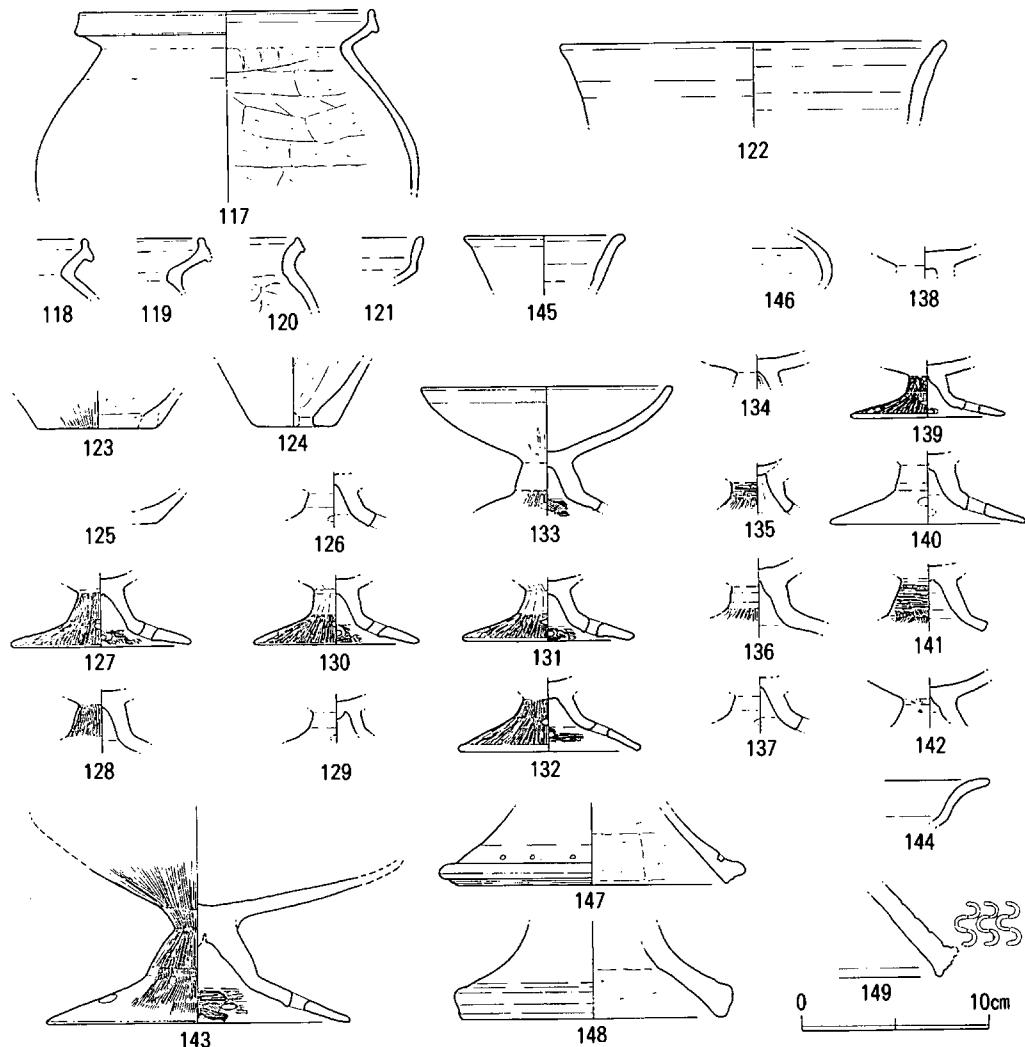
第116・117図は194・202を除いて全て南周溝から出土した土器である。150・151・156は壺



第113図 2号墳墓第1主体部平・断面図 ($S=1/40$)



第114図 2号墳墓第2主体部平・断面図 ($S=1/40$)



第115図 出土遺物8 (S=1/4)

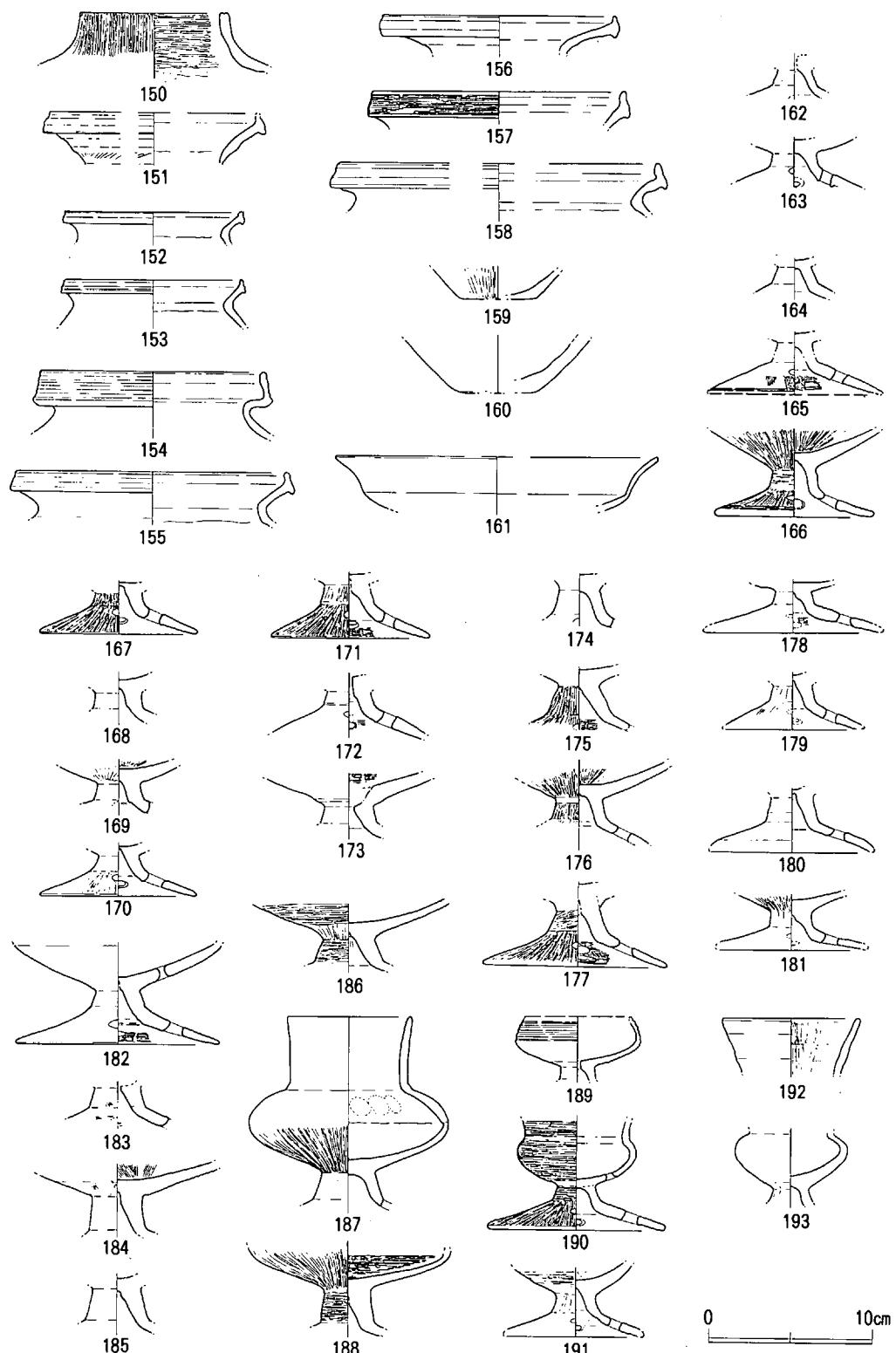
形土器の口縁部である。152から155と157・158は甕形土器の口縁部である。

161から186までは高壺形土器である。短脚の高壺で調整が判別できるもでは、外面はヘラミガキで脚内面はハケ目である。

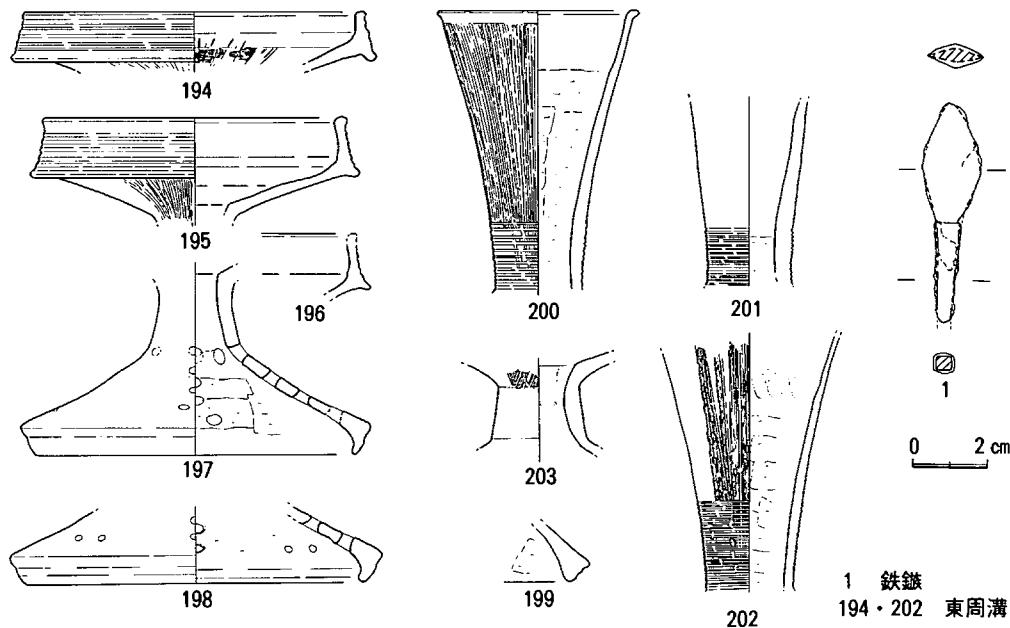
187から193は台付き直口壺である。185と190は赤色顔料が施されている。

194から199は小型器台で胎土が特殊器台などに用いられ土に類似している。200から202までは先の小型器台とセットになると考えられる細頸壺の口縁部である。胎土は小型器台と同じである。これらの土器には赤色顔料が施されている。

203は小型器台の脚部と考えられるが先の土器とは胎土が異なる。204から206は装飾高壺の口縁部と脚端部と考えられる。文様に小竹管文と波状文が施されている。色調は肌色を呈し、



第116図 出土遺物9 (S=1/4)



1 鉄鎌
194・202 東周溝

胎土はきめ細かいがわずかに砂粒を含む。坏内面に赤色顔料がわずかに残っている。

第4節 まとめにかえて

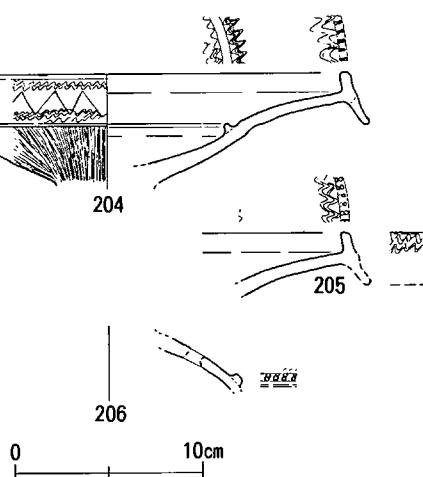
市内では新本立坂弥生墳丘墓や伊与部山墳墓群など同時代の著名な遺跡が知られている。これらは尾根上に位置し、特殊器台・特殊壺などが出土した遺跡である。⁽¹⁴⁾
⁽¹⁵⁾

本遺跡は尾根の高所からわずかに下った尾根鞍部に位置し、調査前は墳丘も

顕著でなかった。墳端には配石が巡っていた可能性が考えられるが、残存状態が悪く明確にできない。特に2号墳墓ではほとんど元位置の石は無かった。

出土遺物も墳丘端、周溝からの出土で個別の主体部の時期は明確にできない。土器全体でみると高坏形土器が主である。短脚の高坏形土器で弥生時代後期末の時期が考えられる。副葬品は少なく、1号墳墓の第1主体部と第4・6主体部から鉄器と玉類が出土した。管玉は径が5mmを越えるもので、弥生時代には出土例が少ない。

主体部で赤色顔料が認められた主体部は1号墳墓第1主体部と第3主体部であった。



第117図 出土遺物10 (S=1/4)

註

1. 高田明人「すりばち池3号墳」「総社市埋蔵文化財発掘調査報告」1 総社市教育委員会 1984年
2. 高橋進一「兎登木21号墳」「総社市埋蔵文化財調査年報」6 総社市教育委員会 1996年
3. 間壁葭子「高橋川下流域の無土器時代遺跡」「倉敷考古館集報」第2号 倉敷考古館 1967年
鎌木義昌・小林博昭「浅尾遺跡」・「宝福寺裏山遺跡」「総社市史」考古資料編 総社市史編纂委員会 1987年
近藤義郎「権現山の石器」「総社市史」考古資料編 総社市史編纂委員会 1987年
4. 村上幸雄ほか「真壁遺跡」「総社市史」考古資料編 総社市史編纂委員会 1987年
5. 「岡山県遺跡地図」(第三分冊) 岡山県教育委員会 1975年
6. 鎌木義昌「総社市西山周辺古墳群」「総社市埋蔵文化財調査概報Ⅰ」総社市教育委員会 1972年
7. 鎌木義昌・龟田修一「尼子山古墳」「総社市史」考古資料編 総社市史編纂委員会 1987年
8. 中田啓司・近藤義郎「井山古墳」「総社市史」考古資料編 総社市史編纂委員会 1987年
9. 近藤義郎「佐野山古墳」「総社市史」考古資料編 総社市史編纂委員会 1987年
10. 「全国遺跡地図」岡山県 文化庁 1985年
11. 谷山雅彦「福井地内の山土採取事業および分譲宅地造成事業に伴う発掘調査」「総社市埋蔵文化財調査年報」4 総社市教育委員会 1994年
12. 高田明人ほか「すりばち池古墳群」「総社市埋蔵文化財発掘調査報告」13 総社市教育委員会 1993年
13. 管玉の石材は、総社市教育委員会文化財室高橋進一の教示による。
14. 近藤義郎「新本立坂」総社市文化振興財團 1996年
15. 近藤義郎「伊与部山墳墓群」総社市文化振興財團 1996年



第55図版 遺跡遠景



第56図版 調査前近景



第57図版 1号墳墓第1主体部掘り上がり状況



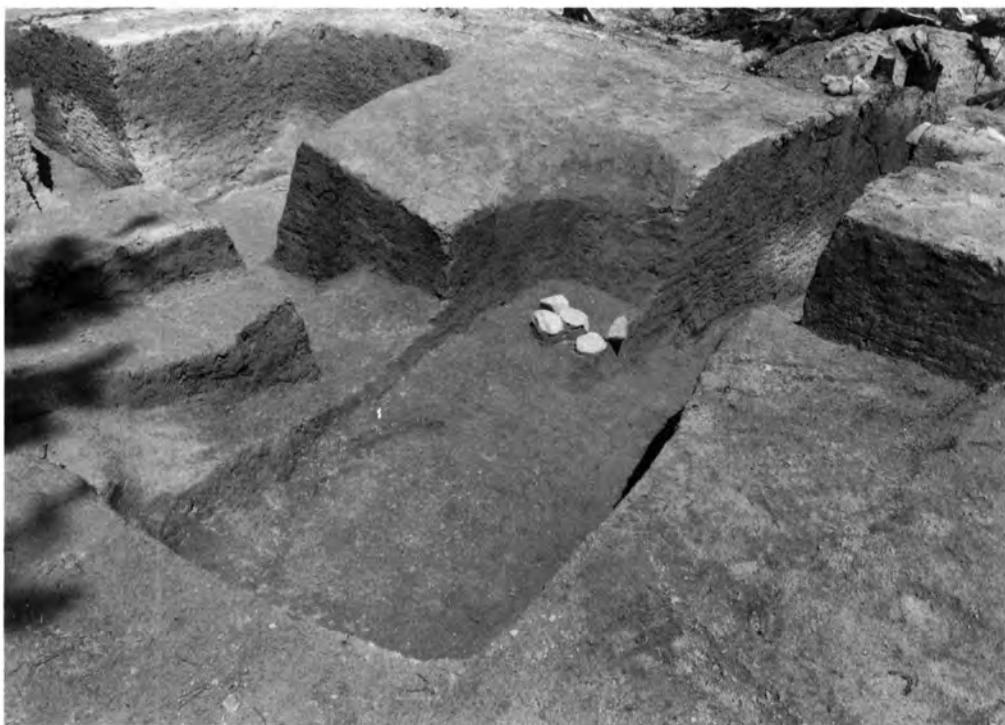
第58図版 1号墳墓掘り上がり状況



第59図版 1号墳墓第10主体部



第60図版 2号墳墓掘り上がり状況



第61図版 2号墳墓主体部

すりばち池南1号墳墓出土の赤色顔料について

岡山理科大学自然科学院 石 純

すりばち池南1号墳墓第1主体部および第3主体部内床面出土の赤色顔料の由来について検討した。

分析試料は、第1・3主体部とも主体部の床面から採取したものである。第1主体部は頭部付近と考えられる所で、第3主体部での出土状況は、枕石付近の床面にやや赤色した部分がみられた部分からの採集である。ただ、これら赤色顔料の集中部は、周りの床面に比べてやや赤くみえる程度の色調差であり、量的には非常に少量であった。

分析方法は蛍光X線分析およびX線回折を使用して分析した。この結果、蛍光X線分析では赤色顔料の主要成分分析を実施した。そして、第118・119図、表5に示した分析結果となり、第1および第3主体部の赤色顔料とも微量の水銀(Hg)が検出された。また、鉄(Fe)も検出されたが1~3%と少ない。次に、X線回折で含有されている鉱物の同定を行い、第1・3主体部の赤色顔料とも辰砂のピークが見られたが、赤鉄鉱などの鉱物は確認されなかった。

以上のことから、1号墳墓第1・3主体部の両者で検出された赤色顔料は、朱と考えられる。また、両埋葬主体とも赤色顔料の出土状況から遺骸に施されていたことが推測される。

表5 1号墳墓第1・3主体部赤色顔料分析値(%)

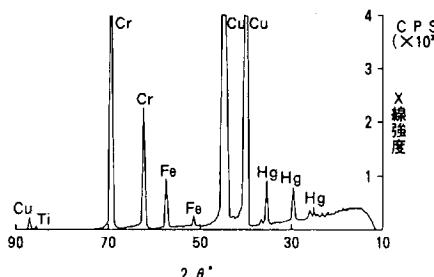
試料名	Si	Fe	K	Al	Hg	Ti	Na	Mn	Ca
第1主体部	75.80	1.55	5.03	14.49	0.68	0.12	2.02	0.02	0.25
第3主体部	76.82	2.29	4.61	13.74	0.25	0.23	1.48	0.03	0.25

—測定条件—
X線管球：クロム(Cr)
電圧・電流：30KV・30mA
分光結晶：LiF
検出器：シンチレーション計数器
測定法：真空

Hg：水銀
Fe：鉄
Ti：チタン
Cr：クロム管球
Cu(銅)マスク使用

—測定条件—
X線管球：クロム(Cr)
電圧・電流：30KV・30mA
分光結晶：LiF
検出器：シンチレーション計数器
測定法：真空

Hg：水銀
Fe：鉄
Ti：チタン
Cr：クロム管球
Cu(銅)マスク使用



第118図 すりばち池南1号墳墓
第1主体部出土赤色顔料の蛍光X線分析チャート

第119図 すりばち池南1号墳墓

第3主体部出土赤色顔料の蛍光X線分析チャート

金頭山城跡

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経過

総社市内は市域の北部が山間部であり、主要道は国道180号線である。これに岡山総社インターから北に山陽道が開通されている。近年交通網の整備と同じく通信網も進展し拡大している。携帯（自動車）電話はこの代表であり、市内にも中継局が建設されつつある。これらは、国道や自動車道を視野にいたるものである。

今回の調査地点は尾根が北東から南西に延び、このため国道が大きくカーブする。この尾根上には、すでにテレビ中継局が設置されていた。

業者から中継局設置のため、文化財の事前の問い合わせがあったので現地で遺跡の有無を確認した。現地は美袋北の標高290.6m、金頭山である。この地域の文化財が記載されている「昭和町史」によれば美袋にあった大渡城跡の候補としても上げられていた。この山頂からは高梁川流域が一望できる。このため既存のテレビ局中継局があり、作業道が整備されている。現地では尾根を人為的に改変した跡が明瞭に認められたため、遺跡があることを業者に連絡し保存のための協議を行った。しかし、事業の性格から別の地点を選ぶことが不可能であった。また、作業道ですでに城郭の東部分を削られていることや城郭の規模が小さいことから事前の発掘調査を実施することとした。

第2節 調査の体制

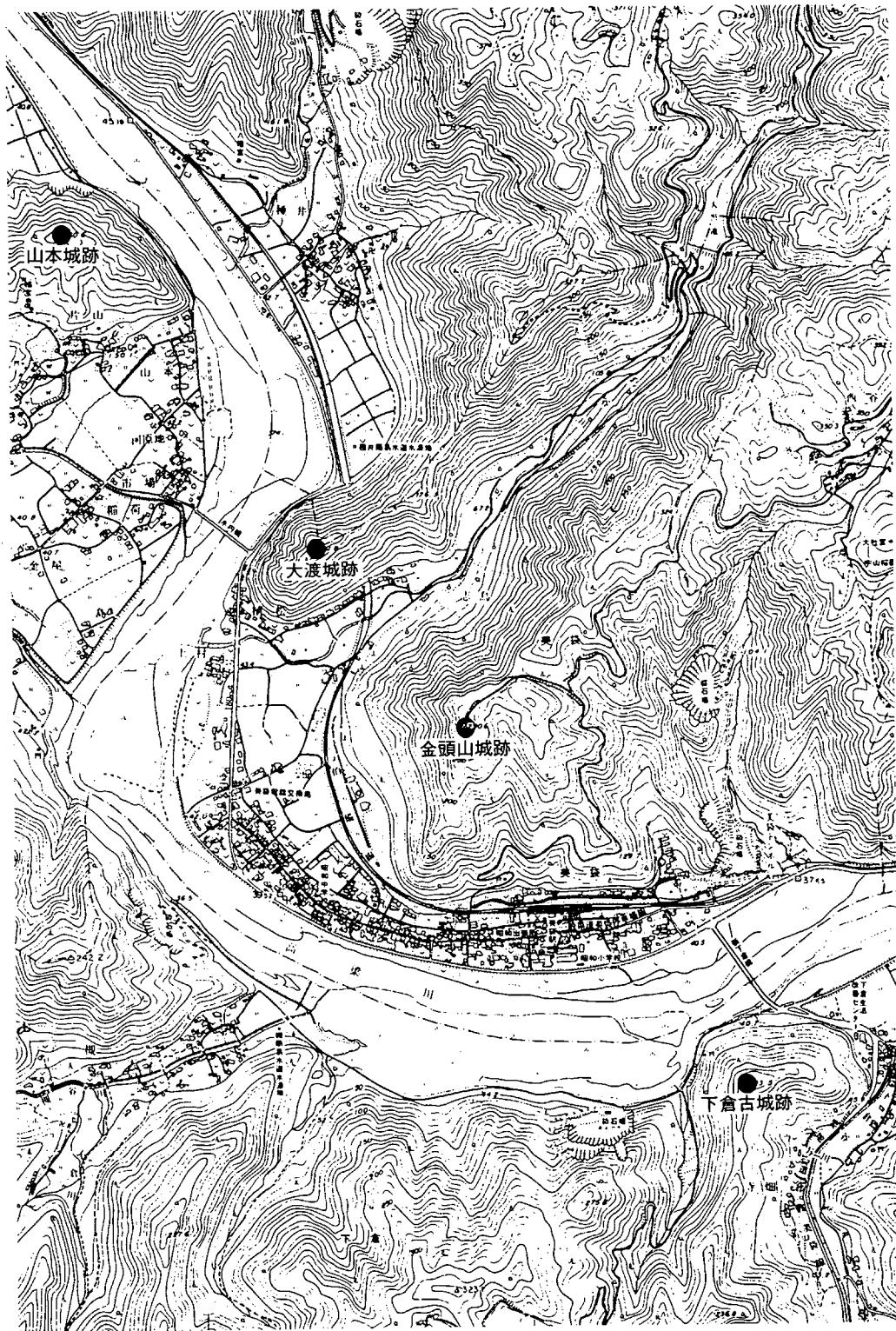
発掘調査は、エヌ・ティ・ティ中国移動通信網株式会社の経費負担により総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施することとなり、谷山雅彦が担当した。

調査は、平成8年7月29日から8月23日まで実施した。発掘調査にあたり開発業者・会社に種々の便宜を図っていただいた、また総社市文化財専門委員秋政方一から多くのご指導とご教示を得たことを記し、厚くお礼申し上げます。

調査組織

文化財室

参事兼室長	村上幸雄	(調整担当)
室長補佐	加藤信二	(庶務担当)
主任	谷山雅彦	(調査担当)
主任	土家慶子	(庶務担当)



第120図 周辺位置図 ($S=1/10,000$)

第2章 調査の概要

第1節 位置と環境

金頭山城跡は、総社市美袋1497番3の一部に所在する。

本城は、今回の事業計画を契機に城跡として確認された。これ以前には、美袋では北西の丘陵上に大渡城跡が推定されていた。また高梁川右岸の原に山本城跡が、下倉に下倉古城跡が知られていた。昭和45年に刊行された「昭和町史」では本城が大渡城という説もあるが、現地を確認したが平坦部が狭いことから、現在大渡城跡とされている丘陵地が有力地とされた。それ以前の「吉備郡史」⁽²⁾には総社市内に29城あり、美袋には2城あるとされている。「大渡城」と「岸の上の要害」である。城主や築城時期は不明で、大渡城跡は陶山（田邊）氏・結城氏などが城主の名として見える。近隣の山本城跡・大渡城跡・下倉古城跡とともに、高梁川に突き出した200m以下の丘陵上に位置している。これに比べ金頭山城跡はさらに100mほど高所に位置する。

第2節 金頭山城跡

今回の調査は、携帯電話の中継局局舎と鉄塔部分であり、面積は96m²ほどである。

城跡は既存のテレビ中継局が設置されている高地が1の段で最も高い、おおよそ80m²の面積である。これから北に尾根を高所側を切断し平坦な段を設けている。この段のうち最も広いのが2の段で残存面積約190m²である。主要な段はこの2つの段であり、これより北の段は狭く守りの目的で設けられていると考えられる。

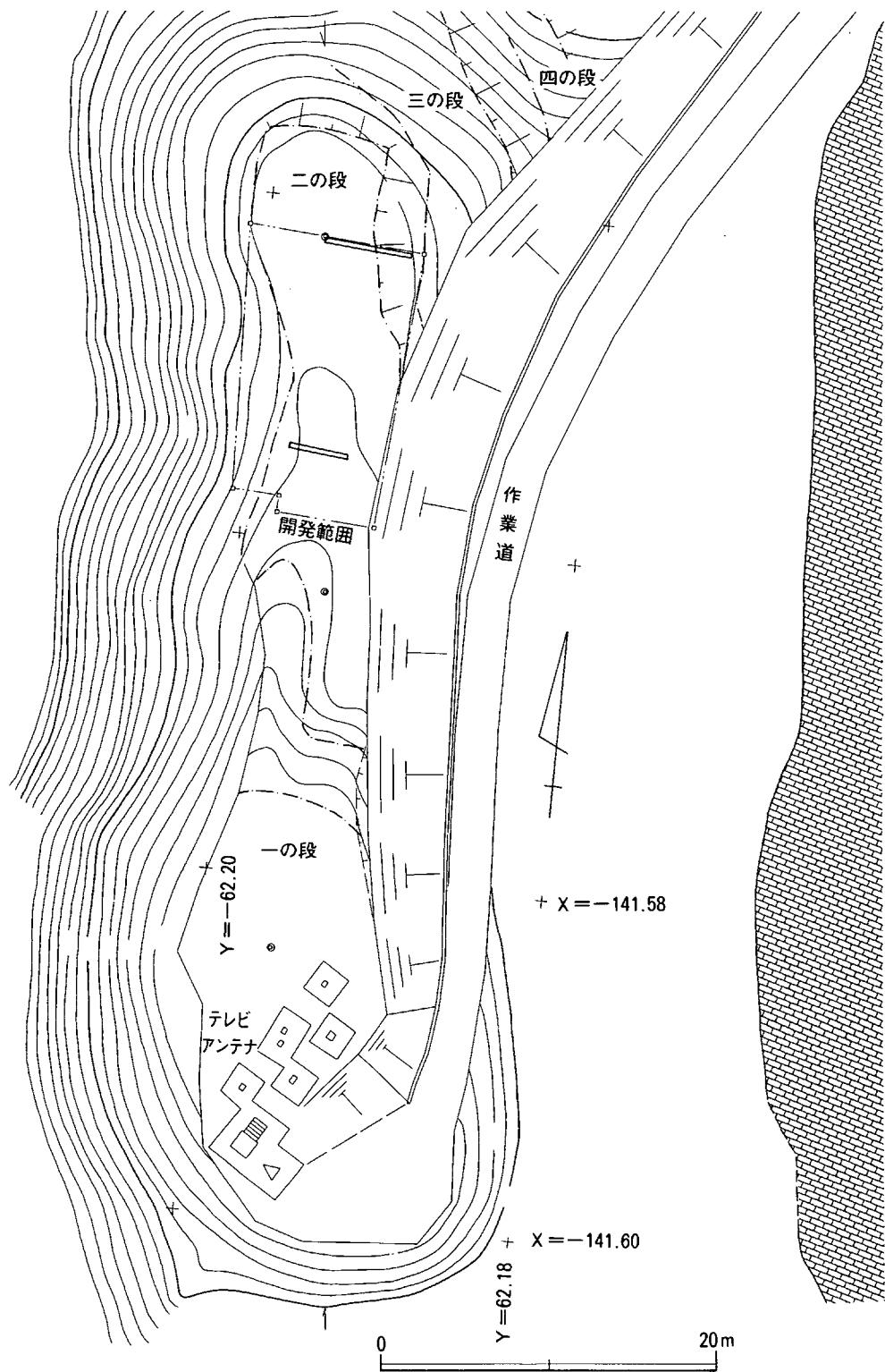
建設設計画地はこの2の段であり、建物跡などが想定された。調査は平坦部の表土を人力で除去し地山で遺構検出を行った。調査の結果、柱穴などの遺構は確認できなかった。遺物も出土していない。

第3節 まとめにかえて

今回の調査では、尾根の平坦部で柱穴などの遺構は検出されなかった。また、尾根全体も他の城跡に比べ狭く規模が小さい。しかし眺望はすぐれているので、城と城を結ぶ枝城として狼煙などを上げるなど見張りには重要な位置にあったと考えられる。

註

1. 大月雄三郎『昭和町史』昭和町役場 1970年
2. 永山卯三郎『吉備郡史』巻中 岡山県吉備郡教育会 1937年



第121図 調査地位置図 ($S=1/400$)



第62図版 調査前近景（北西から）



第63図版 調査後近景（北から）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	そうじやしまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう						
書名	総社市埋蔵文化財調査年報 7						
副書名							
卷次							
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報						
シリーズ番号	7						
編著者名	村上幸雄, 谷山雅彦, 武田恭彰, 平井典子, 前角和夫, 高橋進一, 松尾洋平						
編集機関	総社市教育委員会						
所在地	〒719-11 岡山県総社市中央1-1-1 TEL 0866-92-8363						
発行年月日	西暦1997年9月29日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すりばち池 みなみふんばぐん 南墳墓群	岡山県総社市 小寺	33-208		34度 41分 30秒	133度 44分 50秒	1997.01.20～ 1997.03.31	200m ²	市道蔽田兎登木線 改良工事に伴う事 前調査
金頭山城跡	総社市美袋	33-208		34度 43分 17秒	113度 39分 15秒	1996.07.29～ 1996.08.15	96m ²	自動車（携帯） 無線中継局建設 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
すりばち池 南墳墓群	墓	弥生	土壙墓	弥生式土器 管玉2, ガラス 玉1 鉄剣1, 鉄鎌2			弥生時代後期末の 墳丘をもつ墳墓遺 跡	
金頭山城跡	城館	戦国	段				眺望のきく尾根頂 部に位置する枝城	

総社市埋蔵文化財調査年報 7

1997年 9月 29日 印刷

1997年 9月 29日 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印 刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

